春日部市市民活動センター
開所10周年記念
ぽぽらフェスティバル2021
開催記念誌

「市民活動でつくる持続可能な地域社会」

2022年（令和4年）３月

ぽぽらフェスティバル2021
実行委員会

ぽぽら春日部

南所10周年記念

ぽぽらフェスティバル2021

12月4日(土)・5日(日)～

市民活動でつくる
持続可能な
地域社会

イベント詳細は裏面をご覧ください。

保健センター
「健康フェア」も
同時開催！

ぽぽらフェスティバル2021
特設WEBサイト▶

主催：ぽぽらフェスティバル2021実行委員会

どうなる？
これからの地域社会

シンポジウムおよびトークセッションは事前予約制となっております。
オンラインでもご視聴いただけます。

お申し込みはこちらまで 048-731-3550

※右のQRコードからもお申し込みいただけます。
※感染症対策のため、各会場定員を設けて実施します。

12月4日 土曜日　シンポジウム・トーク・パフォーマンス

オープニング・シンポジウム

10:00〜12:00

これまでの10年これからの10年

10周年を迎え、今改めて「市民活動ってなに？」ということをバラエティに富んだ市内の市民活動団体さんとともに考えます。

トークセッション1

14:00〜16:00

市民活動センター10年の軌跡とこれから

2011年のセンター開所から10年。
設立に関わった当時のワークショップメンバーと一緒に10年を振り返り、これからを展望します。

団体パフォーマンス

12:00〜14:00
16:00〜18:00

マジックショーやクリスマスリース作り、文化団体の実演や手作り体験等、出展団体のさまざまな企画をお楽しみいただけます。
※感染対策のため入場を制限する場合があります。

12月5日 日曜日　トーク・パフォーマンス

トークセッション2

10:00〜12:00

**Z世代の若者に聞きたい！
市民活動のリアルな未来**

現役の学生の声から知るリアルな世代間のズレ。世代を超えて学び合い、持続可能な市民活動のヒントを探ります。地域をよくするアイデアが生まれるかも！？

トークセッション3

14:00〜16:00

**活動の世代交代〜
それぞれのカタチをみつける**

講師　フュージョン長池 富永一夫さん

NPOの後継者育成の成功事例として全国的にも知られている団体の講師をお招きして、団体の高齢化や世代交代について一緒に考えます。

団体パフォーマンス

12:00〜14:00

家族で楽しめる大型かるたや健康体操の実演、地域を良くするアイデアのプレゼン等の出展団体の企画をお楽しみいただけます。
※感染対策のため入場を制限する場合があります。

12月4日〜2022年3月6日　展示・動画

活動の展示

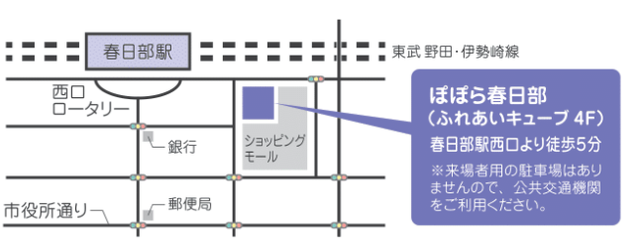
交流・ミーティングスペースにて各団体の活動をパネル展示でご紹介。3月までの3ヶ月間で約40団体の活動を入れ替わりで展示。

市民活動を紹介する
YouTube
チャンネルを開設！！

オンライン活動見本市

ぽぽら春日部で活動する市民活動団体の動画を一挙公開！
10周年にまつわる企画動画も順次公開予定です。

春日部市市民活動センター（ぽぽら春日部）
TEL 048-731-3550　FAX 048-734-1605
〒344-8578 埼玉県春日部市南 1-1-7 ふれあいキューブ 4F
http://kasukabe.genki365.net
指定管理者（株）コンベンションリンケージ



目　次

	Page
１．記念誌発刊にあたって	1
２．実行委員長より	3
３．シンポジウム	6
４．トークセッション1	31
５．トークセッション2	60
６．トークセッション３	80
７．　団体交流会	108
８．　活動の実演	120
９．動画見本市	123
10．活動の展示	125
11．実行委員	131

ぽぽらフェスティバル 2021 記念誌発刊にあたって

春日部市市民活動センターが開所した 2011 年 11 月から 10 年が経ちました。毎年 12 月の第 1 週に開催していた周年事業を本年度は「ぽぽらフェスティバル 2021」として開催しました。

今回のフェスティバルは実行委員を公募で募集し、市民活動センター職員も実行委員として加わり、実行委員会が主催者となって開催いたしました。実行委員会の歩みを簡単にまとめます。

2021 年 5 月 15 日及び 19 日	利用者会議にて実行委員会方式での開催を了承
6 月 2 日から 6 月 18 日	実行委員の募集
6 月 21 日	実行委員の決定
7 月 5 日及び 6 日	第 1 回実行委員会 ・実行委員会のあり方、役割の検討
8 月 2 日	第 2 回実行委員会 ・委員長、副委員長の選出 ・コンセプト、企画案、スケジュールの検討
8 月 30 日	第 3 回実行委員会 ・企画案及び広報かすかべ入稿原稿検討
9 月 14 日	第 4 回実行委員会 ・企画の具体案及び広報計画の検討
9 月 29 日	第 5 回実行委員会 ・シンポジウム、トークセッション、団体交流会の内容検討 ・実演、動画、展示の募集要項検討
10 月 5 日及び 9 日	利用者会議にて実行委員会より募集要項説明
10 月 20 日	第 6 回実行委員会 ・シンポジウム、トークセッションの内容、登壇者の検討
11 月 15 日	第 7 回実行委員会 ・シンポジウム、トークセッション、団体交流会の進捗確認 ・実演、展示の実施スケジュール検討
12 月 1 日	第 8 回実行委員会 ・シンポジウム、トークセッション、団体交流会の運営確認
12 月 17 日	第 9 回実行委員会 ・12/4,5 の開催報告、成果と課題の共有
2022 年 1 月 18 日	第 10 回実行委員会 ・シンポジウム、トークセッションの記録を中心とした記念誌の発行、全体を総括する「報告書」作成検討

上記の実行委員会での議論をふまえ、本記念誌を発行するに至りました。フェスティバルで行われた内容もさることながら実行委員会での議論が「市民活動とは何か」を追求する真摯な取り組みであったと確信しております。その軌跡を多くの方と共有し、来年度以降のフェスティバルの礎とすべく、ここにぽぽらフェスティバル 2021 記念誌として発刊いたします。

ぽぽらフェスティバル 2021 実行委員会

皆さんは「多数決」についてどう思われるでしょうか。集団で何かを決めていくとき、多数決をとって手が多く上がった方の意見を選択するという、会議ではよく行われる手法です。小学校の学級会から、企業の総会まで、よく目にする光景だと思います。しかし、この多数決には、必ず「数が少なくて意見が採用されなかった」人たちがいます。この人たちにはたいてい不満が残ります。その不満が、決定に対する不参加であったり、離脱であったりという不協和音を残すのですが、物事を進めるためにはどうしても決定が必要で、そのために多数決はある種効率のよい手法であることは確かなのです。

私はあまり多数決が好きではありませんが、実は好きではないというほど、多数決と正面から関わったことが無いのも事実でした。どれに決まってもあまり気にならないという程度の要件でしか使う機会が無かったとも言えます。しかし「多数決は、多数決で決めることが重要ではなく、多数決に至る過程でどう話し合ったかということが重要だ」という言葉を、今回のぽぽらフェスティバルで経験することが出来ました。普段「社会の課題に対して、対話をしながら考えていきましょう」という活動をしている私にとっては、自分たちの活動の意義のエビデンスを得たような、そんな気分になりました。それはどういうことだったか。少しお話をしていきたいと思います。

去年夏、「ぽぽらフェスティバルを実行委員会形式でおこないたい」との話を聞いたとき、私の中で浮かんだ言葉は「当然！」でした。市民活動センターの周年行事、しかも 10 周年の記念であれば、私たち市民がやらなくて誰がやるの？それが正直な感想だったのです。センターの職員の方たちが「事業の一環」として行うものでも、どこか特定の団体に「委託」するものでもない、私たち市民活動団体のお祭り。長く続くコロナ禍にあって、停滞していた空気を吹き飛ばすような、わくわくした気分になったことを覚えています。このセンターが開設する前の市民ワークショップから関わってきた私は 10 年間という時間への感慨もあり、さっそく実行委員の募集に応募をしました。しかし、後日始まった委員会で、私は「対話」と「合意」の難しさを実感することになったのです。

私たち市民団体は普段、自分たちのミッションに沿った活動をしています。教育関係、福祉関係、環境、健康、まちづくり・・その分野は多岐にわたり、普段はあまり関わることがありません。集まった実行委員のメンバーは活動分野も、年齢も、活動手法、状況、すべて違う人たちですから、一つひとつの事柄を決定するだけでも、簡単にはいきませんでした。

最初の課題は、「実行委員会は何をするのか」ということでした。今回の委員会は、応募で集まった登録団体有志と、センター職員（事務局）の方々で構成されていますが、どちらが主体となって進行するのかということです。「実行委員長を決めて団体有志が主導する」派と、「事務局がすべてを仕切り、有志の人は意見を出す」派の議論が初めての討議。様々な意見が飛び交いました。私のような単純な人間は、役割分担はあるとしても、応募したのだからすべて自分たちで行う方が良いと考えてしまいますが、例えば市との関係があるから事務局が決めて私たちが実働をした方が良いという考えや、市民が主導してしまうと特定の誰かに負担がかかるという考え、それぞれの立場や経験からくる言葉には説得力があり、簡単にまとまりません。

一番長く議論したのは「この事業は何の目的で行うのか」ということでした。とにかく楽しくしたい、市民活動とは何か、について議論したい、調査をしたい・・真っ向から対立する意見も出

てきて、普段ならばもう嫌だと思ってしまうところなのですが、さすが皆さん長く活動をされてきた方たちです。自分の意見を言うことに抵抗はなく、人の意見を聞こうとする人たちでした。なにより素晴らしい思ったことは、「納得したら途中でも自分の意見を変えることができる」人たちだったということでした。これはとても勇気がいることです。話し合いの目的をしっかりと理解していなければ、意地の張り合いで終わってしまうところなのです。最初は当然意見がぶつかりましたが、そこに敵対心や自己中心的な感情がないので、険悪な雰囲気にはなりませんでした。真剣に考え、真剣にぶつかり、そして合意していく。あらかた意見が出尽くし、お互いの主張もわかった段階で、徐々に自分の気持ちがどちらに傾いているのかも自覚してきたころ、最終決定を多数決に委ねました。何となく気分としてはお互い理解しているのだけれど、どこかで議論を終わりにしなければいけない、そのための多数決です。実行委員長として「では、多数決をとりたいと思います」という発言をしましたが、これほど納得してこの言葉を使ったことはありませんでした。まさに「合意」です。もちろん多数決ですから、反対の意見もありました。ここで大事なのは、多数派の意見を持った人たちが少数の意見の人たちの主張を受け入れてその先の企画を立ていったことだと思います。配慮というよりも、自分たちの考えの中に少数の人たちの視点を取り入れていったという表現が正しいかもしれません。この過程がまさに市民活動だと、これができる人たちがこのセンターには集っているのだと思うと、10 年前、市民活動って何だろう？というところからスタートした私たちの市民活動センターはこんなにも機能している場所なんだ！と多くの人に伝えたいと、誇らしく思ったのです。

市民活動は市民が主体的に動くものです。誰かに何かを言われたからやるのではなく、自分たちが課題に感じることを解決するために、自らが動きます。ただ、よく人にも言われ、また感じることは春日部ではこうした活動が「点」でとどまり、「線」にならないのだということです。私は最近、様々な社会の課題の多くの根源は共通しているのではないかと考えていますが、何が共通なのかは自分たちの活動だけをしていては見えてきません。しかし、自分たちの課題と同時に共通の原因を解決しようと動かないと、結局自分たちの課題も解決できないのではないでしょうか。例えば貧困対策としての「こども食堂」の活動を頑張っている方たちは、その日、目の前に来た子どもの命を救うことはできますが、貧困そのものをなくすということが出来ません。不登校について考える活動をされている方は、例えばいじめが原因で学校に行けなくなった子供のサポートができても、同じ手法で DV を受けている子どもを救うことが出来ません。目の前の課題に取り組みつつ、他の課題と出会うことで社会全体の課題を認識するということは、イングルイシューでは難しいのです。重要な課題に取り組む団体が個別に活動していても点でしかない。それを線にし、さらに面にしていく。これが市民活動の意義であり、市民がまちづくりに関わるべき理由なのではないかと思います。

まったく立場、意見の違う人たちが集い、対話をし、合意してまた先に進む。素直な意見はむき出しの心そのものですから、相手を短い期間で知ることが出来ます。感情や観念を超えた話し合い。お互いの関係性を個人ではなく、社会的なものに変えていく、そのために社会課題に取り組むということが結局は私たち自身が社会をつくりあげていくということにつながるのだと、そしてこのことを実現できるのが、多くの市民活動団体が集う、市民活動センターなのであると、10 年経ったぽぽら春日部の今をみて感じました。

ぽぽらフェスティバル 2021 は、3 月まで続きます。沢山の団体が展示や動画で自分たちの活動を伝えています。私たちの住む地域にはどんな課題があって、それに対してどう取り組んでいる人たちがいるのか、それを知ることから市民活動がはじまる。

これまでの 10 年の先にあるこれからの私たちのくらしを、一緒に話し合う場所がこのセンターであってほしいと心から願っています。

ぽぽらフェスティバル 2021
実行委員長　吉田理子

春日部市市民活動センター開所10周年記念

ぽぽらフェスティバル2021

シンポジウム

「これまでの10年これからの10年」

〇ファシリテーター
吉田 理子（フェスティバル実行委員長）
中川 俊廣（フェスティバル実行委員）

10:00～10:15 オープニングプログラム

・主催者挨拶　実行委員長 吉田理子
・来賓ご祝辞　春日部市長 岩谷一弘様
・施設管理者挨拶 センター所長 武田淳一

10:15～12:00 パネルディスカッション

1. パネラーからのご発表

・大滝 敞 様　（おもちゃの病院）
・山本 夏聖 様　（しっぽとかぞく）
・山口 英治 様　（健康クラブ）
・時田 美野吉 様（自治会連合会）
・吉田 徳志 様　（まちづくり応援団）

2. パネラーとの質疑応答

3. 会場のみなさんを交えての懇談

4. まとめ

2021年（令和3年）12月4 日

シンポジウム「これまでの 10 年これからの 10 年」

12/4（土）10:00～12:00
パネラー：大滝 敞 氏（おもちゃの病院）　山本 夏聖 氏（しっぽとかぞく）
　　山口 英治 氏（健康クラブ）　　時田 美野吉 氏（自治会連合会）
　　吉田 徳志 氏（春日部まちづくり応援団）
ファシリテーター：吉田 理子（実行委員長）中川 俊廣（実行委員）

オープニングセレモニー

1．主催者挨拶　吉田 理子（実行委員長）

今回のフェスティバルは私たちがコロナの中でどうやって市民活動を続け、市民活動で何をしていきたいのかを考え、実行委員会の形式で作ることにいたしました。今回のテーマは「これまでの 10 年とこれからの 10 年」です。

10 年前、このセンターができる前に私はワークショップという形で市民として初めて市民活動に足を踏み入れました。その時は市民活動のことがよく分かりませんでした。そこから 10 年間自分がこのセンターを使って学んできたこと、考えてきたことが社会の動きとともに変化してきました。今回シンポジウムとトークセッション、展示、実演を行い、いろいろな形の市民参加、市民活動がこの春日部のまちを作って支え、作り上げていくものだということを改めて認識し、これからどうしていくのかを考えていきたいと思います。

今日ここへお越しの皆さん、参加をしてくださった団体の方々とこの先も一緒に活動を続け、このセンターを来年も再来年もまたそして 20 周年もこういう市民活動のお祭りを作り上げていくための場所にしていけたらいいなと思っております。それがこれまでの 10 年で作り、これからもつないでいくものではないかと思っています。

そういった思いを込めて実行委員会でたくさんいろんなお話をしてきました。この話し合いを重ねること自体が一つの市民活動だったという風に思っておりますので、是非楽しく参加をしていただきたいと思います。これからしばらく 3 月ぐらいまでこちらのお祭りは続きます。コロナがありますので細く長く活動しておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

２．祝辞　岩谷 一弘様（春日部市長）

11 月 6 日から新たに春日部市長に就任をいたしました岩谷一弘でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日は開所 10 周年記念ぽぽらフェスティバルが、新型コロナウイルス感染拡大防止を図り、無事開催されますことを心よりお祝い申し上げます。また開催にあたりましてご尽力いただきました実行委員会の皆様をはじめ関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

さて市民活動センターぽぽら春日部は、平成 23 年 11 月に地域の様々な担い手がともに協働しながら持続可能な公益活動を進めていく拠点としてオープンし、今年で 10 周年を迎えることができました。皆様方には日頃から市民活動の拠点としてご活動いただき大変ありがとうございます。

パネラーの皆様方もそれぞれ地域やお仲間とこの市民活動を通じて春日部市のために、そしてコミュニティのため活動いただいていることを本当にありがたく感じております。また、こちらの活動センターについても様々なご意見があると思いますので、是非、お声を聞かせていただければと思います。皆様が使いやすい、活動しやすいことが一番だと私は思っております。

結びに、これから始まるこのぽぽらフェスティバルを大いに盛り上げて頂いて、そして素晴らしい市民活動につながりますようご祈念申し上げてお祝いの挨拶とさせていただきます。

３．施設管理者挨拶　武田 淳一（市民活動センター所長）

今回のフェスティバルは吉田実行委員長はじめ実行委員会８名の皆さんのご尽力と、出展される団体の皆さんのご協力のもと今日こうして初日を迎えることができました。

私からはこの機会にセンターの運営状況についてご紹介して参りたいと思います。ここ２年ほどコロナ禍でこのセンターにも大きな影響がありました。この 10 年を振り返りますと大体年間でセンターには 13 万人から 14 万人の皆さんにご来場いただいております。ご利用の中心になっているのが登録団体の皆さんで現在約 430 団体が日々ご活用いただいています。

この２年間は残念ながらコロナの影響で活動休止したり会員数が減少して登録を抹消されるという団体さんもいましたが、それを上回る数の新たな団体さんにご登録いただいております。このぽぽらフェスティバルも昨年はコロナで存続の危機もありましたが、2 年前のフェスティバルの出展者が 41 団体に対し、昨年は 54 団体に、今年は 65 団体が出展されています。コロナの大

変な逆風の中で年々出展される団体さんが増えているというのが、春日部市の市民活動の底力ではないかなという風に感じております。施設管理者からいたしますと大変ありがたいことだという風に感謝しております。そういったことで 10 年間にわたって皆さんに愛されご指導いただいてまいりましたセンターです。これからの 10 年についても春日部市の市民活動の拠点としてますます成長し発展させていく事を皆様と共に祈念いたしまして私からのご挨拶といたします。

シンポジウム

吉田理子

　これから春日部市市民活動センター開所 10 周年記念ぽぽらフェスティバル 2021 シンポジウム「これまでの 10 年これからの 10 年」　私はファシリテーター―を務めさせていただきます、吉田と申します。　よろしくお願いいたします。

　5 人のパネリストの方をお呼びしています。それぞれいろいろな立場でこちらのセンターもしくは市民活動というものに関わっていらっしゃる方々です。最初に今日の流れですが 10 分ずつお話をしていただきます。そこに対して私の方で質問をしたり深掘をさせて頂いた後に、会場の方々からも是非手を上げていただいて最終的にはざっくばらんに話し合いができればと思っております。

　では最初時田さんですね。自治会連合会の方で活動されております。なぜ自治会の人を市民活動センターに呼ぶんだろうということですが、この市民活動センターを作る前のワークショップの時に私たちはその自治会の活動というのは市民活動なのかということを一生懸命話し合いをしたんですね。それで春日部市の市民活動というのは当然自治会の方々も一緒に活動していただきたいんだという結論になりました。

　ですからずっと春日部の市民活動には自治会の方々が一緒に入ってくださっております。そのような立場からまずはお話をいただければと思います。では時田さんよろしくお願いします。

時田

　春日部市自治会連合会会長の時田でございます。ぽぽら春日部が 10 周年を迎えるということで誠におめでとうございます。また日頃より自治会活動へのご理解ご協力をいただき心より感謝を申し上げます。

　本日のシンポジウムのテーマ「これまでの 10 年これからの 10 年」について、自治会連合会でもこれまでとこれからの展望について私の方からお話をさせていただきます。

　始めに春日部市自治会連合会の概要ですが、自治会連合会では明るい住みよいまちづくりに向けて行政との連絡協調や、自ら地域住民の生活環境福祉の向上に寄与するためコミュニティの核として様々な事業を行っており、現在 65 年の歴史がございます。市内では 198 自治会が設立

されており、春日部、内牧、武里、豊春、幸松、豊野そして庄和の 7 地区の各地区自治会連合会が形成され地域の実情にあった取り組みを行っております。

市内の総世帯数が約 11 万世帯のところ現在の加入世帯数は約 63,000 世帯であり、市内最大の団体でありますが、令和 3 年度の自治会加入率は 58.07%で残念ながら減少傾向にございます。

次に自治会加入率促進活動の強化について、10 年ほど前から自治会加入促進活動を継続して参りました。平成 25 年には自治会連合会と宅地建物取引協会埼葛支部、春日部市三者により自治会への加入促進に関する協定を結びました。また市内の 7 地区において駅と商業施設などで加入促進キャンペーンを毎年実施し、自治会活動の PR を行い自治会への加入をお願いして参りました。

次に、私の地元豊野地区の取り組みを少し紹介させて頂きます。豊野地区では近年頻発する自然災害に対し、平成 29 年に豊野地区災害対策協議会を設立いたしました。豊野地区自治会連合会をはじめ工業団地協同組合や商店会連合会、学校、公民館、地域の企業や施設を含めた地域ぐるみの災害対策を行っております。

春日部市で初めて避難勧告が出た令和元年の台風 19 号の際にも対策協議会では夜中の 3 時に本部を立ち上げ地域の見守りを行いました。また先般 11 月 20 日に豊野地区の防災訓練を実施したところ 250 人ほどご参加いただき災害について皆さんが関心持っていることがわかりました。

災害というものはいつ来るか分かりませんので、日頃からの人と人の繋がりが非常に大事になって参ります。

次に持続可能な地域づくりに向けて、自治会連合会ではこの先 10 年 50 年 100 年後も私たちが暮らしているこの素晴らしい地域を後世に残したいと思っております。

この思いというのは近年話題になっている SDGs の理念と同じであると捉えております。SDGs をテーマにした役員研修会や SDGs パートナーズの会による合同清掃イベントにも参加しております。

自治会の活動は SDGs の多くのゴールに繋がっております。皆様ご存知のように SDGs は地球規模の大きな目標であり、この時代に生きている一人一人が考え行動に移していかなければなりません。しかし一人の個人が出来ることは限られております。是非自治会に加入して地域の方々と一緒に力を合わせて持続可能な地域づくりをしていければと思っております。

吉田理

ありがとうございました。では次にしっぽとかぞくの山本さん。今回、出てすぐそこ（交流ミーティングスペース）の展示の方もされております。動物の保護関係愛護関係の活動をされている方です。イメージとしてはですね、どうして今回お呼びしたのかというと、彼はご覧の通りまだ若い方ですので、このセンターができてから活動を始められたぐらいの年齢じゃないかなと思います。活動の内容はもちろん教えていただきたいですし、このセンターというのが山本さんにとってどういう存在なのか、どういう風に活動と繋げてるのかというお話をしていただければと思います。

山本

しっぽとかぞくの山本夏聖（かいせい）と申します。よろしくお願いいたします。しっぽとかぞくは 2016 年にぽぽらに登録した団体です。動物が好きな人もそうでない人も気持ちよく暮らしていける街を目指して、犬や猫を飼う人たちのマナーの向上や動物福祉に対する意識の向上、また災害時の動物との同行避難を含めた防災の周知などを目的として活動しております。主な活動内容としましては、ペットとして飼育されている犬や猫を取り巻く環境の問題をみんなで一緒に考える機会を作ったり、マナーや知識の向上を図るためのフライヤーを作成したり、ペットを飼う人たちを巻き込んだ防災のワークショップを開催したりしています。今回ぽぽらフェスティバルのテーマが「これまでの 10 年これからの 10 年」ということで少し振り返ってみました。

登録団体としてはまだ５年、春日部に来て８年なのですが、この８年の間にものすごくたくさんの素敵な春日部人との出会いがありました。もちろん動物のことで活躍されている方もそうですけれども、春日部のことをよく知っている方や、春日部に住む面白い人をたくさん知っている方、それからお店をやられている方やイベントやワークショップをたくさん企画している方、あと金属工芸の作家さんや議員さん、子供たちのために活動する団体さんやこども食堂を開催している方、公民館などの公共施設の職員さん達も勤務先が変わっても仲良くしてくださっている方もいます。これはあげたらキリがなくこの 15 分使い切ってしまうほどです。

こうしたたくさんの出会いがあって、そこからの学びによって活動の内容がより良いものになったり、その幅が広がっているなと感じています。今日はせっかくですので、こうしたたくさんの出会いの中から一つ、春日部で活動する犬の保護団体アグリドッグレスキューさんをご紹介させていただきたいと思います。代表の清永さんとは 2015 年川口市で逃げてしまった犬の捜索を通じて知り合いました。話していくうちにお互い春日部の同じ町内から探しに来たことが分かり、そこからのお付き合いになります。動物への愛情はもちろんなのですが、それだけでなく社会のいろんな問題について話ができる方で、とても素敵な方です。今日は短いですがビデオメッセージを撮らせて頂いてきたので、皆さんとシェアさせていただきたいなと思います。

（ビデオメッセージ）

アグリドッグレスキューの清永です。私たちアグリドックレスキューは不遇にも人の身勝手で殺処分されるワンちゃんや、ネグレクトや虐待で苦しむワンちゃんたちを一頭でも多く救いたいという想いで活動をしています。「すべての犬たちを笑顔に」を信念に健康な子だけではなくて病気の子やシニアの子にも幸せを感じてもらえるよう、小さな命と向き合いながら活動しています。2019年より、ここ春日部が拠点を移して活動してまいりました。春日部市でも犬たちを取り巻く環境にはさまざまな問題があります。ここ春日部は胸を張って動物たちにも優しいまちですと言えるまちになることを願ってこれからも活動してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

山本（動画を見ながら）

この子はお母さん自体がまだ小さく、まだ一歳になるかならないかの月齢で赤ちゃんを産むような状況に置かれていました。この子はせんべいくんといって、去年夏に春日部の保健所に収容されていた子です。当時は顔面が腫れ上がって傷だらけのボロボロな状態で収容されました。一人で立ち上がることもできなくて飼い主さんが迎えに来てくれるのを冷たい床の上で、保健所の中でただ横になって待つことしか出来ずにいた子です。急いでこの清永さんが引き出して病院に連れて行ったのですが、病院の先生からは助けられるかわからないと言われました。それでも懸命に看病されて、今ではお母さんお母さん来て来てって泣いて呼んだりとか、あと眠いと、眠い眠いってぐずったりするような甘えるかわいい子です。この子達は多頭飼育の崩壊現場から来た親子で、赤ちゃんは一匹しかその時いなかったんですけれども、本当に一匹しか生まれなかったのかなあというところで、もしかしたらこの子にも兄弟がいたのかもしれないんですけども、多頭飼育の現場では赤ちゃんが産まれても、別の雄に殺されてしまったり栄養が行き届かないで育たないっていうことがたくさんあります。せっかく生まれてきても大きくなれる子はごく一部ですね。

この子はういろう君って言います。両方とも目が全く見えない状態でここへ来たんですけれども、ここに来た時はガリガリに痩せていて骨と皮みたいな状態でした。食べ物に飢えているような感じで食べられるものをとにかく探して壁をかじって食べようとして家が壊れてしまうほどボロボロにされてしまうような感じだったんですけど、今では落ち着いて穏やかな優しい子です。この子達もみんな多頭飼育の現場から来た子です。この子達のように行き場を失った子っていうのは本当に後を絶たないんです。この子達はこうやって今日を生きることができていますが、保健所にいる全ての命を助けるっていう事はやっぱりできない。それでもアグリドッグレスキューさん達は一匹でも多くの命を救いたいと頑張って活動を続けています。ありがとうございました。（動画終わり）

山本

動画に最初に写っていたのは清永さんちのエルくんとチヨちゃんとミノンくん。そしてずっとお家を探している保護犬たちですね。清永さんちのおうちの子達もみんな保護犬です。みんな今こうやって幸せそうな顔をしていましたが、それぞれが様々な過去を背負ってここにたどり着いています。

動画の中にもありましたが、こうして命が繋がれるのは本当に一部の子達だけで未だに多くの犬や猫たちが殺処分されています。それはもちろん春日部の保健所から行った子達も殺処分の対象になってる子がいます。ただ春日部は今とても恵まれた環境にありまして、こうしたしっかりとした活動をされている犬の保護団体の拠点があることや、他にも年間100頭以上の猫の TNR、 ちょっと TNR って難しいと思うので後で気になる方は個人的に説明させて頂きたいんですけども、野良猫を捕まえて不妊去勢してまた元に戻すみたいな感じの取り組みなんですけども、こうした活動を年間100匹以上取り組んでくれている市民もいます。そうした強みを市民や行政がしっかりサポートしたり協力したりすることで動物にやさしいまちづくり、ひいては人や環境にやさしいまちづくりに繋がっていくのではないかと思っております。

皆さんご存知のガンジーにこんな言葉があります。「国の偉大さや道徳的発展はその国における動物の扱い方でわかる」。ガンジーの考えを全て支持するっていうことではありませんが、この言葉はまさにその通りなのではないかなと思っています。言葉を話さない動物や植物の幸せを考えるということは、人の想像力や心を育みます。逆に言うとそうした想像力に長けた人間や心の豊かな人たちは良いまちづくりができるんじゃないかなと思います。

ここから10年どんなことができるかわかりませんが、「助けてと言わなかったから困ってると思わなかった」ではなく「困るかもしれないから一緒に考えよう」というスタンスの仲間が増えるような活動をしていきたいなと思っています。そしてこれからもたくさんの素敵な春日部の人たちとのつながりをもっともっと作って活動を広めていきたいなと思っております。最後にさっき吉田さんからもあったんですけれども、この会場の外に活動内容の一部を17日まで紹介しておりますので、お時間がありましたら是非ご覧下さい。ありがとうございました。

吉田理

ありがとうございました。次は健康クラブから山口英治さん、お願いします。山口さんもセンターが始まる前からずっと色んな活動されていらして、生涯学習と市民活動というのは違うわけではないですが、どうなんだろうということをずっと考えていらしたそうです。私たちのワークショップでも生涯学習、要するに公民館での活動とどう違うかが議論になったくらいですから、そのあたりの話をしていただければと思います。

山口

生涯学習の分野から出席させていただいております山口と申します。実際やっている活動はいきがい大学春日部学園の校友会です。これが約 600 名の会員で、その中に健康クラブというものがありまして約 30 人なんですけど、その活動を現在主に行っております。

今回のシンポジウムのテーマ「これまでの 10 年これからの 10 年」について、前半は生涯学習と市民活動の関係について私の考えるところをお話しさせていただきます。後半は今回のフェスティバルのテーマである「市民活動で作る持続可能な地域社会」について、私の考えるところをお話しさせていただきます。

まず生涯学習と市民活動の関係ですが、この市民活動センターができる時にワークショップがありました。市民が集まって、市民活動センターの運営構想をどうするんだということを考えてきました。そこで市民として集まった仲間でのコンセンサスというのは、市民活動と生涯活動は違うよ、いわゆる公民館活動とは違うんだ、ということになりました。ではどう違うかというと市民活動というのは社会に貢献する活動、社会のための活動。生涯学習というのは活動している本人たちの活動、本人が楽しんだり健康づくりをしたり学習したりするのが生涯学習ということで、市民の我々としてはコンセンサスを得たんですね。そういうことを市に提言しまして、市の方では市民活動センターの運営方針を立てられました。そこにちゃんと明文化されてその違いも今はっきりしてるんですね。

この市民活動センターでできる活動団体というのは市民活動ですよと。いわゆる社会のために活動する団体がこの施設を使う団体ですよと。生涯学習は会員のみを対象とする活動ですね。これは運営方針の抜粋なんですけど、こういうこともちゃんと明文化されてるんです。ただ現実にはその生涯学習である我々の団体もこの市民活動センターを利用してずっと活動しています。非常に柔軟に運営されているわけですね。交流ミーティングスペースに学生さんも結構いて、勉強のためにも使っているというようなことで、現実には非常に柔軟な運営のもとに活動しております。

そんな風に使いながら 10 年間やってきましたが、我々が本当に自分達だけの活動なのかなという風に思うと、そうじゃないなっていうことに気づいてきました。会員というのは社会を構成する一人一人ですよね。健康クラブでいえば 30 人の社会で、校友会でいえば 600 人の社会ですよね。我々は年寄りですから活動を通して元気になろう、元気になるということは「いきがい校友会」の方で言えば 600 人の社会の人たちが元気になるということで、それは社会がそれだけ良くなっている、元気になっているということだと思うんですね 。

運営方針の中で会員のみを対象とする活動というのはこのセンターの活動の対象外だと言われているけれどもそうじゃないよと言いたいんです。生涯学習もまさしく市民活動の一部ですと。

我々がワークショップをやった時はそこまで及ばなかったんですね。実際活動してみてわかったことなんです。ワークショップをやった時には浅い知識の中で市に提言して、それを受けて市で作ってくれたんですけども、そこら辺が違うよっていうことを前半として言いたいなと思います。

それで、「これからの 10 年」ということでお話しさせて欲しいんですけども、今回のテーマが「市民活動で作る持続可能な地域社会」ということで、今後、市民活動はそういうところを取り組みましょうよということ。じゃあ市民活動って何なのということなんですが、市民活動というのは地域課題を解決する活動ですよね。地域課題を見つけて地域課題を解決する活動が市民活動ですよね。持続可能な地域社会というのは、そんな難しい問題じゃなくて、市民活動を繰り返し続けることが SDGｓ、持続可能な社会を作ることだと考えるんですね。地域の課題というのはその時々どんどん変わってくるんですよね。その変わったことに取り組んでいくのが市民活動なのかな。

例えば地域社会で問題になっているのはコロナの問題ですよね。コロナの問題に対して市民がどう取り組むか。先ほど自治会の時田さんからお話がありましたように、やはりそういう問題が起きると地域コミュニティでその問題を捉えて色々活動するんですよね。去年のフェスティバルでお話しされて覚えてる方も多いと思うんですが、手作りマスクを作ったり、コロナ下での防災訓練はこうするんだっていう話が自治会の方からありましたけれど、やっぱりその時々の問題に対して市民が自分たちで活動する。そういう活動の繰り返しだと思うんですね。

一方、我々のまちづくりの課題は非常に根強い問題もあると思うんですね。周辺の越谷だとかさいたま市だとか川越市だとかに比べて春日部市はどうも活力がないなって感じてるんですよ。人口が減ってるんですよね。私は春日部市が合併する時に合併協議会の市民としても参加したんですけれども、将来の春日部市はどうすればいいんだということを考えたんですね。新市建設計画というやつですね。そういうところで春日部市は合併すれば人口が増えるよという活動をやってきたんですね。ところが現実はそれ以降約 1 万人人口減ってるんですね。それと同じようなところで財政力指数ってあるんですよね。歳入と歳出の関係なんですが、春日部市は当時 0.75 で現在も 0.75、要は 25%国から交付金を受けている。非常に活力がないなと感じてるんです。

人口が減っているということに対して、今の市民活動をみた時に、やっぱり人口を増やすようなところまで我々の活動が集約されてなと感じるんですね。一つ一つの活動が個々の成果としては出てるんですが、まちづくりの集合体としてはまだそこまで結集してないなと感じるんですね。

そこで必要なのが、活動しているコミュニティの連携。連携しないと自分たちの成果が大きくならない。連携することによって大きなまちづくりの課題に対していくのかなと思います。そのために春日部市にある市民活動を推進する母体が市民活動センターだけじゃなくて公民館とか自

治会連合会とか社協とか男女共同参画センターとか色々あるわけですね。そういうものの推進母体がまず連携するってことがまず最初で、その次に各コミュニティの連携が必要なのかなと考えました。市民活動センターと自治会連合会の連携も始まりましたが、そういうものをどんどん成長させていただきたいなと思います。

活動をやっていて、達成感が出てくることによって市民の活動が盛り上がっていくんじゃないかと思うんですね。達成感っていうのは自分達の自己満足だけじゃなくて社会がその活動を認めること。社会から我々の活動がいいよって言われるとやっぱりそうなのかという感じがありますよね。そういうことを心がける必要があるのかな。今日のこのフェスティバルはそういう場だと思うんですよ。自分たちの活動を社会に発表して良かったなんて言われたら嬉しいですよね。このフェスティバルだとかこういう類いのものを社会が認めるようなものをどんどん充実させていくというのは市民活動の成長であり、大きく言えば人口が増えるようなところにつながるのかなと考えています。

吉田

人口減少については私が入っている団体でも考えていまして、いろんな団体がいろんなことを考えているという情報収集、そして情報の集約も大事なのかなと思います。10 年間の山口さんの研究の成果がよくわかりました。ありがとうございます。では続いて大滝さんになります。大滝さんは今回はおもちゃ病院としてお話をしていただきます。こちらのセンターができるもっと前からずっと活動されていらっしゃいましたし春日部の中で大滝さんを知らないという人も少ないというぐらい色んな所で活躍されている方です。長く市民活動をしてこられた上で、このセンターができてからどんな風に変わっているのか、変わらなかったのか。今までの 10 年がどんな感じだったのかというようなこともお話しいただければと思います。

大滝

おもちゃの病院の大滝と申します。よろしくお願いします。このパネラーをやってくれと言われた時になんで私を選んだのって聞いたら長くやってたからだと。一番と言わなかったけど長くやってたんで話してほしいと言われたんですが、それはそれでありがたいことなんです。今日は実はおもちゃの病院がスマイルしょうわで開設しているんですよね。ここ最近非常にお客さんが多くて、先週のエンゼルドームが 30 件の持ち込みがあったんです。その前のグーかすかべも 20 数件ありました。

おもちゃの病院はエンゼルドームで始めたのが最初になるんです。平成 16 年 11 月から始めましてその年は 72 件だったんです。その後、当時の庄和児童館そしてグーかすかべ、それから

庄和児童館がスマイルしょうわに衣替えをして、そしてさらにイオンでの活動ということで現在は週に１回、月に４回ということで活動しています。

おもちゃドクターと言われるメンバーが現在 22 名に増えております。人数が多くていいんですけれども 22 名が一堂に集まると密になってしまうので一回の診察場所での制限を設けたりというような苦労もしながら現在まで続けています。エンゼルドームで平成 16 年に始めたんですけれども、実はこれはエンゼルドームが開館した時になるんです。それ以前に春日部おもちゃの図書館ウサギとカメというところがあるんですが、これはもう名前からお分かりのようにおもちゃというものを介して子供たちと遊んで行こう、特に障害を持ったお子さん達をというような団体になるんですね。そこがおもちゃを修理してくれる人をメンバーで欲しいんだけれどもどなたかいませんかというチラシがあったので、それだったらいいなということでそこに入ってお手伝いをしていました。

その後エンゼルドームができておもちゃ図書館というスペースも作られるというような話を聞いたんですね。それを手伝いながらおもちゃの病院もやりたいなということで館長と話をして、では第４土曜日に開きましょうということでそこから本格的な市民活動というかボランティア活動が始まったという経緯になっております。

その後平成 23 年にこのセンターができ、10 年が経ちましたね。この 10 年間でおもちゃの病院を開くことができなかったんですけれども、メンバーが時々打ち合わせをしたりするのに使ったり、あるいはロッカーを使ったりというようなことで、病院をやるにあたっての円滑さは増えてきたと思っています。それと同時に時々イベントがあった時に何らかの形で参加させてもらったりしています。

おもちゃ修理をセンターでやるのが難しいのは、ここで単発でやっていたとして、ここに来たお客さんが「おもちゃの病院をやっているんだったら何かおもちゃを持ってくれば良かった」ということになっても、それから取りに戻ってもらうわけにもいかないだろう、ということでなかなかそういう意味で単発のイベントの時におもちゃの病院をやるのは、なかなか困難なところがあります。ただ一方で展示等をすることによって理解を深めてもらったと思っております。

10 年間そんなことで活動してきたんですが、今後の 10 年については、どうなんだろうな明日もわかんないな、というのが正直なところなんですけれども、ただ長くやってきた大きな原因はやはり楽しんでやってるということだと思います。ボランティア活動、市民活動も同じだと思うんですけれども、やはり活動自体が、自分が楽しく打ち込めるっていうことが大事じゃないかなと思っておりますので、これから先も楽しくやっていきたいなと思っています。

私のところで一か月ぐらい前から取り入れたのが LINE なんですね 。LINE の QR コードを受付の時に提示して、修理申し込みをした方には LINE でお友達登録をしてもらう。それに

よってその後の出来具合とか渡し方法とかを LINE で連絡できるようになったんです。だいぶ助かるようになりました。修理品のお返しは児童館の場合には、その日帰るまでに修理が終わらない場合は児童館で預かってくれました。イオンでやるとちょっとそういうわけにいかなくて、修理が当日に終わらなかったもののお渡しで非常に難儀していたんですが、LINE を取り入れることによって、ちょっと先が見えてきたかなという感じがしています。ちょっとまとまりのない話ですが以上で終わらせていただきます。

吉田

ありがとうございました。それでは最後に、まちづくり応援団から吉田徳(あつ)志(し)さんにお願いをしたいと思います。彼はさっき言ったように私の息子ですので、小学校の時から市民活動に連れ回している子なので何もこんなところで公開親子喧嘩を始める必要はないんですが、いったいこの人は何を考えて私にくっついてきたのかなと個人的には聞きたいところなんですが、若い人がこのセンターをどういう風に見ているのか、どんな風に活用していこうと思っているのかという話をしてもらえたらと思います。

吉田徳志

紹介いただきました、まちづくり応援団の吉田徳志です。いま母からもありましたが小学校の頃から連れまわされてよくここに来ていたので、小中高大学と今までの自分と市民活動とのつながりというか関係みたいなものがだんだん変わっていったっていうのを自覚しているので、その話をさせていただこうと思います。

まず小学生のとき、まちづくり応援団で「ウィークエンドブランチ」というのをやってまして、講師の方を招いてお話を聞いたりしていたのですが、休憩時間とか終わった後のコーヒー、お茶出しの係が僕でした。朝起きたら「あんた今日ひま？」って母から言われるわけです。「ひま」って言うとこっちに来て手伝うんですね。そうすると終わった後にお菓子とジュースをくれるという割の良いお手伝いができるわけです。活動ではないけどもお手伝いのレベル。中学生になって色々と自分もちゃんと毎回来てるからちゃんと活動したいと相談しましてまちづくり応援団に入りました。その時の活動としては応援団の平均年齢をぐっと下げる。第一がこれですね。そのままお茶出しも続けていたんですが、カメラで写真を撮ったりしていました。そこそこ小さい子の面倒が見られるのでおやこ劇場さんの「こどもライブフェスタ」で子供の誘導を手伝ったりもしていました。

市民活動というものに少しずつ馴染んでいって高校生になりまして、受験勉強とかもあってなかなか難しかったけど、その時にさっき山口さんからもありましたけど学生が勉強で（センターを）使っている。僕も１年間使わせてもらって、学生として使っているのに学生に文句があると

いうだいぶ変わった利用をしていました。大学生になってメインでやっていることは、いまこの会場で見ている方はわかると思いますがパソコンの前で操作をしていて、IT コミュニケーターのような活動をしています。市民活動団体はコロナ禍でズームを使いたいんだけどよくわからないとか、いま会場のズームでも画面が二つに分かれてますけどそのソフトを使ったりとか機材のセッティングとかというのを主な活動としています。

僕が考える市民活動というのは、社会の中で困っていることを自分たちで解決するのが、ざっくりとした市民活動じゃないかなと思います。それでこれからの 10 年ということで若い世代、僕も若者なので、市民活動に参加していかないといけないなっていうか続かないなって感じてるんですけど、まぁなかなか難しいと思います。学生として使っていた時に学生なんだけれども市民活動している人間としての文句も出てくるわけで、まず学生たちにはお前ら市民活動してる人を睨むなよと。君たちの方が違うんだからわきまえないといけないでしょっていうのは確かに市民活動側として感じたことです。ぜんぜんわかってくれないで（交流ミーティングスペースに）1 時間 2 時間荷物をおきっぱなしにする人もいるんですけど、それが市民活動をしている人間として見た学生。

こんどは学生から見た市民活動をしている人たち。確かに自分たちが勉強している横で（市民活動を）やっているのは僕は気にしないですけど、静かなところで勉強したい人たちからしてみれば嫌なのかなあと。まあお門違いって話しなんですよね。しかし、市民活動している人からのアプローチってほとんどないんですよ。だって市民活動のための共有スペースなんだから、例えば若者の意見が聞きたいと言って聞きに行ったって若者は文句言えないわけです。だって本当は市民活動する場所だから。僕が高校 3 年生 1 年間やっていて話しかけてもらったのは（しっぽとかぞくの）山本さんだけです。知り合いとは話しますけれど、全然知らない人で話しかけてきてくれたのは山本さんだけです。

若者が市民活動に来ないんだとか学生が邪魔なんだっていうのは言ってもいいけど、あなたたちは何をしているの？何もしてこないでしょ？市民活動しているんだったら、若者欲しいと言うんだったら市民活動側からもアプローチがあったりとか、自分達はこういう活動してるんだよって言うだけでもちょっと気持ちは変わるんじゃないか、少し興味を持ってもらえれば可能性も出てくるんじゃないかと思います。

こういったイベントとかでよくあるじゃないですか。これだけに出てくる人とかってやっぱりいますよね。普段何もしてないのに急に出てきて座ってるけど、あんまりよろしくないかなと。団体に入ってて市民活動してるって言うけどさ普段いないじゃん。ちょっと姿勢を変えるだけで伝わるものはあると思いますし、そういう活動っていうのは自分にとってちゃんと思いがあって、活動してる期間があってやっているんだから、それはどの世代にも伝わるものはあると思います。世代間ギャップっていうのはあるし何でこんなやり方ずっとしてるのっていうのもありますけど、芯の部分は情熱とか思いがあれば伝わるものだと思うので、ガンガン学生に質問していっても、こっちは悪くないので。ここを使ってる学生だから。市民活動団体からの質問ぐらいには答える義務はあるでしょと個人的には思うので。共有スペースを使ってるので。全然その自分達から若者へアプローチをしてもいいと思うし、そういうことをしないとなかなか入ってこないですよね。自分たちの学校っていうのもあるし、なんか部活があるとかゲームで忙しいとか言っ

てそんなに自分たちのいる地域というのを重要視していないというのが今の若者。ネットというのがあって地に足がつくというよりネットのうえでふわふわ浮かんでいるような状況の若者たちに、ちょっと自分たちの方から近寄ってあげる、自分たちもちょっと上の方に、インターネットの例えばその Facebook の春日部情報掲示板とかもありますし、地域を地域だけじゃなくて少し若者の方にも広げてみると、若者も入りやすいんじゃないかな。ちょっと入ったらもうこっちのもんですよ。自分で言うのもなんですけど、僕みたいにやれる人はそうそういないけど若者の感覚とか普段使ってるものとかっていうのは全然吸収できると考えますので、興味を持ってもらう。興味を持ってほしかったら掲示も重要だけどどうせ見てないので、ちょっと足を運んだ時とかに声かけてみるぐらいでも、今コロナで全然座ってないですけど声かけてあげるぐらいでも少し変わるのかな。それがこれからの 10 年に若者を地域に、若者を市民活動につながる第一歩なんじゃないかなと自分は考えています。これで僕の発表を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

吉田
私たち自身の課題として常に若い人たち、若い人っていうのも彼は 20 歳ですけども、私ぐらいの五十代でも市民活動では若い人なんですよね。なにをやってもほとんど最年少なので。その現状をどういう風に変えていくかという話はおそらく明日のトークセッションの方でそういう課題がありますのでぜひお越し頂きたいと思います。

これで一巡、皆さんがどういったことを考えて活動されているのか、どういったことに取り組まれているのかということを聞いていただいたと思います。残りの時間を質疑応答というか皆さんでお話をしたいと思うんですが、ちょっとだけ深掘りさせて頂きたいので、私からもう一人ずつ質問していきます。すいませんが皆さんとお話する時間を増やしたいので、短めにお話をいただければと思います。

最初に、今の吉田くんの所から行きたいと思います。私がとても若い人というところで気になっているのが、今日の午後もその話になると思うんですけども、彼らにとって今言ったその社会の課題を解決する、自分たちが何か困ってることを解決することが市民活動っていうものだとすれば、若い人たちは何をもってそこが住みにくいと思っていたり課題だと思ってるのか。そういう話し合いというのは実際私が学生の時もほとんどしなかった気がするんですけど、してなかったとしても思ったりするものなのかなとか、たまにお友達と話すのかなというのを聞きたいんですけど。

吉田徳志
自分の周りにはそこそこいるんですね。政治に興味を持っている子とか地域系の学部に入った子とかは高校のときから結構そういう話をしたんですけど、大部分はあんまり考えてないからというのが個人的な感覚で、やっぱり考えたくないことは考えないのが多いような気がしています。地域に目を向けなくてもインターネットに目を向ければそこは世界と繋がってるわけですから、より広い世界が見えてしまう。そっちの方が、文章だけで良かったりとかボイスチャットだったら話すだけで良かったりとか、直接会わなくていいという気楽さがあったりして、そっちに

目を向けてないんじゃないかな。意図的か無意識かはわからない。やっぱりアプローチが必要かなというのはそういう理由で、こういうのも足元にあるんだよ、君達が住んでいるところにはこういうことがあって、問題を自分たちで見つけられるようになったりとか、いまここで荷物持って入ってきたけど何するのかなとか、ちょっと思うくらいでも、自分たちは関係ないという見方が変わるんじゃないかなと思います。

吉田

ありがとうございました。では続いて大滝さんへの質問ですが、おもちゃの修理をされている方々だけあって、私はその LINE を使ってというような、大変失礼な言い方なんですがやっぱり大滝さんやメンバーの方々それぞれかなりご高齢の方たちなんですよね。その方たちが常に新しいことにチャレンジされているように見えて、活動場所を増やすのも含めて、なかなかそのイオンの中でやってみようとか、大体こういう活動は公共施設でやろうっていうことが多い中で、対象がお子さんだからってのもあるかもしれないですが、常に新しい何かを続けていくモチベーションって何なんだろうというのもありますし、どうしてそんなに 22 人もの人が仲間として増えていって、そしていろんな事情あるにせよ、あまり欠けないでずっと続けていける秘訣って何なのかなと思うのですが、いかがですか。

大滝

ひとつ言えるのは、女性という言い方はいけないのかもしれないんだけれども、井戸端会議というのがありますよね、色んな所で。男性にはそういう所ってあまりないんですよね。うちは女性が一人いるんですが、ほとんどが男性なんですよね。修理がない時はとりとめもない話をしたり、そういう井戸端会議的なことができる場所を結果的に提供しているということかなという気がします。イオンの話が出ましたけど、私の方からイオンに働きかけたわけではなくて、イオンがオープンするにあたって先方の担当者が奈良の店舗でおもちゃの病院をやっているんだけど、ということで社協を通じて私のところにやってみませんかという話がきました。せっかく言われたんだからやってみようかということで、そんなに私の方が積極的ではなくて、私はどちらかというと受け身の人間なので、言われるとしょうがないからやるということです。（続けていける秘訣）のもう一つは飲み会で、そういうのも大きな理由かなと思っています。

吉田

飲み会はすごく大きな原動力だと思っていて、ちょっと話は違うんですが、大滝さんと私は別の会議も一緒に入ってるんですけども、コロナの時に初めてオンラインの導入をしようって言った時に一番最初オンライン飲み会から始めたことを今思い出しました。すごく井戸端会議というのはヒントだなと。自分は女性なので、そういう風に男性も思うんだと、すごく感じました。ありがとうございます。

チャットに書き込みを頂いています。「生涯学習から市民活動へと幅広く門戸を開いて交流をして広がることがすごく良いことだと思う」。私もそうだなという話をよくするんですけれども、生涯学習と市民活動はどう違うかというのは、意識が仲間だけを向いているか、ちょっと外

にもあるかぐらいの違いなんじゃないのかなと思うんですね。だから楽しく打ち込めたり、健康になることはとても大事というのはよくわかるし、市民活動を繰り返すことで持続可能になっていくんだというのもよくわかります。わかった上で市民活動はとても広いですよね。捉え方も広いしカテゴリーも広いし何でも言ってしまえば市民活動だよという部分もあるし、先ほどから皆さんがおっしゃっているように課題があってそれを解決して町を作っていくということが市民活動の一つのものであるならば、その先にどんな社会があればいいか、どんな社会なのかっていうのがなければ、だから解決したいんでしょ？きっとそれが皆さんあると思うんですが、では山口さんはどんな社会がいいと思われていて、そしてそれに対して自分達はどう関わればいいと思ってるのか、お願いします。

山口

難しい話ではないと思うんですけどね。市民が躍動感をもって活発になることだと思います。どんな社会かと言うと、春日部に住んでよかったと感じることだと思いますよ。シティセールスで言っている「シビックプライド」を感じることだと思います。春日部はどんなまち？と聞かれた時に、それは私ですよって答えられる、そんなまちですよ。自分が将来の春日部を作って、春日部に住んでるという意識になることかなと思います。

吉田

「春日部、それはわたし」というのは選挙で掲げそうですね。すごくシンプルですごく深いお答えかなと思います。ありがとうございました。

山本さんにお聞きしたいのは、山口さんのこととも繋がると思うんですが、元々動物のことをされていて、やっぱり市民活動というのは一つの目的、課題を解決していくという印象が非常に強いんだと思いますが、山本さんは動物のところから確かに始まっているんだけども、災害の話があったり、どんどん「春日部人」とおっしゃってましたが、つながりをたくさん作ってらっしゃいますよね。パッと聞いただけでは動物と子ども食堂は何の関係があるの？と思ってしまうんですが、もちろん選んで繋がろうと思っているわけではないと思いますが、どうしてそんなに広く繋がろうとされているのかなと。そこに市民活動と生涯学習とかいた山口さんのお話へのヒントもあると思いますし、ちょっと教えていただけますか。

山本

さっきの 10 分ではお話できなかったんですけれども、今日は動物のことをメインでお話しさせてもらったんですが、一番長く携わってる市民活動としては、ここで開催している「こどもラ

イブフェスタ」なんですね。他にもいろんな子供のこともそうですけど、いろんな問題に興味を持って、いろんなことに携わっているんですけども、得意な分野が動物だからというだけで、この社会の中でのすべての問題というのはみんな繋がっていると思うんですよね。よく政治の話をするのはタブーみたいな、飲みの席で政治の話をするなみたいなことがありますけど、政治って生活だと思ってるんですよ。その生活って全てだと思っていて、それぞれが抱える問題って、辿っていくとみんな結局繋がっているということになると思うんですよね。この動物の問題っていうのも社会の問題で、最近はテレビでもやられるようになったので皆さんもご存知だと思うんですけれども、辿っていくとやっぱり動物だからって動物だけの問題というわけではないんですよね。「しっぽとかぞく」から入ってきた人が、ここでみんなで喋ったことで、いろいろな問題があるんだねっていうことに気づいて、新たな気づきになってみんながみんなのことを考えられるみたいなことになっていくんじゃないかなっていうか、なっていったらいいなと思います。

吉田

ありがとうございます。自治会の中で SDGs の取り組みのお話しを頂いて感じたのは、自治会が昔からやっていたことは結局 SDGs に繋がっていて、ただ SDG s という言葉がここ数年出てきていて当てはめた感じかなと私は想像しているんですけども、実際にご自分たちの自治会の活動で SDGs を研修されて何か新しい発見や改めて感じたことがありますでしょうか。

時田

勉強させていただいた中でわかってきたのは、SDGs は自治会では既にもう実施しているのではないか？ということは、これからそれを認識した中でもっと深く掘り下げて進めていくことが大事なのでは、ということです。地域はみんなつながっているわけですから、お互いができることをして、それをお互いがつなげていけば自然と地域は良くなっていくということ。ですから災害についても組織がしっかりしているから助かるんだ、ではなくて組織があくまでも減災のためにいかに早く皆さん方にお知らせをするかが組織であるように思っております。組織が人を助けるという事は無理だと思います。それには自助、自分たちがしっかりとその組織に沿った中で認識をしていただいた中で自分が連絡を受けた時にはいかに行動を共にするか。それによって減災につながってくことだと思っています。それと同じように、SDGs は実は皆さんができることをしていけばいいのかなと。自治会としては、いろんなことが当てはまると思います。特に豊野地

区においては自治会の会合よりも災害の会合の方が実は多いんです。回を重ねるごとに参加者が増えたり認識が増えてきてるように思えるんですね。ですから SDGs にとらわれなくても、今までやってきたことをずっと継続をしていけば、必ずそれが力になってついてくのかなと私は思っているんです。

吉田

ありがとうございました。この後は今のお話を聞いた中で会場もしくはオンラインからの質問をいただきたいと思います。一旦まとめると、最初に自治会だったり動物だったりおもちゃだったり若者だったりという全くばらばらな活動、分野のお話を聞きましたが、結局のところ皆さんが言っているのは、おそらく集約していくと同じ話をされてるんだと思うんですよね。キーワードとしては一つは居場所。どんなところでも居場所という、自分がそこに居ていい場所。それから自分たちができることをやる。一人一人皆さんそれぞれ自分たちができることをされている。受け身なのかもしれないし攻撃的にやってるのかもしれないですけども。そしてそこには対話であり会話であり、やっぱり夢を語る場所。何か楽しむ場所というものがやっぱり居場所なのかなというところが私は皆さんから感じたお話でした。目的はそれぞれ違っても最終的には私たちがどういう風にこのまちで生きていくのかをそれぞれの立場で考えてらっしゃるのがよくわかったんですけども、そのうえでもうちょっと聞いてみたいとか、これについてはどうなのっていうのが会場の方、オンラインの方、もしあればお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。

会場参加者より

本日はこのようなところに参加させていただきましてありがとうございます。春日部市倫理法人会で会議室を使わせて頂いてます。会長を拝命しております石川と申します。山本さんに質問させてください。先月「ハチとパルマの物語」という映画を見てきたんですね。忠犬ハチ公のロシア版だと思うんですけども終始号泣でした。私も犬を飼っていて朝晩毎日散歩をしてるいんですけれども、春日部市にはたくさん犬や猫ちゃんを飼ってらっしゃる方がいらっしゃると思います。ところが日本は殺処分世界一ですよね。フランスでは今度法律でペットショップで犬猫を売ってはいけないっていうことが可決されたと思うんですね。それに対するお考えと、時田さんがおっしゃった通り地震が来るってやっぱり思いますよね。その時のペット同伴の被災地について、春日部市内でどうお考えなのか。またどんな行動をされているのか。そういったことが吉田委員長がおっしゃった「居場所」に繋がると思うんですね。安心に暮らせる春日部ということでつながっていくと思うので、その辺のお考えをお聞かせください。よろしくお願いいたします。

山本

殺処分が止まらないというのは日本独特な、日本人の価値観というのが原因の一つではないかなと思っていて、ブランド志向があるじゃないですか。グッチが流行ればグッチ、ヴィトンが流行ればヴィトンみたいな。食べ物だって何々牛が流行ればそれに行き、カレーが流行れば並んでも食べに行くみたいな。この流れと同じでトイプードルが流行ればみんなで殺到してトイプードル、柴犬が流行れば柴犬と。もう見ていて歩いていれば分かると思うんです。今何犬が流行ってるのかが分かるぐらいころころ変わっていくんですね。それをやっぱり需要があれば供給する人たちがいて、お仕事としてされる方がいるわけじゃないですか。そのためにたくさん産ませてたくさん出荷して、もう野菜とかと一緒ですね。その流通過程でぐちゃっとなったら処分する。一緒なんですよ。流通過程の中で何万匹もの子犬や子猫が死んでるんですね。でもそれをずっと繰り返してやることがもう当然で許されている中で、殺処分をなくそうなんていう認識が広まらないのは当然かなと思うんですよね。見ればみんな可哀想って言うけど、じゃあどうして捨てられちゃったんだろうみたいなの見ていくと、離婚するから、家族がアレルギーになったから、子供が生まれる予定じゃなかったけど子供が生まれて奥さん一人じゃ面倒見れないから、噛む犬になっちゃったから、ワンワン一日中吠えるから…それって命を奪うに値する理由ではない…どんな理由でも命を奪うのはちょっとないなと思うんですけども、それが今の常識になってしまって常識の範囲内で手放すならしょうがないよ、頑張ったもんね、でもしょうがなかったから手放すのもどうかみたいな風になっていくわけじゃないですか。それを変えていくには法律とかで縛っていくっていうのも一つの手だと思うんですけど、根本としては一人一人のモラルの問題かなと思うんですよね。携帯電話だって我々子供の頃は持っている人は少なかったじゃないですか。でもいつのまにかこれを使うのが当たり前で、小中学生も持っているのが当たり前みたいになってきたように、皆の中での感覚が変わればその時初めてなくなっていくのかなと思っているので。法律とか一生懸命やってくれている議員さんたちもいて、そこもとっても大事ですけど、春日部にせっかくこんな素敵な団体やボランティアさんたちがいるんだから、みんなでバックアップすることで、みんなの常識をまずここから、市民段階で変えていくことができれば何か変わるんじゃないかなと思っています。

防災については、本当に春日部市は、地震はともかく水がきたらほとんどの場所が沈んでしまうので、いつもハグ訓練（避難所運営訓練）という訓練をやるんですけれども、その時には動物はまず連れて逃げられる数で抑えましょう。それ以上飼わないようにとか、自分の年齢を考えて迎えようねとか、そういうことを話しています。防災対策課さんの方でも動物についても検討してくださいっていう話をずっとしていて、新市長さんは市長選挙の前のチラシの一つに、ペットをも含めた防災を考えていこうみたいなのが入ってたりしたんですけども、そういう風に動いて行ってくれるのかなと思っているので協力しながら安心して暮らせる街にできたらいいなと活動

しています。

吉田

他に何かご意見ご質問ありますでしょうか。

会場参加者より

私はかすかべ案内人の会という団体をやっておりまして、今日はいろいろなお話を聞くことができて非常に有意義でした。設立というか実際の活動は正式には平成23年の1月9日なんですけども、それまでもいろいろな活動をやっていまして、その当時のことを思い起こしております。吉田さんのご子息は若者に対することをおっしゃっていましたが、そういう見方もあるんだなと。私も会を作る時に春日部の魅力と面白さをしゃべりたいという5人のメンバーで設立しています。 お墓も実家は南アルプス市ですけど早い段階から春日部に作っています。ずっとここに住もうということで。そういう人間なんですけど、コンセプトとか理念とか会を作る時に、春日部探訪というか春日部のこともっと知りたいなと。知ったらそれを知らせたいなと。若者の中にもいろいろな考え方を持った方がいらっしゃいますが、後世にしっかり伝えていきたいなと思いました。まさに若者のところが非常にポイントとなってくるわけです。

私もスタートのときからここに関わらせていただいていますけども、どうやって若者を引っ張り込もうかと。お勉強している人たちに何人かはお声掛けをしました。会員になってくれというお声掛けではありません。大人もそうなんですけど何とか会員になってくれって言う仕方は嫌なんですよ。何でもかんでも来てというふうにはやっていません。ただ待ってもいられなかったので私は学校を回りました。先生方とお話をして、学生案内人が多い時で10人くらいいました。いろんな新聞に取り上げられたこともありました。小中学生を案内したこともあれば、東部地域の社会科の先生を案内したこともありました。いまはコロナがあったりして実質的に活動している学生は少ないです。縁があって春日部に住んで市民活動をして春日部のいいところをアピールして中学高校から大学へ行って大企業に入った子が二人ほどいます。仲間を増やして春日部を愛する人間を増やしていくことの大切さを改めて感じさせていただきました。御礼でございます。

吉田

あともう一人ぐらいいらっしゃいますか？　はい、実行委員の中川さん。

中川

一応ファシリテータなのでひとこと。みなさん立派な先駆者というか色々知恵も経験もおありの方ばっかりなので多分しゃべりたいことがいっぱいあると思うのですが、ひとつだけ私が言いたいのは、いま生涯学習審議委員とかいくつか生涯学習の企画に参画している者ですが、100歳時代と言って死ぬまで皆さん活躍されますので、私ごとですけど孫が５人おりまして、２歳の孫娘を見ますと、布団を畳んだりしていると、じいじは何やっているのとか言われまして、立ち位置を見ていると、どうしていいか若い人たちは分からないんですよね。自分の立ち位置に迷っている。そういう時に何かやれることが見つかるとすごく喜びますよね。そこで教えると孫娘とも交流ができて、こういうことをやるとうまくいくよと、洗濯物を畳むとか、孫も充実感を味わうしこちらも助かるしということ。そこにはノウハウもあって経験もあってそれを次の世代にどうやってつなげていくかということが家庭も市民活動も同じなんですね。いま「カムカムエブリバディ」というテレビドラマをやっていますけど、先駆者というか分かっている人が正しい方法の輪をいかに広げていけるか。そこに無くなる活動もあると思うんですけど残していかなきゃいけない活動もたくさんあるので。最後は春日部市民でよかったというプライドがあれば良いところを宣伝していきますので、様々な切り口があって当然なのでそれを機会にずっと100歳まで、最後まで我々は死ぬまで活動しますので、生涯学習はペットとの交流もありますし、いろんな機会があるんですけど、ひとりでも多く一緒にいて、居場所があって充実している、有意義だったという時間を、井戸端会議でもいいんですけど、仲間を大事にしていただきたいというお願いです。

吉田

ありがとうございました。もうひとつだけ質問を短めに。

吉田徳志

２年程前に市民活動センターで自治会長さん達と市民が話すというトークフォークダンスがあり、ここにいる市民の人たちと話してみて、こういう機会はありがたいみたいなことを自治会長さんたちが言ったんですよね。自治会から見た市民活動センターや市民活動団体のイメージをお聞きしてみたいと思いました。

時田

市民活動センターは会議等でなるべく使わせていただくようにしております。会場を借りてやると普段と違った雰囲気の中でまた新たな認識を得た中で活動ができるようになるのかなと思います。ですから私どもの地区では敬老会の横断幕をここで作らせていただいております。

連合会としての今後の対応としてはやはりここを利用しながら市民活動の中身を濃くしていく必要があるだろうと思っております。向こう３軒両隣じゃないんですけどもお互いが手を繋いで進めていかないと地域、春日部は良くならないと思います。一人ひとりがやはり自慢できる春日部を作らなくちゃいけないと思うんですね。そうするためには皆さんがそういう認識を持っていただかないとなかなか進まない。

やはり市民活動をしっかりとしていくのにはお互いが心を分かち合いながら活動してかないと市民活動は広がらないのかなと思っています。

吉田

ありがとうございました。ちょうどお時間になりましたので今回のシンポジウムはこちらで終わりにしたいと思います。最後にまとめというか、皆さん一人一人おっしゃってることは納得できることで、今時田さんがおっしゃった、やめられないというのは私ももうさんざん辞められないことがありますのでよくわかります。でも今回通してお話をされていたのは皆さんさっき言ったように知ったら広めるとおっしゃってましたよね。広まらない、広める、どう広めるか。それはもしかしたらこちらのセンターを上手に活用して、もちろん自分たちの活動もそれぞれの場所であったとしても、ここで何かができる、ここで広める、つながるということがもしかしたらこの先の 10 年、もちろん今までの 10 年でもそれも目指してきたけど、これから先はもっといろんな意味で集まって全然関係ない分野の人でも集まってお話ができる。そんな場所であれば、山本さんがおっしゃったように生活あるいは政治の話もされていましたけれども、私たちが生きていて、生活をして、そこには当然政治があって、災害があって、まちづくりがあって、そして趣味があって、仲間がいて、こういうことを繋げていくことが皆さんおっしゃっているように持続可能な市民活動であり、そして私たちが作っていく春日部のまちなのかなと思います。そ

の中で市民活動センターというのはこれからもまさに市民活動の中心であり続けられればいいなというちょっといい話で終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

ぽぽら春日部
市民活動センター10周年記念
ぽぽらフェスティバル2021

2021年12月4日（土）
14:00～16:00

トークセッション1

「市民活動センター10年の軌跡とこれから」

2008年11月、市民活動センター設置に向けて「利用する立場」からセンターの役割や機能についての意見交換し、提言するために集まった25人のワークショップが始動。9ヶ月間の議論を経て、報告書（提言書）が完成。2011年12月、市民活動の拠点施設として活用が始まりました。

それから10年を経た市民活動センター。様々な活動の舞台となり、多くの出会いがありました。ワークショップに参加したメンバーと当時の想いと10年の軌跡を振り返り、これからの市民活動センターを考えます。

【プレ対談】

●当時のワークショップアドバイザー　三浦匡史氏
（都市づくりNPOさいたま　さいたまNPOセンター）

●ワークショップ参加者　フェス実行委員長　吉田理子
・ワークショップの振り返り
・ワークショップが大切にしたこと　など

○ゲストスピーカー
・開所からの想い（春日部まちづくり応援団）　大竹規之氏
・利用者視点から（春日部C工房）　西山光昭氏

○ファシリテーター
新井恵美（フェス実行委員　春日部おやこ劇場）
生越康治（アドバイザー）

主な内容

1. プレ対談の上映と報告
2. ゲストスピーカー報告
3. 参加者交えての座談
4. これからにむけての提案

■会場　市民活動センター会議室1・2
■オンライン（Zoom）参加可能
■申し込みは048-731-3550、
popola@kasukabehall.jp
または申し込みフォームへ

トークセッション1「市民活動センター10年の軌跡とこれから」

12/4（土）14:00～16:00

〇プレ対談（事前録画）

三浦　匡史氏（都市づくりNPO さいたま　さいたまNPO センター）

吉田　理子（フェスティバル実行委員長）

〇ゲストスピーカー

大竹　規之氏（春日部まちづくり応援団）　西山　光昭氏（春日部C 工房）

〇ファシリテーター

新井恵美（フェスティバル実行委員）　　生越康治（アドバイザー）

はじめに

新井

時間になりましたので始めさせていただきたいと思います。ぽぽらフェスティバル2021トークセッション1「市民活動センター10年の軌跡とこれから」にご参加いただきありがとうございます。本日司会進行を務めさせていただきます、実行委員の新井です。春日部おやこ劇場と春日部こどもライブフェスタ実行委員会の方で活動しております。本日はセンターのアドバイザーの生越さんと進行させていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

こういう役割は非常に緊張しております。でも皆さんの力を借りて2時間の有意義な時間が持てたらなと思っております。2011年12月に市民活動の拠点としてセンターがオープンしてちょうど10年。でも実はその3年前の2008年から2009年の9月まで、市民によるワークショップが行われておりました。今日会場にいらっしゃる三分の二はそのワークショップに参加していたかなと思います。私もその一人なんですけれども、当時は公民館とは違う市民活動センターって何なんだ、どんな人が利用するんだ、どんな機能が、施設があったらいいのか、運営方法はどうしたらいいんだとか、ハード面だったりソフト面について当時は25名でしたが、途中でお辞めになられた方もいるので最終的には22名だったと思います。本当に9ヶ月にわたりいろんな意見を出し合って最後にはそのメンバーが、今日皆さんのお手元にも配られていると思いますが、そのワークショップのメンバーがこういう提言書というものを市の方に提出いたしました。それがいろんな形で運営方針ですとか条例にも活かされていったのかなと思っています。

今日このセッションにご参加の方は、多分今までの10年これからの10年もきっとこのセンターに熱い思いを持ってらっしゃる方が参加してくださっていると思っておりますので、皆さんといろんなことがお話できたらいいなと思っています。

ではさっそく始めていきたいと思うのですが、当初、当時ワークショップのアドバイザーとして関わっていただきました三浦さんにこの場に来ていただいてお話をと予定していたんですが、三浦さんのご都合が悪く、当時のワークショップの最年少のメンバーとして、実行委員長の吉田さんと事前にオンラインの対談を１時間ほどしていただいたものを 15 分間の映像にまとめてありますので、まずはそれをご覧いただき、その後まちづくり応援団の大竹さんと春日部Ｃ工房の西山さんの方からお話をいただきたいと思います。ではまず映像の方をお願いします。

プレ対談（動画で再生）

三浦

僕は春日部での熱意あるワークショップと同じような活動を、ちょうど２・３年前にさいたま市で経験してたんですよね。ワークショップのメンバーにも紹介したけれども、さいたま市で市民活動サポートセンターを作る時に事前に施設づくりの段階で、どういう役割と機能を備えたセンターで、どういう運営が必要で、誰が運営をするのかとか、そのための施設の設えはどうあるべきかとか、市民参加のワークショップで議論して、「協働の 760 日」という冊子にまとめているのですけれども、まさしく 760 日間の長い時間をかけて色んな分科会を作ったり、市役所はそれを緩やかに認め、その活動を容認して施設づくりにつなげていくという体制を作ってくれた経験があって、春日部市でもそれは出来ると僕は思っていた。その市民活動サポートセンターで働き始めた時に春日部の湯浅さんから、春日部でも東部地域振興ふれあい拠点施設ができること。そこに市の市民活動に関わる施設を内包したいということで、それに向けた市民ワークショ

ップをやりたいという企画案は市の方で持っていた。じゃあどうやってやるかっていうところから相談を受けたんですよ。春日部市では直前に自治基本条例を作っていた。それから庄和町との合併からまだそんなに時間が経っていなくて、市民の中で話し合いの温度、基礎体温も高かったと思うんですよね。公募で募集した時に色んな意見を持っている人が集まっていてそれぞれ自分の活動を背負っていて、意見を求められないと発言しないのではなくて、どんどんしゃべる人が集まっていた。

吉田

黙ってなかったですね。

三浦

そう、黙ってない。僕が最初に行ったときに回数は何回でと言われていて、アドバイザーというポジションだったと思うんですが、どういう風に議論を組み立てていったらいいかとか、今何を話しあうべきかとか、その辺のかじ取り、ヒント投げみたいなことを頼まれていたんです。ちょっと板書がでてきたのでお見せします。

吉田

ああ、懐かしい。三浦さんがどんどん足を開いて行って腰が落ちて行って、いつひっくり返ってしまうのだろうと思いながら見てました。

三浦

話し合いをやるといっても黒板しかない部屋で、ホワイトボードがあるような環境ではなく、議論の枠組みを提示したり、公民館と何が違うのとかいうことにみんなすごくこだわっていましたよね。

吉田

まだこだわっていますよ。

三浦

協働とかまちづくりとかっていう言葉が凄く一生懸命語られていて、協働の現場にしたい、協働を生み出す現場にしたいという議論があって、協働ってなに？まちづくりってなに？誰が使えるんだ？誰に使ってほしいのか？みたいな議論をちょっとお題をあたえると皆さん一杯意見を持っていてしゃべるんですよね。これをセンターの中に全部総花的にぶちこんでも多分まとまりが

付かない、たぶん市役所は受け止め切れない予感もあって、何回かこういう会議をやる中で湯浅さんなんかとも相談して、皆さん自身に提言書をまとめてもらうようにしましょうと段々なったんです。最初から提言書を作ってもらいましょうという感じではなかった。

吉田

意見を聞きたいという、いわゆる通常のワークショップのイメージだったと思います。

三浦

市役所が設置しているオフィシャルな整備検討委員会があって、県の施設機能も入る建物だから、そことの調整とか保健所もはいっていたのかな、そことの調整事項もあるから、あんまり要望しても実現しないこともあるかもしれないという警戒心もあって、意見を聞いて使えるところだけとりあげて整備検討委員会、オフィシャルな会議の方に流し込んで終わりというよくあるパターンをイメージしていたと思うんですけど、もっとやれると僕はさいたま市の経験で思っていたし、これも隠すことでも種明かしでもないけど、担い手が市民なのか行政なのかの議論ありましたよね。そのことを考えると担い手が市民だったから、開館の時から市民が担えるのではないか、担うためには担い手づくりを兼ねるワークショップにしないとだめだよねという議論もしてたんですよね。そういうことを事務局とディスカッションしながら１回２回３回やったくらいのところから提言書を参加者メンバーに書いてもらう流れでプロセスをデザインしなおした。皆さんに諮ったらやりますって感じだった。編集委員会、編集部会みたいなものになりました。

吉田

その中で動きがみえていた中で、変えていったということだとすればもっとすごいことです。

三浦

思い返すと震災の少し前なんです。ずっと協働とか参加とか市民が公の領域にどんどん自発的に参加していくというのがずっと盛り上がっていった時期だったような気がしているんですね。震災があって、よりそういうある意味本当の民主主義というか、市民が自治する力が大事だっていうふうに思うはずだったと僕はあの時ちょっと思っていて。だけども客観的にみるとあまりそうならなかった。凄く大きな災いだったし、そのあと経済的にも厳しくなったり暮らしの基盤が危うくなって、その時公の力ってすごく大事なんだけど市民が公を構成する気概が少し弱まってしまって、やっぱり国に何とかしてほしいとか、然るべき人達にという感覚が市民側に少しはびこったと思うんですよね。公の場もその後市民の力を信じて一緒にやるというより、もうちょっと事業とか企業とか経済的にしっかりしたところと公を回すみないた感覚になっているような気

がしていて、そういう意味で言うと震災前の盛り上がり、市民が色んな事ができるぞと熱をもってきた後のそこから震災を経ての 10 年ですよね。少し協働という概念も変わったと思うし、市民と行政の距離感も変わったような気がするんですよね。この提言書は形になっているじゃないですか。これって東部地域振興ふれあい拠点をつくりますという実際の整備検討委員会、いわゆるオフィシャルな検討プロセスからちょっとはみ出していると思うんですよね。だけどこの時の行政はちゃんと行政の政策判断として市民参加ワークショップが必要だと考えて、当初は意見をもらうだけのつもりだったけれども提言書という形のあるものに作り上げてもらって受け取ったというところまで歩み寄ってるんですよ。というか考え方を柔軟にしているんですね。そういうコミュニケーションがもっと市民と行政の間でされる必要があると思っていて、そのことが僕の身の回りでは若干コミュニケーションが薄くなっている。枠組みを決めたらその通り。市民参加、住民参加といわれて 20 年 30 年たつので悪い意味で慣れてしまって、手慣れている枠組みが決まってプログラム組んでやってしまう。だからやっている間に気づきとか変化がなかなか生まれない。もっと行政も柔軟になるべきだし市民の側ももっと柔軟になってよくて、毎年毎年この新しい協働という市民が参加できるチャンネルを持った政策課題は呈示されていると思うんですよね。そこへ参加する市民、関わる市民が言われたことだけをやるのではなくてもっとこうやっていいんじゃないのと言っていけると思うし、行政の側も市民自身がこういう物（ワークショップ提言書）をつくりあげる力を持っているんだと信じてやってもらっちゃうべきだと思うんですよね。

日本社会全体で人口が減っていくとか、経済がずっと停滞したまんまで国際競争力が落ちているとか、そういうなんとなくじり貧な感じの世の中で、決定的にどうにもならないという状況のあからさまな課題よりも、なんとなく全体に蔓延している閉塞感とか、なんかうまくいってないよねって言語化できない問題みたいなものを市民と行政、街の中で話し合っていかないと、本当にあと 20 年 50 年凄くさびしい街、さびしい国になってしまうような危機感はあります。

吉田

人口が減っても、経済成長が止まっても、でも幸せって思えるならそれでいいじゃないかと。そこまで思い込んでしまえば結構なんでもできると思うんですけどね。

三浦

それがなんかあたかも上手くいっていないことが上手くいっているかのように誤魔化す感覚で、そこに向かってしまうととんでもない落とし穴がありますよね。上手くいっていないことはもっと話していく必要があって、話し合う力が必要。いま居心地のよい活動の現場を持っている人が、ちょっと敬遠しているような自分と意見が違う人とそんなにストレスなく出会う、そうい

う場が絶対必要なんですよね。いきなり喧嘩ごしに殴り込みに行くわけにいかないので、そういうさりげない異なった分野や価値観の異なる人と触れ合い出会う。そこで議論が起こるわけですよね。見えて来てない課題が見えてくるわけですよね。スタートにあれだけの熱量と話し合いの現場があったから。そこで助走するパワーがあったからあの坂が上れたわけです。

吉田

だからまた次の坂を上る準備を始めないとね。

三浦

そうなんですよね。ここで２段ロケットの２段目に点火しないとね（笑)。

【対談終わり】

トークセッション

新井

ありがとうございます。実際は一時間位お話しをしたのですよね。15 分程度にまとめて分かりやすい映像になっていたかと思います。引き続きまちづくり応援団の大竹さんの方からお話いただきたいと思います。お願いします

大竹

春日部まちづくり応援団の大竹といいます。よろしくお願いします。見回したところ、この市民センターをつくる時にかかわりを持った人、ワークショップに参加した人、それを起案した人、事務局に居た人とかを除くとその時いなかった人は二人だけ、そちらのふたり。ワークショップに出てらっしゃらなかったですね(笑)。

お手元に春日部まちづくり応援団のウィークエンドブランチという標題で A3 の資料をつくりました。平成 14 年、2002 年埼玉県では「彩の国 5 カ年計画 21」というのを作りまして、埼玉県は西部から発展していき東部は遅いほうだったので、東部地域振興ふれあい拠点施設、いまのふれあいキューブの整備計画が決まり、そして平成 17 年、2005 年（庄和町との）合併がありました。その新市地域計画書及び総合振興計画の中で参画協働プロジェクトをつくる、そのなかでふれあいキューブの中に市民活動センターを設置するという方針が決定されました。

当時の市民参加推進課の担当の方々がセンターの運営について、市民の声を反映させるために、どんなセンターにするのかを聞くための市民ワークショップが開催されました。ワークショップに応募したのは全部市民です、誰も俗に言う何々団体の代表さんとかではなく全員一般の市民でした。当初 25 人で、提言書の一番最後にこういう人たちでまとめましたというページがあるのですが、女性 11 人、男性 12 人。男性女性ひとりずつがこの最後の時にはいなかったですが、12 対 11 という男女バランス。それから 30 代から 70 代まで。これ 12 年前のはなしですよ。（年代が）散らばっているわけです。バランスがいい。40 代が少ない。一番若い 30 代が吉

田さん。一番の年寄りが 70 半ばのひとでした。今日はお休みしていますけども。ボクは 60 代になっています。68 か 9 でしたからもう 70 に近いです。それから 12 年。いまここで、そういう人達はまだ何かやっています。

先ほどふれていただいた提言書ですが、最初は報告書でした。このあと編集のほうにさっき触れていましたが、ある市民参加推進課のメンバーの人が産休に入ってしまいました。それで通常このように市から頼まれて報告書をまとめあげるという時は、色んな話を積み上げておおよそこういうもんだなと皆が言ったあとは、事務局が皆さんのお話しは大体こういうものになりますね、という下書きを皆に出してどうですかとなるのですが、このワークショップでは一切それがない。すべて全部やってください。市民の皆さん頼みますよ。さっきあったような今から思うと素晴らしい進め方をしてくれたんですね。この提言書の表紙裏表紙を含めまして全部その当時のワークショップメンバーが関わり、まとめあげました。これはですね、センターのホームページの「設立経過・条例」をクリックすると全部見られます。是非皆さん見てください。さきほど午前中にもありました、運営の方針なども出ています。その後提言書をまとめあげて市長のほうに提出したのですが、25 人の中でどうするよという話になり、何か続けようよと声が上がり、私も、私もという形で集まった有志でセンターを応援する会を立ち上げました。市民が望むセンターになるように監視するではないですが心配だから見ていたい、見ていたい会ではいけませんからセンターを応援する会を立ち上げました。センターが出来てしまった、さてどうする、だったらせっかく我々メンバーで集まったんだから「市民活動を広めて街を元気に」をコンセプトで「春日部まちづくり応援団」と名をつけてまちづくりを支援する中間支援組織ということにして活動しようということになりました。

その活動の代表的なものの一つは、市から委嘱された市民活動フォーラムの開催です。10 年間企画と運営を行ってきました。フォーラムのコンセプトは協働によるまちづくりです。今一つは出来たばかりのセンターの知名度を、みんな知らないよね。なるべく早いところ市民活動センターを知ってもらうじゃないの。何かできるか？ということで春日部にいるこんな人、春日部のちょっと面白いことをやっている人がいます。こういう人ってどうだろうといって、ウィークエンドブランチという、ウィークエンドの朝ちょっといい話を聞きませんか、ゲストのトークを聞いてゲストを囲んでおしゃべりする。そんなサロン、ウィークエンドブランチというものを開催しました。これまでに 62 回を数えています。ここにありますね 。コレ看板です。 ウィークエンドブランチでは、こういうチラシやポスターをつくりました。これまで 62 回やりました。63 回目、実は 2020 年 3 月 15 日、映画「翔んで埼玉」はどう作られた。翔んで埼玉の裏話を聞きたいということで、それに大きく関わった埼玉新聞の吉田俊一さんという編集局長にゲストトークをお願いしました。ところがこの時あたりからコロナ蔓延が非常にきつくなっていく傾向があって行政が公的建物の使用についてはこうしたい。簡単に言うと人が集まりにくい状態が生まれ

ました。従いまして延期延期なんですが、実はこのポスターを作ってふれあいキューブの 1 階にチラシがいっぱいあるところがありますが、50 部とか 60 部そこに置くのですが、4 回転しました。暫くすると無くなる暫くすると無くなる。これはえらいことになったなということで、ここ（会議室 1+2）は併せても 100 名しか入りませんから、消防法では 99 人ですが、とても開ける状態にはない。人が集まれない。せっかくのこの話を沢山の人に聞いてもらいたいよねということで延期になって、でも実は来年の 3 月できないかなとゲストの吉田俊一編集局長はもうアサインしてあります。会議室は抽選予約をいたしましたので、出来れば 3 月にやりたいなと思っています。規制がかかって併せても 50 名しかはいれないので、でも一回やろうと思っています。

センターの企画にいろいろ参加したりその事業を支援したり、出来ればセンターならではの市民活動に関すること、まちづくりに寄与する講座の提案をしてまいりました。

実はこのメンバーの人達はそれぞれが他で活動するグループにも所属していますので、幅広く活動しています。先ほど申しあげましたが、皆 12 歳年を取りましたので、頭はまだシャープですが、身体が動かないという典型的な口が達者だが…という高齢者いっぱいのグループであります。

さてセンターがオープンしてから 6 年間は行政による運営管理でしたが、当初は皆が未経験なわけですよ。先ほどの映像にあったように市民活動って何だってところから始まってますから。そのうち市民とはなんだというところまでいきましたが、センターの役割は何かということで戸惑いや分からないことが多々あったわけです。それから行政の特徴なんですが、人事異動で一から学ぶ職員も当然でてきます。職員だけではなくセンター長もそうです。利用者のニーズに答えきれない。ニーズが理解できない。管理は出来るが企画や計画についてセンターの発意による企画計画が乏しいなど運営面での問題がありました。

この点については経験ないもんね、我々でさえそうだもんね、仕方がないと利用者の方が理解をしてあげる。という　　協働をして今日に至ってます。

センターの中で今はいませんが、学生さんがずいぶん勉強をしていました。ボクこんなことを言ったことがあります。この学生は我々の次のルーキーたちだよ、使わない手はないよ。どう使うかは最初の切り口はこの 10 周年記念でも毎年毎年オープン記念をやっていますから彼らに手伝わせようと。頼むから手伝ってくれという言い方をして実現はしていませんでしたが、彼らは有力な市民の後継者ですから何とか使いたいという感想を持ちました。

その時に学生との接点を持つためにはこう言ったらどうかとといったアイディアは、目的は何だったんだっけ？とそこから出発すると結構そうかというものが出てきます。それがマーケティングの基礎です。宜しくお願いします。

新井

ありがとうございました。ワークショップの頃から中心になって提言書の方もまとめていらした方なので、本当はもっとお話したいんだろうなっていうのが伝わって参りましたけど、またそれは後半の方でと思います。

では続いて春日部Ｃ工房の西山さんお願い致します。（センター開所）当初からの利用者っていう立場からよろしくお願いします。

西山春日部Ｃ工房の西山と申します。よろしくお願いいたします。今日の会はですね、大きな枠で言うと市民活動で作る持続可能な社会に向けてっていう事が一つあります。そして今回のトークセッションは、テーマが市民活動センター10年の軌跡とこれからということです。

私に与えられたテーマは利用者視点からということですので、利用者視点を中心にお話しさせていただきたいと思います。実は私もいろんなことをやっておりまして、そういう中から掘り起こしてパワーポイントを使って頭の中でイメージして久しぶりにパソコンと格闘して色々日々を送りました。コロナが始まってからこれを生き抜くのには誠実が一番大切だって言う事を聞いたことがあるんですね。そんなことで自分の置かれている状況をきちんとお話ししながら役を全うしたいなと思います。

実はここに登録してから10年経つんですね。75歳になったんですが、知的なこのような作業をやりながらつくづく初めて気がついたのですね。人間は劣化をするということですね。それと

同じでに実は何もしなければ街も劣化する、ぽぽらも劣化するということだと思うんですね。そういうことを気が付くとそのパワーポイントの一番言いたかったお話は別にしても、与えられたテーマの「利用者視点から」に特化したお話をさせていただこうと昨日の夜決断をして、夜から一行ずつワープロで何言ったらいいかなと書いたものがベースになっています。滑舌も悪くなって、本当にしみじみわかることがありますので、ただ色々な意味で失礼なこともあるかと思いますがよろしくお願いいたします。

そういうことで 10 年間このぽぽらと関わってきました。その中で感じたり考えたり気づいたり、あるいは憤慨したりしたようなことも出てくるかと思いますのでよろしくお願いいたします。さらにできるだけこの後に続く座談がありますので、そこのところが有意義なもので、できるだけ本質的な話し合いができるような場であって欲しいということで、これは利用上での気づきとか提案が中心になりますので、ぜひこの後の座談会で本質的な話を皆さん方が展開していただけたらと思います。12 分ぐらいでお話を終了したいと思います。

今やってることは何かということを自己紹介しながらお話しさせて頂きます。このセンターへの登録の時には景観とか街づくりが目的の団体として登録しました。職員の方に景観ですか、貴重な存在ですっていうようなことをいわれて、今でも思い出したりすることがあるのですが、今そういうようなものに加えてまちづくりとかコミュニティガーデンとか川作りとかいろんなことをさせて頂いています。

センターを使ったことを思い出しながら書いたものでとりとめもなくなってしまうんですけども、共同事務室を結構使わしていただきました。この中で気の利いたものが一つだけあります。登録団体のマトリックス表ですね。いろんな登録団体の名前があってどういう分野をやっているかがマトリックス上に表現されています。あれはあそこに貼らないで外に出した方が絶対にいいように思いますね。

ぽぽらについて言いたいことは、ぽぽらはどうやら新しい公共の担い手を育て上げる所ということで、春日部市の中にはたくさんの部署があるはずですが、その中の最も大切な部署のように思うんですね。本当はこの後の 10 年を考える時に前の 10 年がどうだったのか、何が悪かったのかの総括をしないと絶対前に進めないはずなんです。こういう総括をぜひこの後やっていただけたらと思います。

ある建築家の話ですが、家は作物だと。家を育てるのは住む人だと言っている建築家がいるんですね。それになぞらえると、私たちが利用している黒い建物の中のぽぽらは作物、それを育てるのは利用者だという関係になっているのだと思います。我々が育たないと、あるいは価値観を変えないと、価値観をもっと凄いものにしないとここが変わらないんです。残念ながらそういう意気込みが市民側にないといけないっていう指摘をぜひしておきたいと思います。

こういう経験もありました。環境ネットワークっていう会議に誘われて入っております。そこ

の会議でいつもここの場所を使わないので、もっとここを使って私たちが行っている姿を市民の方々や他の団体に見せるようにしてくださいという提案をしました。ボツでした。何故かと言うと自分の部署の施設を使ってやりたいから。いつもやるのは勤労者会館。一つの市のなかでこういうことが本当にいいのだろうか。些細な予算をケチってわざわざそこでやる理由はなんなのかってことですね。

是非いろんな活動を市の方々はここの現場で見せる。これは大切な役目だと思うんです。自分の管轄で隠れたところで表現悪いですがやっていいわけがないです。是非見えるようにしていただきたいと思います。ここで行なっている月間テーマは私が大好きな企画モノです。多分私が一番やってるかと思っています。別に自慢話をする必要ないんですけども。

そういう中で感じてる事が一つあります。実は私も調査したことがあるんですけども、貼ったものを利用者は見ない。これは確実です。こういう 10 年間を過ごしてきたんです。この後の 10 年間はそういう 10 年間でいいんですかということです。何が悪いのか。いやお前の絵が下手で見る人がいないんだよと言われればそれまでですが、そういう話でないように思う。ぜひ待ち時間でそこいらをうろちょろしている人もたくさんいらっしゃるので、ここに来たらここにある掲示を見るという習慣、そういうことが市民の中で起きたとしたら春日部は変わります。職員の方がそういうことをずっと見ていれば多分春日部が変わりそうか変わりそうでないかが分かります。

ここでアンケートです。久々にこれを読みました。春日部市市民活動センター運営方針です。私コピーして持ってます。これを一通り読んだ方、手を挙げてください。これはですね今日来てるメンバーで読んでなかったら、これはちょっとやばい話ですので、挙がって当然なんですね。これが一般市民とかここの利用者会議でもし手を挙げてもらったら多分でいらっしゃらないはずです。はたまた中身をきちっと読んでいないということだと思うんですね。何が問題かってことなんですよ。何が問題ということを知らない 10 年間で、また次の 10 年間でいいんですかって話なんです。所長さんもいらっしゃるから言いにくいですけども、こういうものこそあそこに常時閲覧できるようにしておくべきです。使っている機能が何か、というふうなことですね。もうお時間ですか。この後のなんとか提案型とかまだたくさんあるんですよ。ぜひ 10 年の節目ですから本質的な話がどこかで行われないと春日部はもうやりようがないです。私たちが分からなくちゃいけないっていうことを最後にお知らせして終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

新井

西山さんありがとうございました。10 年の総括、ぽぽらは作物で、育てるのは私たち市民。その私たちが今までと同じやり方でいいのかって、すごい提言と言うか、これから先に向けての

宿題をもらったような気がします。それについては参加している皆さんと話していきたいなと思っています。

たぶん喋りたい方がとても多そうなので、手を上げていただいてなるべく全員に話していただきたいので、基本一人３分でお願いします。

西山

（追加で）あのフレーズは住宅の場合の家は、作物の話なんですね。ここの場合には職員の方もいらっしゃるので住んでいる人は一人じゃないんですよ。家族じゃないんです。ですからあの場合のフレーズは「市民とここで働いている人達」としないと塩梅が悪いですよね。ですからそこのところは訂正させて欲しいなって思います。

新井

市民である利用者と運営する側の両方のことでしょうか。両方が育っていくっていうことになるでしょうか。では忌憚のない意見を、先ほど西山さんもここからが本音で喋っていきたいという時間になるかと思います。先陣きって手を挙げていただける方いらっしゃいますか。

生越

メンバーで打ち合わせした時には、そこに貼ってあるような利用者会議がやっぱりまだまだちゃんと機能していないんじゃないかとか、言ったことが改善されないとか、つなぎ役としてまだまだできていないんじゃないかとか。そもそも利用する市民側の役割ってもっとちゃんとあるんじゃないかとか。登録団体数とか利用者数で測れない市民活動の評価があるんじゃないかとかっていう形で、結構いいキーワードを出していただきました。それを見て言っていただいてもいいですし、あとは冒頭の吉田さんとと三浦さんの対談を聞いて当時の感想を言っていただいても結構です。そいうことでまず最初の方はフリーにお話ができたらなと思っています。

吉田

登録団体で言うと S-net サポーターズの吉田です。今日のお話、皆さんの話を聞いて思い出していたのと私自身が三浦さんと対談した時の話を少し、全編はオンラインで後で流していただいてるんですけども、三浦さんと話をしていて結局その後三浦さんとは直接こっちでみんなで活動したっていうことはないわけですよ。もちろんたまにお会いしますし三浦さんを忘れてるわけではないんですけども、いろんなところで個別にみんなそれぞれの活動をした 10 年だったけど、何となく最終的には今考えてることというのは一緒なんだなっていうのを最終的にで見ていただけると分かるんですけど、もっと本質的な話をずいぶんして、何で私達は活動するのかというか市民活動って何というところから社会って何だっていう話まで入っているんですけども、それを考えた時に今回の実行委員会でも思ったけど、みんな伝え方についてすごく言ってたんですね。どうやって伝えるかどうやって広めるか。それはぽぽらがあまりにもまだ知られてないというのもあって、相変わらずふれあいキューブの 4 階って言うと分かるんだけど、ぽぽらが分からないとか、なんでぽぽらっていう名前だったんだっけとかいろんな話をしたんですけども、今日の午前中の（シンポジウムで）どう広めるかどう伝えるかっていうのを最終的にはそこに来るんだなと思っていて、それがその後ろに書いてあるようなつなぎ役とかあり方っていうのに繋がっていくんじゃないかなと思いました。

利用者会議のあり方自体が、要望とか何をして欲しいとかどうしてもそういうような形の、自分たちも運営しているっていう感覚にやっぱりならない部分が多くて、あくまで利用者登録者であって、ここを作っているメンバーの一人であるという自覚がないように感じてしまうのは、やっぱりここの役割とかそれから何をここでしたいのか、市民活動って何なのかというのは伝えきれてないんだなというのが正直な感想です。10年間いろんなことを自分もやってきたつもりだったけどやっぱり伝えきれない。それが午前中の若い人とどう繋がるのか、どうアピールするのかにもつながるし、なんとなく最近のキーワードとしては伝え方っていうのがあるから、私としてはみんなどういう風に伝えてるのっていうのはちょっと聞いてみたいなと思います。

会場参加者1

まさに今日私が伝えたかったことですね。ぽぽらって知られてないんじゃないって、もう嘆くようにおっしゃる利用団体の方がいらっしゃいますけども、ここに登録したからにはあなたもセンターを動かしていく人だっていう自覚を持たなきゃいけない。私もそうです。知られてないというのは自分の動きが悪いんですよ。その団体がどうやって知らせようとしているか。センターを育てながらそこを利用して自分たちも成長していこうとしているのかっていうところを考えながら広報していく。そして自分たちの活動を広げていくということに繋がると思うんですね。だからさっき作物を育てるということがありましたけれども、その作物を育ててるのであればこんな作物があるよ、買ってくださいと、みんなに伝えていかなくては。こんなに良いものができたんですよ、これで是非食べてみてください、これ買ってくださいっていうことも自分の活動のやり方の一つだと思っていかなくちゃとつくづく思います。10年間たってもどこにぽぽらがあるのか、何なのかがわからないというのは自分が悪い。登録している人が活動するということは、宣伝するっということも活動のひとつだと思いました。

西山

関連して、伝えるって話で利用者会議でも出てきていたことなんですけれども、案外簡単なことで、中央公民館とかは結構新聞とか広報ですか、あの中に挟まれてきたりするんですよね。どのくらいの予算規模があればそういう投入ができるのか知らないんですけども、そういう季節ごとにぽぽらの働きとか機能とか皆さんにお知らせ出来るように、市が毎月全部に配ってるわけですから、そういう中に入れさせてもらう仕組みを作ればいいように思うんですよね。それはそういう議論は10年間やってきているんですね。それを何が駄目でどこをクリアすればいけるのかというのをぜひ知りたいんですよね。それができるんであれば、ぽぽらの位置も名前も案外比較的早く伝わるのかなと思ったりします。

新井

会場だけではなくオンラインの方で参加されてらっしゃる方も何かご発言はないでしょうか。この 10 年、これから先の 10 年ということで、今までのお話を聞いたりとかホワイトボードに貼り出されていることに対してのご意見とかどうでしょうか。

オンライン参加者

今のこのセンターができた当初に訪問して、全く市民活動を皆無の状態から声掛けしてもらって、それこそ今日登壇された大竹さんとか所属するまちづくり応援団の方に参加させてもらいながらだったんですけども、まず自分の中で市民活動をいまだによく分からなくて。普段は働いてますから、自分の事業に繋がるような地域の課題解決が最終的には望ましい形なので、若干皆さんのような市民活動の考え方と違うと思ったんですけども。だから最近はコロナもあってそちらに行く機会もなくなっているんですけど、今は活動らしい活動してないんですけれども、利用者会議は何度かお誘いいただいているんですけど、参加できる日程がちょっと厳しかったりするので、他の方がどういった考え方をするのか知りえてないんですけど。明日はそちらに参加するＺ世代の話も興味あるので、そういった人たちにどういう風な考えをもっているかというのもこれからは関心が一番強いので、明日また色々話を聞きながら考えてみたいなと思います。

新井

ありがとうございました。すいません突然に。市民活動をどう伝えるか。はい、どうぞ。

会場参加者２

市民活動センターのあり方みたいな話なんですけども、この市民活動センターを知らない人も多いとよく聞くんですけれども、市民の立場で考えたら市民活動推進してるところは市民活動センターだけじゃないよねと。他の施設を使って市民活動してる人がすごくいると思うんですよ。ですから市民活動センターを知らなくても市民活動はできるよって。本人とすればできるいうことだと思うんですね。市民活動センターというのはそういう多くの中の一つであっていいのかっていうことなんだけども、そうじゃないような気がするんですよね。春日部市全体の市民活動がどうであるのかっていうところが一つあって、自分たちの守備範囲のところはここですよと。やはりまずは春日部市全体の市民活動をつかまえるといろんな推進拠点があるんですけど、公民館とか男女共同とか社協だとかみんなそれぞれ市民活動を推進してるわけですよ。そういうものを把握して、春日部市の市民活動はこうだっていう全体のイメージを掴みたいというのがあるんですよね。そこがひとつあって、今後こういう中で市民活動を充実させて広げていくところの大きなポイントだと考えてるんですけどね。

新井

確かにこの施設だけではなくいろんな場所で活動している方も多いし団体も多いと思うんですけど、本当に春日部に 10 年前、春日部の市民活動を活発化するための拠点としてオープンした施設が 10 年経ってなかなか認知度が上がらなかったっていうことは、大きな大きな課題なのかなって思うし、それを利用者である私たちももちろん、管理運営している側も永遠の課題なのかなと思うんですけども。当時ワークショップを行政の担当者として牽引していた方から、10 年前自分の中で多分こういう施設になるであろうじゃないけどなんか未来予想図があったんじゃないかなと思うんですけど、どうでしょうかその辺は。10 年経って差し支えなければお話しください。

会場参加者３

今のお話で思い出したんですが、今日お配りいただいた提言書の 11 ページの中で市民活動センターの４つの働きで「ひろめる」「ささえる」「つなげる」「はたらく」、この４点をワークショップの中で出して頂いて、それをそのまま運営方針の中に大事なものとして位置づけさせていただいたんですね。センターを知ってもらうとかセンターで活動してもらうというのは「はたらく」の部分だけなのかなと。でも一番重要だったのは広めていく、センターを広めるのではなく市民活動というものを広めていく。それから午前中の（シンポジウムの）中でもあったんですけれど、地域課題ですとかそういったものは春日部市のあちらこちらにあって、その課題を解決する場が市民活動の場と考えると、ここは本当に一部の拠点でしかなく、色々な場に色々な拠点があって、そこでそれぞれの課題を解決する方々がいる。その方々が活動しやすいように支える。それがセンターの役割なのかなと。もそういう意味では春日部市の市民活動を広く知り、情報を集約し発信する機能というのは市民活動センターじゃないとできない機能なのかなと。公民館ですとか教育センターですとか色々な場がありますけれど、どうしても公民館はその地域のみであったり、教育センターは教育というとこに特化してしまったりする。市民活動はすべてが市民活動につながる。社会教育的な、生涯学習的なことも個人の趣味から発してるかもしれないけど、それを人のために、外に気持ちを傾けた時に市民活動になるというようなこと言って、わりと公民館に登録するような社会教育団体もここで登録をさせていただいた記憶があります。ここは利用者が足を運んでくれる方が嬉しいんですけれど、ここが発信する情報ですとかそういったものを例えばここに来なくてもいま受け取れる時代ですので、そういったところで受け取って皆さんの活動が豊かになっていく。そういう機能を充実させてほしいなと思っていたような気がして、いま思い出しております。

吉田

今の話でちょっと思ったのは、サークル作ったりとか、ちっちゃい何か活動団体を作ったりする時に公民館っていうのは最初に頭に浮かぶもの。もちろん公民館が市民活動団体が活動する場所だという認識はあるし、それで全然いいと思うんですけど、私がここで実際に登録したいくつかの団体は、例えば中小企業家同友会登録してますけど、経営者、企業っていうのは当然営利だっていう感覚。営利活動しているっていう感覚で私たちは持ってたんだけれども、その経営者の集まりといった形になるとライオンズクラブだったり JC だったりとか皆そうなのかもしれないんですが、非営利的な活動をしている、公益的な活動してる部分は企業であってもそれはその活動が外に向いている、社会に向いているものであれば、それは市民活動なんじゃないのっていうことをあの時私は思って、うちの団体の方にその話をして、そしたらもちろん登録はしたんですけどその団体自体が自分たちは営利活動じゃないんだ、公的な活動なんだっていう再認識をしたんですね。あれから十年たって今同友会は企業が地域の中でどういう存在であるべきかって話までできるようになってきているので、やっぱりそれは 10 年間、ここだけじゃないですけどもこうした場所に登録をしたところから意識が変わってきたなっていうのは分かります。あとは考えてもいなかったのが PTA とかね、八木小は登録してますけど PTA だってこれは市民活動なんだよっていうような、今まで自分たちがその中だけしか見れなかった大きな趣味じゃない団体、いわゆる文化的な活動ではないような、だけど団体として組織として持っていたようなものが、ここに登録をするっていうタイミングで改めて定款ないし会則を見直して自分たちがその NPO のどこの項目にあたるものなのかっていうのを確認して話し合いをするっていうこと自体が、自分たちの活動を見直すことになっている。登録をするという行為自体がもう市民活動につながるっていう意味ではちょっと特殊な場所なのかなって思います。それは公民館的なところではそういう話にはならないような気がするし、同友会は公民館に登録をするっていう発想にはならないと思うから。そういう意識の違い、価値観を変えていくうえでのきっかけにはなったかなっていう感じです。

会場参加者 4

居るからにはちょっと一言話ししようと思います。先ほどこちらの 11 ページの市民活動センターの四つの働きということを説明していただけましたけども、その後吉田さんもフォローする形のお話がありました。多分私も同じ趣旨のフォローになると思います。私は越谷市の人間ですが、いきがい大学 23 期の校友会会長として登録してます。ボランティアも過去やりました。その時にここぽぽらの事務の方からアドバイスを受けたりお話ししましたけど、今お話ししたいのは越谷もそうですけども、クラブ活動とか体を動かす、あるいは音を出す、こういったそれぞれの同好の志ですね、これは公民館が主体でやっております。やってるのはいいんですが、そこでは流れるだけでよかったね、健康な汗を流して良かったねとか。そういう意味でまとまってはいるんですけど、でもそれは複眼ではなくて単眼っていうか、仲間うちだけで終わってしまうような印象を受けます。それに対してぽぽらがあることによって別の見方、価値観、空間的な場所を変えることによって、人間は結構複眼的立体的に自分の生きざまや活動を見直す機会が増えたというのは、いきがい大学の校友会とかクラブ活動も含めですけどこちらを利用させていただきまして、やはり公民館は違う。公民館はそこで素晴らしいことをやっているんですが、やはりここでプラットホームの役割は所詮無理ですね。皆さんのスマートフォンをお持ちですがスマホというのはカメラだとかメールとかいろんな機能がそこに航空母艦のようにいつ入ってきてもいいというか、そこを起点にいくらでも発展するものを Apple が開発して日本人はまねできなかった

んですけど、その前に日本人はカメラにしてもウォークマンにしてもいっぱい単発では持っていましたけど、そこでお終いで世界的なものは作れなかったんですね。それに対してプラットフォームを Apple が用意することで全世界を席巻しています。そこから学ぶんじゃないですけどこのぽぽらの存在があることによって、市民活動の発展があるんじゃないかと思うんですが、それを利用者の方は気づいていない。利用しきっていない。非常に無駄なエネルギーとか時間を過ごしてるように思います。そこのところのアドバイスなりコンサルティングなり知恵が欲しいですね。知恵のある人は必ずいるし、そのうち気がついて色々と提案も複数の形で出されるかと思うんですけど、そういう意味でアイデアを募集するよう呼びかけ続けると。ここにいる方は大なり小なり気がついておられるので、アドバイザー、コンサルティングできる立場におられますので気がついたらどんどん事務局の方に出していくと。こういうふうにお願いしたいと思います。

大竹

ここで先ほどのオンラインの方の意見に興味がありまして。午前中の（シンポジウムで）山口さんがいわゆる個の価値と社会に対する価値はどっちもいいんじゃないという、要するにまちづくりでくくるとどっちもありなんですよ。市民活動という形でくくるとこれはどうかなというのがあるけど。まちづくりに寄与しているかどうかというくくりで見るとあるんですね。僕はこの市民活動とは何かという議論の中で、社交ダンスだめだよねなんて言ってたんだけども、そういうグループが実は庄和に 4 つあります。それがいきいきとやっている。いろんな形の楽しみなんだよね。それは駄目だよ市民活動じゃないよということがベースになってあの提言書ができてます。けれども最近そういう形で生き生きとしていろんな地域で五つ六つできたみたいな話になったら、まちづくりに寄与してるのではないかと思ったんですよ。ピンピンコロリにこよなく近くなる。これはね明らかにまちづくりだというふうに僕は最近捉えています。ただ市民活動とは何かっていうこととまちづくりは常に表裏一体で一緒にまぜこぜで議論してみませんかと言いたい。

新井

市民活動、そうですよねなかなかそのことを市民活動ってなに？って真剣に考える機会もなかなかなくて、たまたま自分はワークショップにも関わり、この施設も利用し、私が所属している春日部おやこ劇場という団体は会員制の会なんですね。どちらかというと公益ではなく共益、自分たちが子どもたちとお芝居を観たり楽しい活動しようって入ってきている人たちがほとんどです。でも傍らその公的なライブフェスタという会員ではない人に向けて一年にたった一回だけれども、そういう場を作って楽しんでもらいたいってこともこの 10 年続けてきて、それが自分た

ちのやってる活動が全て公益というか社会貢献っていうくくりじゃなくていいのかなって思って。本当に 365 分のたった 1 日がそれかもしれないけど、でもそのことでこのセンターに私は移ってきた時に、西山さんはじめ多くの方と知り合って、そして本当に大規模なイベントを続けてこられてるなと思うので、そういう面ではこのセンターがあってくれてありがとうという実感はあります。

なので午前中、武田センター長の方からも登録団体がこのコロナ禍においても減ってないっておっしゃってたじゃないですか。なくなってしまった団体もあるけれども増えているよっていう話があったので、きっともちろんここに登録するっていうことで審査じゃないですけど、どういう活動されてるんですかってことを調査をされ、こちらのセンターがそれなら登録して頂いていいですってことで登録してる団体が増えてるって事は、認知されてないわけじゃないんだなと思っているので、本当にこれから先にそれをまた発展していったらいいんだろうというのが、施設側も利用者側も課題なんだろうなっていうふうに感じました。

会場参加者 5

いまのいろいろな話を聞いて一番考えるのが、市民活動ってなんだろうってすごい思うところがありまして、なかなかやっぱり市民活動センターにずっと居たら、居れば居るほど市民活動って何かって分からなくなってくるところが出てくるかなってのはすごい思ってます。変な意味ではなくて、いろいろな考え方を持ってる人とか、いろんなことをしてる人が集まる中で、それを定義することってすごい難しいんだなっていうのが感じたところですね。自分が気をつけてた所っていうのは、いろんな考えがあって、色んな活動している方々がいる中で、その人たちが次に何がしたくて次に進みたくってっていうことで考えてる方々がすごくいらっしゃる中で、そこをどう後押しできればいいのか、そこが次のステップにつなげるにはどうすればいいのかっていうところを、本当にちょっと後押しするだけで動きが全然変わってくるので、少しでも支える場所っていうことが市民活動センターの一番大切な所なのかなと思います。あと団体さん側の中でもそこであったことを踏まえて、こういう時ここに来れば何かが見つかるだろうとか、ここのコンセプトでもあるんですけども、そういったところですね。あとは何かに繋がりたいなと思った時に、市民活動センターがあるという風に思ってもらえる場所であればいいなと思ってます。

会場参加者 6

先ほど提言書の 11 ページの話が出たんですけども、私もちょうどたまたまそのページを開いてみていて、そういう思いでやってきたんだなということで、その「ひろめる」「ささえる」「はたらく」「つながる」ということで「ひろめる」はですね、知らない人がいるとかまだ周知が徹底してないとかとはあるものの、それは自分たちの責任もあるという事でもありますし、一方で

登録団体が一応増え続けていると。今　400 団体　10 年前は 0 だったわけですから、いろいろな団体はあるとはいうものの登録団体 400 という数字に達しているわけですよね。だからそれだけ広まったということでもあります。それから「ささえる」という点では今いろいろ私たちの活動の中でセンターの世話になってるという部分は日々感じているところなので、これも十分やっていただいてるんじゃないかなと思います。それから 4 番目の「はたらく」はいろいろな主催事業とか、そういうことで色んな企画を毎年新しくやったり講座を開いていただいたり、市民活動センターの 10 年経ってまだまだ足りないなっていうのは「つながる」の部分なんじゃないかなという気がするんですよね。ホワイトボードにも書いてありますね。「つなぎ役」とか、そういうことは皆さんが意識してるんですけれども、その 400 のそれぞれの団体は会員組織になっていて会員のなかで完結してしまうというサークルが多いんですけども、それを集めて総合して何か新しいパワーを作るというのは難しいですけども、その辺のつなげるところを今後どうしたらいいかということ。その一つの流れが SDGｓということで、持続可能なためには連携とか協働とかが重要だということで、先日も自治会連合会で、勉強会のなかで SDGｓと自治会ということで、その中でワークショップがあったんですけども市民団体グループと自治会との交流とまで行かないでしょうけども、そういうお互いに知っていってという活動を始めたんですね。その辺が繋がるっていうところで、もちろん学校もありますし自治会もありますしさっき吉田さんが話されましたが企業もありますし学生もあります。働きかけがないから学生も気付かないし動かないのだということで、我々も反省をしたのですが、そういう意味で市民活動センターが一つの核となって発信、働きかけというのを、今ちょうどその新しい流れがあるように、支援団体と企業、市民団体と自治会、市民団体と学生という形で結びつけていくような動き、企画や活動がひとつのるつぼの中から生まれるうねりみたいなところになってくれば、それはもう最後に「つなぐ」ができたという形で今後の 10 年というのか、まさに春日部の市民活動の中心である市民活動センターといえるのではないか。是非そういうコーディネートを市民参加推進課にもお願いしたんです。そういう動きを加速化していただきたいです。

新井さんと話したのですが、私は 150 戸くらいの戸建ての住宅地にいます。大体同じくらいの世代でこちらにきた連中ですから 100 戸は平均世帯主 80 歳くらい　50 戸は 60 歳くらいということで、年寄が多くて子供が少ない という現状なんですが、自治会をどうするか SDGｓにどう取り組むかということでは、いままで住民を結び付けていた地域のコニュニティーの中心は神社とかお祭りだったと思うんですね。お祭りは昔は自治会であったのですが、今無くなってしまいました。私たちのところも子どもが少ないということで無くなってしましました。

自治会の困っている事が沢山ある中で、たとえば新井さんが活躍している子供のいろいろな遊び方とか登録団体の中には昔の遊びをやってるとか風船アートをやってるとかいろいろな活動団体があると思いますけれども、そういう人たちが自治会の祭りのなかに出て行って、協働して盛

り上げてもらうとかそうすると一つの協働といいますかコーディネートとかになると思うので、協働、繋げるということをこれからの 10 年重点的にやっていけたらいいなと思っています。

新井

つなげる、繋がるって言うのは簡単だと思うんですけど、なかなかそこがね…私はとても図々しい性格なので、手伝ってくださいって言って、ボランティアです、みたいな感じで、本当に多くの方とご協力いただいてやってるんですけども、あの団体とこの団体をつなげる役割をセンターが今以上にしていただけると、一個一個の活動が 1 かける 2 ではなく 1 かける 3 だったり本当に 10 とか。でも無理することがないのかなって思ってるんです。自分の活動のほんの一部、できる範囲を何か協力しましょうみたいな感じでやってけば、市民活動って楽しくなかったら続かない。自分がやっていて楽しいって思うから続けられる。長年続けてるんだろうなって思うので、そこが「ひろげる」「つながる」ということが、やっぱり面白そうって自分が思わないと他とくっつきたいって思わないだろうし、その辺を何かセンターがもうちょっとバックアップしてくれると嬉しいな。なかなか私のように図々しくいく方ばかりじゃないので、そういう役割を担っていただけるともっともっといいのかなと思いました。

会場参加者 2

自治会の研修会があってそこにセンターが乗って、その場へ出たんですよね。ああいう場って今までなかったんですけども、そういう動きが一つ出てきたね。そういう中で話しすることがね、すごくみんなで噛み合って楽しくて、今後やろうなっていう気持ちになってくるんですよね。そういう意味でも今回のこういうのが基点となって「つながる」の方向に行くのかなと思いましたよ。

吉田

ライブフェスタって私は最初 PTA 関係で関わりましたけど、今回のこれもそうで何かこう大きなイベントがあると、そこに集ってもらおうと思って、私たち主催者側も探すんですよね。市内の方で小学校の放課後子ども教室やってますけど、それも私ここでいっぱいいろんな講師の人を、この前もマジックをお願いしたりして見つけられるんですよ。だから何か中心にあるイベント、お祭りなのかもしれないけど、それが昔はお祭り、主に地域にはそれぞれあってというのがあったのかもしれないけど、一年間に一個のいろんな大きな中規模でもいいけど何かがあって、

そこをするためにはいろんな人の手を借りなきゃいけないってなった時に、初めてこういうところは誰かいませんかって、だから直接利用者会議でマジックの方と私お隣の席になって、もう速攻で受付に連絡先知りたいんですけどってやるわけですね。こっちはずっと見てるから。ここに行けばいろんな人に繋がれるっていうのを私たちはわかってるんだけど、実際に何をできる、どうしようと思った時に、何かそれぞれの団体が大きな、ちょっと中規模ぐらいのイベントを開けるような状態になってくると、それはもう今回のぽぽらのフェスティバルもそうですけども、やっと繋がろうとするのかなこちらが。そして繋げようとするのかなっていう機会がいっぱいあるといいですよね。先ほどのお話だと、自治会がＳＤＧｓ をやってるなんて思ってないですからね、ビックリしてしまって、そんなことを知れたら、そういえばあそこの自治会でああいうことやってるならちょっと聞いてみようかって話になる。ここに来たら情報が集められるとか新しいことが知れるとかっていうところをちゃんとやっていこうとするなら、イベントをやるのは結構いいのかなって思います。イベントをただやればいいってものではないのですが。

生越

今日せっかくなので紹介したいと思いますが、お配りした資料の中に武田所長が作成した 10 年間のぽぽらの経緯があります。ぜひ空欄は皆様で埋めていただければと思います。例えば 10 年間を振り返ったりとか、何があったんでしょうかという話をした時に、それほど盛り上がるような書き方というのができなかったんですね。書いたところでその登録団体数とか累計の来館者数が何人になったとか、そういうことになってしまいます。「つなげる」とか「つながった」ということは、なかなか数値化できるようなものではないんですけれども、市民活動センターのとても大切な役割としてそれを表していくことが必要なんだと、皆様のお話を聞いて、改めて思いました。

市民活動センターでも月例の報告だと一番最初に話すのが利用者数とか来館者数なんです。来館者数だけではこの市民活動センターの価値は測れないものだと思います。そこを私たちがもうまく伝える、キーワードに「伝える」と出てきましたが、その工夫ができればいいなと思っています。打ち合わせの時に、大竹さんは当初描いていたワークショップから振り返ると「80 点ぐらい」言っていただいて、西山さんは「20 点くらい」だったんです。これから先もこのままだと、20 周年の時も「登録団体が何団体とか、利用者数がどれだけだった」とかつまらない報告になってしまいます。そうしないためのアイディアとかも意見交換させてください。もし自分が 50 点だと感じていたら「何が足りないのか」とか。資料を見ていただきながら、これからのことについて少しお話ができればなと思います。

大竹

アンケートの７番のところに「また市民活動センターに来てみたいと思いますか」という問いがあります。３年前？４年前に指定管理者コンベンション リンケージさんがやられ始めたのですが、行政が管理すると人事異動ですっかり変わるとお話ししましたが、たとえば今の指定管理者が行政の事業、センターが行う事業のうち、例えば行政の事業、お知らせ、公募、審議会、市民参加できるものについて、ここセンターにくれば全部知ることができるとういうことが必要。中間支援施設そのものの役割の一つの事例ですよ。行政の事業ぜんぶを知ることができる。そのことを行うのは指定管理者でしょうか、それともセンターを所轄する市民参加推進課でしょうか、という問題があります。こうすればいいね、では解決しないということなんですよ。どうしようかと言って一歩踏み込まないといけない。市民が見える範囲でそのことを問題じゃないかなと発言したほうがいいと思っています。年取ったからずいぶん積み重なったんですよ。ごみはいっぱいなんだけども中身には光るものがある。

新井

まだ発言してない方いらっしゃいますか？

会場参加者７

ワークショップでは始めから女性方のパワーに圧倒されておりましたよ。提言書の裏ページの左側にありますけれども、この写真は当時私の最後の時に写真にしたいなって言ったら、もっといいい顔のものがあるからと言われその後他のものに変えております。いろいろなイメージがありましたが、実際にオープンしてみると、ちょっと自分が最初イメージしていたのと違ったことがあります。ひとつはこのセンターができた最大のメリットとしては市内でこんなに活動しているグループ団体があるということが分かったということが最大のオープンした役目だったと思うのですが、それが今 400 近くになっているということはセンターを利用している人達も含めて触発されて増えていったんだと思います。そういう点での役割は凄かったなという。そういうものに参加できて私も嬉しいんですけれども、もう一つは私のイメージはちょっと違ってたかもしれませんけれども、私らが市役所の中の様子わかりませんから、こんなことしたい時にどこに相談したらいいかなっていうそういうアドバイスだとか、それから市役所の人たちにとっては都合の悪いようなことでも、そんなことはちょっとみんなの意見を聞いたりするような会議ができないかなというような、そういう役目はできないかなというイメージを持ってたんですが、やっぱり現実は甘かったですね。もう一つここが良かったのは自治会も登録団体にできるっていうことは、これは最大だと。まだ利用の仕方がもうひとつかもしれませんけれども、（ワークショップ

で）我孫子の施設を見学した時は、あそこはもう始めから（登録団体に）しないという前提だったですね。ですからその時はそういうもんかと思ってましたけれども、やっぱり自治会というのがここまで足を運ぶのは難しいかもしれませんけど、やっぱり身近なコミュニティのひとつじゃないかなと思いました。もう一つはワークショップの時に私も盛んに喋ったかもしれませんけども、公民館と違う違うって言った覚えがあるんですけれども、それだけにここのセンターを利用することは、見てもらって知ってもらってという役目もあるかなと思ってたんですね。だからその点で公民館の役割とはちょっと違うと、その辺の利用の仕方がまだまだのような気がしています。ただ私の郷里の長野県の諏訪市ですけれども、市民活動センターとは違いますけれども、いわゆる寄合場（よりあいば）にしてくれと。田舎ですからとにかく利用制限はなし。お弁当食べようが喋りに来ようが、という場所を作ったんですね。それは３年ぐらいかけて市と市民でやり取りして施設を作ったんですけれども。ですからここのキッズルーム？あんな広さじゃないんですよ。10 何メートルだーっと。ただし外からは見えるようにしてね。ですから私も最近はちょっと郷里に行けないんですけども、行った折には必ず寄って眺めているんです。だからここもそういう意味で確かに登録団体だけの場所ということでなくて本当にこの春日部で言えば駅が中心地になりますからね、ぜひ寄ってもらえるような場所を目指していけたらというのが理想だと今でも思っています。

新井

最後になりますが、一職員の立場からひとことお願いします。

春日部市市民参加推進課森田

皆さんの意見を伺っていまして、その熱い想いをしっかりと受け止めさせていただきました。皆さん活動を長年なさってきてすごく輝いていらっしゃるなと思って、本当楽しく活動を続けてらっしゃることが素晴らしいなと思って聞いてました。私たち職員の役割としては何度もお話が出ていたように、つなぎ役ですねそこのところがやっぱり重要だなぁと思ってまして、確かに人事異動で代わります。これも宿命なんですね。ただ私たちも皆さんと思いは同じだと思うんですね。やっぱり市のために何か自分に出来ることをしていきたい。役割を果たして行きたいという思いで働いてます。人事異動は悪い面もありますが良い面もありまして、やっぱりそれを経験したことで他の課に異動してもその精神をもって新しい場で活用することができるんですね。一方で今日お話しを聞いていて皆さんの機動力が羨ましいなと思いました。なかなか大きな組織ですのですぐいい考えがあったとしてもなかなかそれをすぐ実現するっていうことが難しかったりします。いろいろな制約もありましてルール上の問題もあったりしますので難しいところもあるんですけれども、できるところで私たちは皆さんの思いを触媒のようにつなげる役割というところ

をもう少し今までよりも考えながらやっていきたいと思ってますので、どうぞこれからもご協力のほどよろしくお願いします。

新井

あっという間に２時間近く経ったところなんですけれども、最初の吉田さんと三浦さんの対談の中で後半にありましたよね、自分にとってなんか苦手だなと思う人とも話してみることでまた新しい課題が見つかったりという事があったと思います。だから気心知れてる人ばっかりではなく、やっぱりそういうこともこれからはしてかなきゃいけないだろうし、午前中の（シンポジウムで）吉田徳志くんが言ってくれた、市民団体から若者へのアピールがない。本当にそうなんだなと思って、若い世代にそのことを周知していく、知らせていくってことが本当に大切だなと思いました。今日西山さんはおっしゃらなかったんですけど、よく西山さんは、このぽぽらはいろんなことを市民がやれる、やれなければいけない、ここでできないことは他では出来ないというようなことをよく常々おっしゃってたんですね。だからそれは何が何でもやりたいってことではなく、管理者とも相談をしながら、こういうことをやりたいんだけれどもそれってできるんだろうか、はなから駄目っていうことではなくて、できる方法を探っていくとか 10 目指してたものがたとえ５でも出来る方法を探っていくことが、これからの 10 年で必要なのかなっていう風に今日皆さんと話しながら感じました。

生越

プレ対談の最後でも吉田さんと三浦さんが話をしていた「10 年前のその熱量のある話し合いができた背景」をみんなで振り返ることができました。是非またその 10 年後というか、これからの 10 年に向けてそのままのこの熱量で中で突き進むには例えば年齢だとか、そういう話もあるかもしれませんが、次の世代につなげていくとか、今日は徳志君とか若い世代もいますが、そういう方々と一緒に話していく機会を作っていければいいなと改めて思いました。もちろん利用者会議という場もありますが、そこだけではその話しきれないようなこととか、市民活動センターの場以外で、春日部の地域で行われてる市民活動はたくさんあります。ぜひ皆様とそのような機会を作っていければいいなと思っています。また、こちら側からも呼びかけたりとか、西山さんのような「利用者視点」から呼びかける会みたいなものとかがあったらいいなと思っています。引き続きこのような議論を、ちょっと話しづらいことでも話し合えるような場を作れたらと思いました。まだまだ話し足りない方がいらっしゃると思います。是非、スタッフに声をかけていただいたり、利用者の皆さんで話をしていただいたりとか、そういう関係作りが 10 年前のワークショップの時から土壌ができていると思いますので、それを財産としてつなげていきたいなと考えております。

新井

大丈夫でしょうか。最後大丈夫ですか。言い残したことはありませんか。

吉田

（シンポジウムの時オンラインの）チャットのところに書いている方がいらして、センターは場の提供ですよねって。だからまさに生越さんがおっしゃった、話し合う場所とか何かをする場の提供をしていく場所だなっていうのを午前中に言い忘れたので今言います。

新井

そうですよね、場をつくらないと集まりもないですからね。はい、ありがとうございました。

ではこれでトークセッション１「市民活動センター10 年の軌跡とこれから」を終わります。ぜひの皆さん先ほどの A3 に自分の活動はどうだったか振り返ってお家で書いていただけたらなと思います。明日また二日目ということで、午前中は徳志君がファシリテーターをする「Z 世代の若者に聞きたい市民活動のリアルな未来」。なんかタイトルがすごい惹かれるんですよ。でも私そこだけ参加できなくて後の配信楽しみにしています。午後はトークセッション３ということで「活動の世代交代」。こちらは講師をお招きしてお話を聞き、その後参加されている団体との交流会ということを予定しております。是非またそちらへのご参加もお待ちしておりますのでよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

ぽぽらの会
市民活動センター開館記念
ぽぽら フェス ティバル 2021

2021年12月5日（日）
10:00～12:00

トークセッション2

「Z世代の若者に聞きたい！市民活動のリアルな未来」

「最近の若い人たちの考えていることはよく分からない。。」なんて会話をしたことはありませんか？いやいやそこで諦めてはいけません。どの時代にもある世代間ギャップ。セッション3の「世代交代」の話にも関連してきますが、若い世代が地域のこと、社会のこと、市民活動のことをどう見ているのか？現役の学生さんが本音でで話し合う「しゃべり場」から世代間のズレや価値観を学び受け入れ、その上で交流を図っていきます。学生と一緒に世代を超えて持続可能な市民活動のヒントを探り、地域を良くするアイデアを考えるセッションです。

○ゲスト学生（10名程度）
- 松実高等学園の生徒
- 共栄大学の生徒
- 近隣の高校・大学等に通う学生　等

○ファシリテーター
吉田徳志（フェス実行委員　まちづくり応援団）
市川潤（アドバイザー）

主な内容

1.【会場A】しゃべり場
- ゲスト学生による座談会
- トークテーマ
  「私たちと地域との接点」
  「市民活動って何？」等

【会場B】会場Aのオンライン中継

2. ゲスト学生、参加者を交えての座談、ワールドカフェ形式
3. これからにむけての提案

■会場　市民活動センター会議室1・2
■オンライン（Zoom）参加可能
■申し込みは048-731-3550か
popola@kasukabehall.jp
または申し込みフォームへ

トークセッション2「Z 世代の若者に聞きたい！市民活動のリアルな未来」

12/5（日）10:00~12:00

〇ファシリテーター

吉田徳志（フェスティバル実行委員）

市川潤（アドバイザー）

〇学生ゲスト（五十音順）

石川希さん　大島理史さん　後藤龍冴さん　小林由奈さん　竹田優菜さん　野田歩伸さん
藤井成美さん（オンライン参加）

第１部 しゃべり場（センター受付前）ゲスト学生による座談会

市川

本日はお越しいただきありがとうございます。それでは早速ですがはじめたいと思います。ぽぽらフェスティバル２日目トークセッション２「Z 世代の若者に聞きたい！市民活動のリアルな未来」ということで前半１時間については別室で若者が話すのをここ（会議室１）で聞いていただきます。後半は若者に入っていただいて世代間のギャップを楽しんでいただけたらと思います。世代間ギャップというのはどこにでもあるものですが、トークセッション３の後継者問題にもつながっていくので、地域活動と市民活動の高齢化は切っても切り離せない問題ですが、まずは世代間のギャップを楽しんでいただいてそういう問題についても考えていきたいと思います。

それでは前半を始めたいと思います。別室で実行委員の吉田徳志くんが待機しています。宜しくお願いいたします。

吉田

よろしくお願いします。会場をミュートにしたので、向こうのシルバー世代の声は聞こえないので安心してカジュアルな感じでやりましょう。「Z 世代に聞きたい市民活動のリアルな未来」

ということで、まずＺ世代の説明からしたいと思います。Ｚ 世代っていうのは日本でいう団塊の世代というもののアメリカバージョン。我々20 代前後の世代を指す言葉になってます。というのがあれば向こうでも後で話してくれるかなと思うので。とりあえず前半でこのＺ世代の若者として自分たちのしている活動とか興味があることとかを話して、そこからちょっと話を広げていきたいなと思います。

名前だけお願いします。じゃあまず自分から。ぽぽらフェスティバル実行委員の吉田徳志です。宜しくお願いいたします。

ではまず、いましている活動とか興味のあることをお願いします。

野田

春日部では春日部市国際交流委員会という、春日部市民と外国人の人が国際化に関わる活動をしています。最近やっているのはコロナ禍でもあるので、外国文化を皆に知ってもらおうというオンラインのイベントをやっています。

竹田

私はいま共栄大学教育学部に所属しておりまして、放課後子ども教室というものを春日部市でやっています。その放課後子ども教室ですけれども、子供たちが学校以外のところで、学校内なんですけど、学校内の学校のカリキュラム以外のもので地域の人と交流したりとかできる場なんですけど、そこで子どもたちと交流することによって今後自分たちが先生になっていくための活動の一環でもあって、子供たちを楽しませるっていうことの練習の場にもなるので、自分が思い描く将来子供達とどう接していくかっていうものを考える良い機会となっています。

石川

僕は二つやってることがありまして、一つは小学校での学生ボランティアともう一つは僕が通っていたチームなんだけど、中学生にサッカーを教えるっていう活動していて、その二つに共通して言えるのがそれぞれ子供たちが対象なので、その子供たちがどういう風に楽しく活動できるかとか、逆にこういうのはちょっと難しいのかなとか、そういうのを学びながら日々活動しています。

後藤

自分は高校卒業後はフリーターなんですけども、高校時代とか中学時代もそうなんですけど、自分の当時の不登校だったりとか、そういうのを通じて結構今の時代不登校の学生さんだとか悩みだったりそれこそ大人でもうつ病だとかすごい取り上げられる時代になってきているので、自

分の経験だとかそういう自分の気持ちを通じてですね、今後メンタルケアの部分だったりだとか、人間心理とかそういうのは個人でも学んで今後の社会に活かせていけたらなというのが僕の将来の…将来のと言うか今でも思い描いてる部分であります。

大島

私は高校を卒業して、東武鉄道株式会社というところに入社して、駅係員という仕事をしてたんですけども、とあるきっかけがあってその会社を辞めて、今は母校の松実高等学園という通信制の学校でボランティアスタッフとして働いています。そこでは不登校になった子供達とか色々な問題を抱えて学校に行けなくなった子たちがやり直す場であって、それらの生徒を卒業生という立場でフォロアーシップをしていけたらなと思って今頑張ってやっている最中でございます。

小林

私はまだあまり行動の幅が広くないので、特に特別なボランティアとかはあまりやれてないんですけれども、あげるとすれば小学校の学生ボランティアでフェスタなどの手伝いをしたりしてます。

吉田

ファシリテーターで参加しているので自分がやってる活動っていうのは市民活動団体を少し手伝ってあげる、まちづくり応援団というもののコンセプトというか、ここでやってるので見てもらえればわかるんだけど、自分は IT とかその中で Zoom とかっていうのを市民活動に入れたいけど分からない人が結構いるので、その手伝い、IT コニュニケーターみたいなものをちょっとやっています。

ここからはひとりずつ聞いてくので、皆さんも質問とかがあれば全然言ってもいいです。あ、藤井さんを忘れていました。

藤井

皆さんの話を興味深く聞いていました。私はボランティアみたいなことはやっていないんですけれども、大学で、地域で持続的な活動をする、みたいなことを学ぶ、そのサポートをできる人になるっていうことを学んでいて、卒業研究にあたって私が興味を持っている、小学生の時に朝、旗を持って安全を見守りしてくれてたおじいちゃんとか、旗振りボランティアさんに興味を持っていて、調べている途中というか、活動してる人にヒアリングをしたり、イメージ改善というかこれからボランティアさんが増えてほしいなっていう思いから、いま活動してる途中です。

吉田

一旦皆さんの話をまとめると、自分一人のことじゃないですよね。例えば野田さんだったら地域で外国の文化とか、共栄の二人だったら子どもっていうのとか、松実の二人だったら不登校になった子のサポートとか、小林さんは小学校のイベントとか。フェスタはイベントだから。結局子どもなんですが。藤井さんも子どもかな。朝の旗振りボランティア、小学校のやつですよね。自分ひとりではなくて、地域の他の人に向けたものだと思うのですが、自分がやっている活動とか、やりたいことが何のためになるのか、誰に向けたものなのか、もう少し詳しく聞いてみたいというのと、それが何につながるのか。一応市民活動センターだから地域の何につながるのかというのをちょっと聞いてきたいと思います。じゃあ小林さんから。

小林

・・・

吉田

何のためになるのか、誰のためにやるのかな、何に向けたものなのかな…先に自分が話すのでその間ちょっと考えてください。

自分の活動はITと市民活動団体を繋げる事なので、今までこの会議室を使ってじゃないと出来なかった事とか集まらないとできなかったことをITとかインターネットっていうのを少しお手伝いする事でみんな家にいてもできるとか、いつでもできるとか、夜遅くたって別にいいんだしとか。コロナ禍で結構あったのが、とりあえず飲み会やりたい。みんな飲めるからとりあえず飲み会をやろう、まずは飲み会、みたいなのがあると場も和むので、というのでインターネットと地域をつなげる、人をつなげていく。Z世代はインターネットにすごく触れているからさっきも話した中でもインターネットに関わるものが出てくるけど、シニアの世代はなかなかそうならない。使える人で、LINEでいけますというくらい。だからもう少し一歩踏み出してIT怖くないよ、結構毛嫌いしているけれど、それを溶かしていくと、より活性化していくのではないかなと考えています。

と言うことで、考える時間はつくれましたかね。

小林

小学校のフェスタのボランティアっていうのは、フェスタ自体が地域交流、いろんな世代の方が集まって行われるので、地域活性化するものだと思っていて、それの手伝いというか、そういう場を設けて活性化の手伝いができるので積極的に参加をしています。

吉田

巻き込んだりとかっていう話。

小林

学校の友達とかに、こういう（ボランティア）があるのだけれどやってみない？と軽い感じで、普段自分から行かないようなところに踏み込んで皆で楽しく盛り上がれるように。

大島

私が今やっているボランティア活動は、不登校になってしまった子どもたちへのフォロアーシップなので、対象は不登校になった子どもたちですね。最近のニュースで見たんですけども、中学校の不登校率っていうのが過去最多です、みたいな年々上がってきていて、やっぱりその学校に行けなくなっちゃう子どもたちっていうのは、その地域の活動にもなかなか参加できないような子が多かったりするので、そういう子のフォロワーシップができたらなと思って今やってます。ちょっと補足なんですけども、松実高等学園の中でボランティア活動っていうのをやってたりして、例えばイベント設営のボランティアだとか、小学校の教室のボランティアだったりとかをやってたりして、僕も学生時代にやってたんですけども、それをやってる時は町のイベントの

活性化に貢献しているとか、小学生のフォローしているという実感のもと行っておりました。今度は私たちが後輩などにそれを広めていって、後輩なども巻き込んでこれから行っていけたらなと思っております。

後藤

今紹介ありました松実高等学園の僕も出身で、隣の大島君と同じ世代なんですけども、松実っていうのがやっぱり高校ではあるんですけど、初等部中等部高等部っていう小学校中学校高校っていうのがあるんですけど、僕は高校の方から通わせて頂いてまして、自分自身もやっぱり小学校６年生ぐらいから不登校というのを経験して、それこそ中学校なんかは全然通ってない日々が続いてたとか。一言で表すなら悩んでしまってた、ひとり孤独で、っていうのなんですけど、当時僕が小学生くらいの時はまだ不登校っていうワードがあまり社会的に浸透してなくって、そうですね今でこそ不登校当たり前って言い方おかしいですけど、すごい社会的に認知されてしまったワードなので、うつ病とか不登校とかっていう人は何人に一人だとか、結構かなり多い。社会的に見てもだいぶ社会問題とされている部分ではありますので、今後何でこう人間のメカニズム的にどうしてそういう風になってしまうのかとか、どうしたらそれを克服できるのかとか、当の本人が克服したいのかっていう部分に視点をおいて自分の経験も活かしてサポートができればなあと。そうですね松実にいた時にボランティアっていうものも参加させていただいたんですけども、ボランティアっていうものは単純に社会貢献という部分だけではなくて、自分自身がその活動に参加することで楽しいだとか、自分の存在を、自分のやっていることを認識して実感できるっていう部分がすごい大事な部分になってきてましたので、今後ボランティアっていうのは人のためで、人のためだけではなく、自分に主体を置きつつ活動に参加することで自分の将来の仕事に関わることですけども今後取り組んでいきたいことだとかを明確化していく意味ではすごい素敵な素晴らしいツールになっていくと思っております。

石川

僕は小学校で活動したり、中学生にサッカーを教えたりしてるんですけど、特に小学校で教えるときにコロナ禍で子どもたち特に小学校１年生なんかはマスクをしないで学校で生活するのを体験してないんですね、まだ。僕たちはマスクをしないで楽しく生活してたんですけど。そうなるとやっぱりどうしてもそのマスクの下の表情が暗かったりとか、全員が全て明るいわけではないので、そういった子たちをこのコロナで、暗いニュースが続く中でどうすれば子どもたちが楽しく何も考えずに楽しく遊んだりとか、悩みを吹き飛ばせるかっていうのを考えた時に、やっぱりそのボランティアで自分たちが主体となって、少しでも子どもが楽しめる時間を作ってあげられるといいのかなと思って、そういったボランティア活動をしてます。それが結果的に、僕は小

学校教員を志望しているので、その夢に向かっても自分のためにもなって、まずは子どもたちの為にそういった活動をしつつ、自分の将来のためにも繋がっているのがボランティア活動ではないかと思っています。

竹田

私は先ほど挙げたように、小学校をメインで今やってるんですけど、やっぱり小学校ってどうしても地域との連携が絶対に必要で、自治体に所属している人が関わるっていう機会がすごく多いコミュニケーションの場なので、その自治体の人と私自身がまず関わるっていう経験をしておかないと、将来先生になった時に、どう自治体の人とわかりあって子どもたちを良くしていくのかっていうことができないなというふうに考えています。私自身が今経験するということの一種としてこの市民活動センターでお話しさせていただく場があったりとか、この前のこどもライブフェスタがあったりとかすると、こうやって地域の方々が学校以外の場所で子どもたちを支えてくれてるから子どもたちは学校でも楽しく過ごすことができるんだなって実感することができるのかもしれないなというふうに今思っていて、やっぱり第一優先は子どもたちで、なぜ第一優先じゃなきゃいけないのかって言うとそれは結局未来を作っていくのは子どもたちであって、私たちは教えていく立場でいなきゃいけないって考えると、子どもたちが第一優先ということも辻褄が合うのかなと思います。でも子どもたちのだけのためにやってるんじゃなくて、後藤さんと石

川さんもおっしゃってたように、自分たちが子どもたちにうまく教えていくとか、色々影響を与えていくためにも、自分たちのためにボランティア活動をするべきだと思っています。

野田

私は、誰のためとかってなると、とりあえず春日部のこのコミュニティかなって思うんですけど、人って今までの色んな経験とか、固定概念とか先入観とかで自分のまわりに結構壁をつくっていると思うんですね。そういうものを一回壊して、多様性を受け入れられるようなもの、コミュニティができたらいいなと思って、その一つとして国際交流とか、自分とは違う背景、文化を持つ人たちを知ってみて、そういうのもいいんだなっていうのをみんなに実感してもらえたらいいのかなって思ってます。

藤井

私がこの研究に取り組もうとしたきっかけが、弟が今小学生なんですよね。とても離れてるんですけど。その弟が朝ボランティアさん、立ってもらってる人が、私が小学校だった時の旗振りをしていたおじいちゃんで、この人まだやってるんだって思ってびっくりした反面、補聴器とかをつけているもう 80 代ぐらいの方で、身体面もこれから不安になるだろうし、元々私の地区も、私が通ってた時よりも人がちょっと減少してるっていうことを聞いて、これからまだまだ少子高齢化というか少子化が進んでいくけれども、子どもを見守るという面では、犯罪とかも増えてるということは分かったので、これからの世代が安全に暮らしていくためにだったり、主婦の方が今後地域デビューをするというか、旗振りとかに興味を持ってもらえる何かきっかけになってくれたらなっていう思いで今研究を進めているところです。

吉田

さっき後藤さんから、自分も楽しくないとっていうのが出ていたんですね。実はこれ昨日の事なんですけど、シンポジウムがありました。自治会長さんも同じことを言ってました。自治会長さん曰く、ずっと長くやってらっしゃる方なので、長く続けるからには好きだからでしょうと言われるけれど、好きじゃないとやってられない、長く続けられないっていうのがあって、結局学校とか、サークルとかの事でも、市民活動っていうのにボランティアというのからつながってるんじゃないかなっていうのが同じで、藤井さんのさっきおっしゃってたのも、結局旗振りだってきつかったらやってないでしょ。楽しくないと続かないのかなというのがあるんですけれども、特にこの松実と共栄ですね。今活動してるこの二つの団体というか学校とかにちょっと聞きたいのですが、ボランティアってどこから、ツテというかキッカケをもっきてるのかなって聞いてみたくて。

竹田

共栄大学は、子ども教室というものを、春日部市でやっている子ども教室に依頼をされて行うということが基本的にはなっていて、その間に必ず教育委員会の青年社会教育課の方が介入していて、そこから依頼が来るようになっています。ここで直接やりとりを行ってはいけないよというのが今年からちょうど始まったんですけど、なんで教育委員会が介入してなきゃいけないかっていうところを考えた時に、その地域全体を見てやっぱりこことここだけじゃダメ、春日部市っていうものを通さなきゃいけないのかなっていうのを私はすごく感じているので、そのどこかとどこかだけのやり取りじゃなくて地域全体としての中の一部のものとしてやっていかなきゃいけないと感じています。またこういうところに呼んでいただいたのは、そういう子ども教室で関わった方からのお声かけであったりとか、先ほども知り合った方からお手紙をいただいたりとか、そういう人と人とのつながりでだんだん幅が広がっていくんじゃないかなというふうに思ってます 。

石川

子どもサークルには参加させてもらっているんですけど、自分の活動はそのサークルからいただいた依頼ではなくて、自分自身で例えば自分が行っているのは母校の学生ボランティアとして参加していたりとか、サッカーの方も自分が通っていたチームの指導していたりとかをしているんですけど、そういう風にサークルのひとつの活動として参加している者もいれば、自分のように自己開拓というか、自分からいろんなところに行っていろんな話を聞いて、ボランティア活動をするというパターンもあるので、その引き出しはたくさんあるのかなと思います。

後藤

松実関係なしになってしまうんですけど、いちど松実以外で地域活動というかボランティアに偶然触れ合う機会がありまして、というのも先ほど竹田さんがおっしゃられていたのですが、地域の交流とかもちろんなんですけど、僕は趣味で鉄道が好きでたまに街中の公園だとかに電車が保存されてたりするんですね。例えば年に数回ボランティアの方々が一般向けに開放してくださるっていうイベントがあるんですけど。一度それの栃木県の宇都宮市の方で参加させて頂いたことがあって、一般のお客として行ったんですけど、その際に細かい部分を眺めていましたら、そちらの保存会の市の方々お話をお伺いさせてもらいまして、そういうボランティアとして活動されてるらしいんですけど、ボランティアの会員の方は十数名いらっしゃるんですけど、かなりの高齢化が進んでしまってまして、数年ほど前に撮られた集合写真を見せていただいたんですけど、20 数名は写っているであろうおじい様方なんですけど、その年いったら 10 人ぐらいしかいないよ、あれ皆さん予定が合わなかったんですかねえって聞いたらうつむくんですね。理由は

察してくれと。やっぱり文化遺産として電車だったりを残されているんですけど、結局そういったものに文化をつないでいくという後世に残すっていう意味で、やっぱり残していくには対人間として人が残していかないと残ってはいかないので、その時にやっぱり若い年代、僕らの世代だとかが興味関心を持ってその原動力として、例えばそういうイベントがある、一般公開のイベントがある、参加してみようってなったら来てくださるんです。来てくださった方々へ、じゃあ来てくれるから何かを託そうというのをボランティア側としては、今スタッフとして後世に残したい。どうしたらよいかと、その時に興味を示してくれてるからこそ残してもらう、託す、それこそ継承していくっていう動作が、例えばボランティアでもイベント、イベントこれも文化だと思うので、文化を相続していく若い人を育てていく、先ほど野田さんが凄い良いことをおっしゃっていたなと思ったんですけど、やっぱり世代によって固定観念だとか自分の持ってる芯みたいなものが頑固に、そして時には人を傷つけたりとか新しく進展していかなくなってしまうんですね。それをうまくなくしていこうとまではいわないんですけど、うまく寛容にいくように人にいかにアウトプットしていくか、受け入れてもらうか、そして受け入れられるか、そういうのに重きをおいて、ボランティア活動そのものになってきますけど、今後来年５年後 10 年後残していくには新しい世代に形を変えてでも繋いでいくっていうのがすごい大事になっていくと思います。

大島

松実高等学園という学園は、さっき石川さんがおっしゃったように基本的に何かを通してとかではなくて、自分たちからボランティア募集している方にコンタクトを取っていくっていう形なんですけど、そのコンタクトを取る役目は先生であって、先生がそのボランティア協会とかボランティアを募集している方にコンタクトを取って、それが生徒に降りてきて生徒がそれに参加するっていう形になってます。私個人的にもうそういうタイプで何かを通してとかではなくて、自分から松実高等学園に行って松実でボランティアさせていただけませんか？とか、あとは東京でグリーンバードっていうお掃除ボランティアがあるんですけども、一度それに参加したことがあって、それもやっぱり自分から、そういうボランティアがあるんだ、じゃあ参加してみようといって自分でどんどんどんどん開拓していくっていう形になっております。

吉田

藤井さんへ聞きたいんですけど、旗振りボランティアってどうやってなるんですか？保護者の方々が地域デビューとおっしゃっていましたけど、どうやって旗振りデビューするのかなっていうのが気になっています。

藤井

やり方としては、自治会とかで回覧板は私の地区でも回してるって事から、回覧板で募集をかけているので、自治会役員さんとかに声をかけるとそこから市役所に行くかな、市役所の方が支援としてキャップとかジャンパーとか（旗の）棒とかを支援してるっておっしゃっていたので、自治会の人がその後市役所に行って、市役所からそのジャンバーとか受け取って、旗振りボランティアをしてる方が参加したい人に贈呈するという流れだと思います。私の地区の役員さんが旗振りボランティアされてるから、自治会役員さんがっていう動きになってるんですけど、自治会役員さんじゃない方が旗振りボランティアされてる場合も多分同じく市役所に行ってジャンパーとかもらってっていう流れになってくると思います。

吉田

ありがとうございます。皆さんボランティアとか、野田さんだったら何かつくりたいとか、何かしら問題意識とか課題があるからこそ、例えばボランティアであったりとか、団体を作りたいとかっていうのがあると思うんですね。多分。例えば後藤君が文化を残していきたい、残す人がいないという課題。石川君の話だと、子どものマスクの下が暗くなっている課題だとかいうのがある。そういうのって自分たちで見つけて行ったりする事ってあるのかなってちょっと気になって、ある人いますか？例えば地域の中でボランティアをやってる中で気づいたものでもいいし、自分が普通にこの街中で生活しててなんかこれって直した方がいいんじゃないかなみたいな課題みたいなものは見つけたりする事ってあるかな？指さないのである人でいいんですけど。

地域の中でも、自分の周りでもいいし、自分一人じゃなくて周りが関わっているもの、他の人が社会的な、課題的なものを見つける事ってあるのかな。

後藤

先ほどお話しさせて頂いたその宇都宮市の電車を保存しているっていう保存会についても、ハードルが高いでしょって思ってしまうんですね。というのも、その電車を保存するにあたって保存会っていうものがあるんですけども、大本は宇都宮市の持ち物ですので、保存会の活動をするにあたっても市役所の届け出だったりとか、役所への許可が必要になってしまって、電車を残す、人に見てもらうから綺麗にしよう、掃除、清掃会をしようってなっても勝手にはできない。機材を借りるにしても機材の出元はどうしよう、人が集まらないどうしよう、とか。興味があっても原動力と行動力がないとままならないのと、一人だと行動力があってもサポートする人がいないと成り立たない。全体的に見ても取り組みにあたってハードルが高いなっていう印象を抱きますので、取り組んだことが一度もない方にとってはとっつきづらいというか、自分なんかじゃできないんじゃないかなっていう先入観が出てきてしまうんじゃないかなと思うんですね。

竹田

いまお話聞いてて思ったのが、やっぱりボランティア活動してるのがすごく高齢の方が多くて、それを継承できないっていうその継承が、シニアの方から 20 代ぐらい、それ以下、（そのあいだの）世代は何をやっているんだって考えた時に、働いてるじゃないですか。働いてるとなるとボランティア活動って平日働いて土日ボランティア活動してってやってる方ももちろんいると思うんですけど、そのボランティアをするっていう時間がないことも継承ができない一因なのかなって思っていて、だからこそ若者に回ってくるけど、若者がやりたいという気持ちを持ってこの時期は今忙しくないというか学生として学ぶっていう姿勢があるからできるけど、結局これが私が何年後かに先生になっちゃったらもう先生の忙しさにまみれてボランティア活動出来ないとか、そういうところにそのボランティア活動できるできないっていう課題がそもそもあるんじゃないかなって思いました

藤井

忙しさに私も近いなと思って。でも私のこの活動も朝 7 時半から 8 時とか 1 時半から 3 時 40 分とかっていうめちゃめちゃもう社会人は働いてるよねっていう時間だったので、そこのミスマッチというか、それをやるとなると定年退職された方になってしまってどうしても高齢化になってしまうので、そこの忙しさっていう面はすごいわかるなって今聴きながら思ってました。

吉田

ハードルが高いって昨日も話が出てまして、もしかしたら聞いてた？と思うくらいです。昨日の市長の言葉のなかでハードルが高いってイメージがあるというのを聞いていて、僕は小学校の時から、最初手伝いとして、ここにできた当初ぐらいから来てたので、ハードルって何？それ美味しいの？くらいで、ハードルが高いっていうのを感じてる人がやっぱり多いんだということはうすうす気づいていて。今皆さんの話聞いていると放課後子ども教室はメインでやっているのは市民活動をしている人たち。地域の人たちが市民活動として、市民活動団体が入っていたりすることが全然あるので、放課後子ども教室ってちゃんと市民活動。さっきの電車の保存というのも市民たちが自分たちで動いているから、これも市民活動。サッカーを教えるのだって生涯学習的要素も少し入ってくると思うけれど地域のところでやるっていうのも少し見方を変えたりとか少し工夫をすれば全然市民活動というのになっていく。体を動かすってあるとおもうし、野田さんが団体を作りたいのを知ってるので、特にさっきのサポートしてくれる人っていうのは欲しいのではないかなと。なかなかいないから、若者の感覚がある程度わかってサポートもできるような立場にいる人ってやっぱり少ない。市民活動やっている人で 40、50 代の我々の親世代が一番少ない。さっき出ていた「少ない」っていうのはやっぱりそうで、若者たちが市民活動に入ってい

く、地域に入っていくときに真ん中の空いている世代って必要なのかなと思っていて、例えば学校でとか、自分でとか、フェスタとか小学校を通してとか、あと旗振りを通してのとかで、どこかしらで地域とつながっているところから入っていくことはできないのかなと思っていて、例えば自分でそのボランティアを自己開拓していくとか自分で問題意識を持ってこういう集まりとか居場所を作りたいんだというのってどうやったら若者の世代、Z 世代からそういった意欲というか、こういうのをやりたいんだっていうのが出てくるのかなっていうのちょっと僕も分からないから、小さい時からここ（センター）にいるから全然すんなり受け入れるし、手伝ってと言われればハイハイという感じでするんだけど、なかなかそうはいかない。僕が入っているまちづくり応援団は、中学に入って僕の一番の仕事は平均年齢を下げること、20 歳さがりました。

どうやったらその若い世代、特に小中学生っていうのは多分活動とかで触れるから、もしかしたらそこから機会があるかも。昨日も小中学生にアプローチをして 3 人ぐらい来てくれたんだって方もいらっしゃったんですけど、高校生大学生以上がどうやったらその市民活動に入っていけるのかなっていうアイディア 的なものを聞いてみたくって。思い浮かぶものありますか？なんかキッカケありますか？

野田

私も最近すごいそれを思っていて、やっぱりアンテナを張ってる人がいろんな活動についていて、その人達が作ってくって感じだと思うんですけど。普通に生活してる人がどうやって興味を持つのかっていうと、自分の中でちょっとやってみたいとかちょっと気になるなっていう感情を生むというのが必要なのかなって思うので、結構小学校とか中学校とか学校ってもうこれに従うっていうものがあると思うんで、そこにちょっと好奇心とか興味とかを子どもたちがひとりひとり考えられる新しい場所ではないけど、その興味関心を育てられるものがあったらいいのかなと思います。

吉田

授業の中だからとか、言われたからではなくて、自分からってこと？

野田

自分からとか。でも、学校とかの活動を通して。

吉田

それをきっかけに自分で進めていって。僕もそれがいいと思ったりするんですけど。

実はここ（センター）がきっかけです。今はないですけど、スペースに机とか置いてあって、

コロナ前は僕も１年間使わせてもらったんですけど、勉強していたりするんですね。昨日（のシンポジウムで）だいぶいろんな人から、私たちに刺さったと言われたんですけど、なんで市民活動（団体）の人が（学生に）声を掛けないの？と皆さんに言いました。　実際ここで勉強していて声をかけられたらどう思います？ こういうのやってるんだけど、やってみない？とか。きっかけ作りになりうるのかどうか聞いてみたくて。ここで学校の勉強している時に、ちょっといい？今度こんなイベントあるんだけどどう？って言われたらどう思う？

大島

基本的には参加したいと思いますけど。

後藤

誰でも、この場でもなんですけど、一人だと怖がってしまうんですかね。例えば今日も本当は松実の引率の先生の方が来られるって話を聞いてたのですが、ちょっと所用で来れなくなってしまったというのを当日聞くんですね。やっぱり正直不安な面がありますし、二人だけだし、他に知ってる人いないよなとかあるんでよ。あとボランティアやるにあたって僕も大島君もなんですけど高校在学してる時はみんなで行こうよ、が主体だったんです。先生方がボランティア、市民活動があるから一緒に行こう、一人ではない、仲の良い友達を誘って巻き込んでいけるから行くってなるんですけど、例えば僕一人で個別で行かない？って言われたら同じイベント内容でも断ってたと思うんですよ。結構人数を巻き込んでいくっていう意味だと野田さんがおっしゃられてたアンテナ張ってるとかもすごくいいなと思うんですよ。僕だったら一人で市民活動に参加する事って機会がないと思うので、もう中学校高校の時から参加するきっかけというか学校側からこういうボランティアあるよ、みんなで仲良い友達募って行きましょうっていう声掛けとかを学校側からもう提示してしまった方が、今後高校出て社会人になった時もこういうことあったな、ちょっとやってみようかな、もしかしてまた人が来るかもな、みたいなことで集まってくれるんじゃないかなと僕は思うんですよ。

吉田

学校とかでやると、お手伝い感覚でそのまま終わってしまうとか、主体性が持てないというのがあると思うんですね。ここは同年代だから心に留めておこうと思うんですけど。高校生からみて、高校大学でやっていて、自分がやる時とかに興味持てるかどうかってあると思う？

小林

集団行動が好きじゃないですか。だから１人でやってみたいことがあるから、なにがなんでもやりたいから一人でも行くぞという強い意志がないとあんまり人がいないとやりたくないなと思ってしまうことはあるし、色んな条件を出されても１人でってなると急にハードルが上がってしまう感じがするのでコミュニティが必要なのかなと思いました。

吉田

若い世代の居場所みたいなものが、その地域内にあった方が、そこでつながっていれば、じゃあこれ行かない？みたいなのが１個できたりするからって感じ。それこそサークルなんていうのは何十人もいるからそれがもっと広がれば。例えば教育委員会が入るというのが良く分からない。（近所の）八木崎小学校はがっつり色んな団体と密にやっていたりするから、ここだけでも別にいいんじゃないかと僕は思ったりする。僕は学区内だからね。なんかその（行政を）通さなくてはいけないというのは、それはそれで不便だなと思ったりする。いっそここにサークル活動ではなく登録して、市民活動とかやっても面白いのかなと。それこそ学校だけではなくてインカレじゃないけど色んな別の地域の若い人が入って来られるような居場所をここは創りたいんですよね。

もうそろそろ時間なんで、まとめとしてはなかなか若者が参加して市民活動とか地域に入れない若者はまとめて引き込んだりとか、まとめて誘ったら入りやすいんじゃないかな。そういう入りやすい環境づくりが重要というところですね。全然向こう（会議室１）にいる人たちは怖い人たちじゃないから。僕としてはそんなに緊張したりしなくていいんじゃないかなと思うんだけど、確かに知らない世界だからね。まとめてみんなでやって、そこから自分たちで意識とかっていうのを伸ばしていったら、より若者が地域に入っていけるんじゃないかなっていう感じでどうでしょうか。そろそろ時間なんですけど市川さん。

市川（会議室１）

では時間になりましたので、学生の皆さんこっちに来て頂いて。会場の皆さんは席をご案内します。お疲れさまでした。

第2部 ゲスト学生・参加者による座談会（会議室 I）

A 班～E 班に分かれて座談（約 I 時間）

吉田

では時間がきましたので、まとめに移りたいと思います。各班でこんな話をしたというのをお話しいただけますか。

A 班

市民活動に関連した話からすると、情報発信でシニア世代の方は難しい部分がある。今までみたいにチラシを作ったりとか、実施する事業の内容がどういうものが時代に合っているかを考えるときに、若い人たちの意見が欲しいという話がありました。そうした中で今の情報発信の主流は SNS であると。LINE、ツイッター、フェイスブックというところでつながりを持ち、繋がったところから発信をして、発信先からまた情報を伝えてもらう、お友達や仲間内で情報を共有してもらうという方法が活動を知ってもらうにはいちばんいいという話がありました。この班だと 3 世代くらいに分かれるので、自分みたいな厄年世代が間に入ってうまくサポートしてもらえると嬉しいというような話をしました。

B 班

いま若い世代でいろいろな情報手段が多い中で、目的に直結して視線がすごく狭くなっている、ゴールに向かってまっすぐ進みすぎてしまう傾向があるという話が出ました。地域にどうかかわってくかという点では、まずかかわる機会が少ないので活動を徐々に知ってもらう機会を作ることが必要という話が出てきました。

C 班

今回お話をしていて一番の気づきが、私たち若者は市民活動が活発になっていないと思っていて、それをどうやって活発にしていくかということを考えていたのですが、今回お話を聞いて、いまの世代は社会問題が可視化されて、環境問題とか貧困問題とか LGBTQ とかが見えるようになっていて、そこに対して自分が何か行動することができるようになっていて若者の中でも市民活動は意外と活発になってきているんだなっていう発見があって私は嬉しかったです。

D 班

結論から先に言うと、見てないからわからないというのがいちばんの問題なんじゃないかなということです。なんでそうなったかというと、社会環境の違いからも分かるように、いまは核家

族世帯の方が多くて、親が参加していないと子どもは見ないから、子どももやっていることを知らない。そうすると若者としても社会活動、市民活動ってあるんだということに嬉しさを持つとC班でおっしゃってたけど、それをまずそもそも知らないから実感することもできなくて、実感できないと自分のためだけにでもやろうという気持ちにもなれなくてという悪循環、いいサイクルに乗り込むことができないというのが問題なんじゃないかという話にまとまりました。

E班

市民活動という言葉自体に幅があるという話から始まって、今回のぽぽらフェスティバルシンポジウム＆トークセッションという言葉自体を日常生活で使わないだろうっていう話になりました。シンポジウムとかトークセッションという言葉を使われても伝わらない。世代が変わってしまうとそうは見ないというような話から市民活動という言葉もどういう言葉にしたらいいのかという話にもなったんですが、実際市民活動という言葉を聞いた時に、定義が分からないから怖い。怖いから近づかないというような形であれば、居場所としてこのセンターがあって、世代も性別も関係ないみんながいつでもどこでも話ができる、わざわざ市民活動について話しましょうとか、このテーマで話しましょうとか言わなくても話し合いができる居場所がたくさんできるようになる、というところからじゃないと伝わらないし、始まらないんじゃないかというようなことになりました。多様性と言いながらも、多様性について語りましょうと言ったらそれは多様性じゃないだろうと、まったくその通りだと思ったので、市民活動という言葉の定義は広すぎてよくわからないけれども私たちが言えることは、居場所であり、そういったことが話し合える場所で、今日のこのグループも居場所だよねっていうところで終わりました。

オンライン参加者グループ

学生時代のボランティアを、それぞれ年齢が違うので公害のボランティアを昔やったよとか、いまは人権意識を持ってるよねとか、地元愛、春日部を愛してますかとか、大人になった今興味を持ち始めているとか、ぽぽらのイメージは？とか、暗い雰囲気を逆手にとってやったらいいんじゃないかとか、マイナスをプラスにしていくといった意見が出ました。

市川

前半若者たちだけで話していただいて、後半混ざってこういう場を設けさせていただきましたが、どちらも参加して頂いた徳志くんに最後に感想をいただければと思います。

吉田

前半の座談会を見てもらった方も、若者はこういう考えをしているんだなとか、こういうのが

若者のリアルなんだなっていうのを肌で感じてもらえたのかなと思います。若者の方も自分たちで活動をやりたいと思っている人と、学校を通じて少し活動に触れていて、もう少し自分たちでもやりたいといった方もいらっしゃって、いい刺激になったというか、若者の誘い方というところも参考になったのではないかと思います。個人的にはつながりっていう言葉が何回か皆さんから聞かれて、若者もちゃんと地域とつながっているんだということを若者も理解しなくちゃいけないし地域の大人も理解しなくちゃいけないのかなと思いました。昨日も言いましたけど、市民活動をしている方は自分たちから若者に関わっていく、若者も勉強とか仕事をやっている方も忙しいけれどできるだけ自分たちが住んでいるところの居場所として関わっていくのがこれからの10年市民活動をもっと続けて、新しい公共につなげていくのが重要なんじゃないかなと思います。

市川

みなさんお疲れ様でした。これでトークセッション２を終了させていただきます。ありがとうございました。

ぽぽら春日和
南氏10周年記念
ぽぽらフェスティバル2021

2021年12月5日（日）
14:00～16:00

トークセッション3

「団体の世代交代・後継者育成　それぞれのカタチ」

メンバーの高齢化、担い手不足…。市民活動や地域で活動している団体の多くが直面している課題です。「これをすれば大丈夫！」という解決策はありません。活動をいつまで続けるか、どうやって託していくか、様々なカタチの結論を自分たちで考えていかなければなりません。多摩ニュータウン八王子市域で自然保護・公園管理などに取り組む NPO 法人フュージョン長池の創始者で、「NPO の後継者」などの著書で知られる富永一夫さんをお招きして、世代交代・後継者育成について語っていただき、それぞれのカタチについて考えるトークセッションです。

○講師

・NPO 法人フュージョン長池　創始者　富永一夫氏

【プロフィール】

日本テトラパック（株）21 年間勤務。1999 年に退社し「NPO フュージョン長池」（八王子市）理事長に就任。八王子市立長池公園の指定管理事業などに取り組む。ジェネレーションギャップを乗り越えて次世代にバトンを渡すことを決心し、親子ほど年の離れた第 2 世代に継承して 2016 年退任。内閣府地域活性化伝道師。総務省人材力活性化研究会副座長。東京都水道局水道事業経営問題研究会委員。国土交通大学校講師。自治大学校講師。

○ゲスト

皆さま

○ファシリテーター

水野順一（フェス実行委員　健康クラブ）

生越康治（アドバイザー）

主な内容

1. 講演「団体の世代交代・後継者育成　それぞれのカタチ」
   - ・人も団体もピンピンころり
   - ・先行世代が枯れた後に植え替え
   - ・活動の圃場
     ～市民活動センターの役割～
2. 参加団体からの相談、事例紹介、質疑

■会場　市民活動センター会議室 1・2
■オンライン（Zoom）参加可能
■申し込みは 048-731-3550 か
popola@kasukabehall.jp
または申し込みフォームへ

トークセッション３「団体の世代交代・後継者育成　それぞれのカタチ」

12/5（日）14:00~16:00

〇講師　　NPO 法人フュージョン長池　創業者　富永一夫氏

〇ファシリテーター

水野順一（フェスティバル実行委員）　　生越康治（アドバイザー）

はじめに

水野

皆さんこんにちは。本日は大変お忙しい中、トークセッション３にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。私は実行委員の水野と申します。今日の司会進行を担当させて頂きますので、どうぞよろしくお願いいたします。私は定年後に地域活動を始め、現在はいきがいづくりの活動、また（センターの）運営パートナーとして、このぽぽら春日部に関わってきております。

さて、市民活動や地域で活動している団体の多くの方が、メンバーの高齢化、あるいは担い手不足といった課題を抱えていらっしゃると思います。活動をいつまで続けていくのか、どうやって託していくのかなど、様々な問題を解決していかなければなりません。本日は多摩ニュータウン八王子地域で、自然保護や公園管理などに取り組まれ、NPO 法人フュージョン長池の創始者で「NPO の後継者」などの著書で知られる、富永一夫様をお招きして、

世代交代・後継者育成といったことについて、語っていただきたいと思います。それぞれの形について、皆さんと考えたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

では、まずゲストスピーカーの富永様の紹介を、簡単にさせて頂きます。富永様は大学卒業後、日本テトラパック株式会社に 21 年間勤務。1999 年退社後 「NPO フュージョン長池」理事長に就任されました。八王子市立長池公園の指定管理事業などに取り組まれてきました。ジェネレーションギャップを乗り越えて、次世代にバトンを託すことを決心し、親子ほど年の離れた第二世代に継承して、2016 年に退任されております。現在は、内閣府地域活性化伝道師、総務省人財力活性化研究会副座長、その他に大学の講師としてご活躍中でございます。それでは富永様宜しくお願い致します。

富永一夫氏 講演

多摩ニュータウンは人口３０万人のベッドタウンとして、昔は住宅公団といったところが丘陵地帯を切り開いて新住民をいっぱい住まわせようと計画した場所です。

午前中のＺ世代というセッションが気になっていたので、若い人のご意見を伺って、講演まで何人かの方とお話をしたりしながらこの場を迎えております。

全く土地勘もない人間が来て、全く関係ない話をして帰るっていう風にはなれないタイプの人間なので、何らかの形で事前に少しでも現場の方々、そして周辺にお住まいの方々の気持ちを理解してから始めようと努力しています。

本題に入る前に事前に事務局の方と打ち合わせをしました。今我々の周りには、「自分の世代なりに頑張ってきた」「ＮＰＯ的なボランティアをやってきた」とか「ＮＰＯ法人をやってきた」っていう方々の活動が継承されないと言う。その理由を整理整頓できないのだろうかというテーマをいただいて、事前に準備をいたしました。その中で混乱させないポイントっていうのを最初にＩつお話をしてから始めたいと思います。

Ａというパターンは、ＮＰＯと言いながら、お金を殆ど期待しないで本当に美しい真心から出たボランティア活動は、その活動が続くのか続かないのかをキチンと仕分けをしようということです。

もう一つのパターンですが、私がやってきたＮＰＯフュージョン長池はＮＰＯ法人です。そして都市公園の指定管理者にもなって、年間の商い額は約Ｉ億 5000 万円になりました。だから事業承継を可能にしました。お金がなければＮＰＯ法人の経営は成り立たちませんが、別にお金がなかったらなかったなりに、ＮＰＯ法人の事業承継をボランティア活動のカテゴリーで考えないと大混乱を起こします。

お金もない若い人にしてみたらやはりお金にならなければＮＰＯ法人の経営者や、スタッフにはなれないですね。時々するのはいいですが、事業承継はできません。今日はどちらかというと、お金をあまり期待しないで、志を持って来られた方が多いと聞いていますので、そちらの話に特化したいと思います。

今日の流れですが、まず気持ち、考え方の仕分けをしていただいて、その後私どもがやってきた長池公園をどんな風景でどんな風にやっているのかという映像を見て頂いた後、私が10 年がかりで考えた一枚の設計図を説明します。私がその地域での仕事、ボランティアの活動も含めたＮＰＯ法人のポジションをどう考えてきたのかを分かるようにしてあります。

これには私のＩ０年分のアイデアと思い入れなどいろいろなものが含まれていると自負していますが、果たして皆さまのお心にかなうかどうか。終了後に皆さまからの質問を受けながら、個別の問題に私が答えていこうと思います。

私が作った設計図は、この“岩盤”部分が春日部市（行政）です。この“表土”のところが指定管理者、すなわち市民活動センターです。今の時代、行政だけではなかなか器用に住民の活動を支えることができなくなってきています。岩盤は岩盤としての役割をちゃんと果たしてほしい。

組織がしっかりしていて、誰が担当者で、人が代わってもある一定のクオリティを淡々と続けてくれるのは、我々にとって必要なことです。担当者が代わり、介護保険制度があるに

も関わらず、Ａさんの時にはすごくサービスが手厚かったが、Ｂさんに変わったとたんにサービスのレベルが低くなったでは困ります。だから良い悪いではなく、表土の活動しているNPO 法人にとって、我々の生活を守るインフラとして必要なのは、岩盤でしっかり我々を支えてくれる社会。インフラを守ってくれる人たちが絶対に必要です。ところが表土がないと、岩盤がむき出しで草花を育てようとしても、ペンペン草も生えない感じですね。

すぐに法律を持ち出して「法律に書いてありません」「前例がありません」「新しいことはやりたくない」となるとなかなか思うようにいかない。だから春日部市市民活動センターに指定管理者が必要になる。

先程映像で奇麗な公園を見てもらいましたが、我たちが最初にお預かりした時にはひどい状態でした。行政が殆ど仕事をしなかったのではないかという状態でした。草ボウボウで私の背丈以上に繁茂しているような公園でした。それを綺麗にした。私たちであれば、柔軟にＮＰＯのお友達がやってきてくれます。「月に１回位行ってあげる」「一緒に刈ってあげる」と言ってくれる人もいる。

行政だと何のために、ここでボランティアを受け入れるのか否かを議論しなければならない。私たちは議論する必要がない。労力として提供しますからと言われると、「ありがとうございます。今度休みいつですか」と日程調整だけすれば良い。何人か来てくれる。環境問題が大好きな学生さんが、フィールドワークの勉強になるからと来てくれる。柔軟に対応で

きる。

皆さんにとっても、NPO に色々と要望を出すと意見を聞いてもらえて使いやすい、いろいろな人が自由に集まってきて、使えるような場所になっている。市役所ではそうはいかないです。

自由広場みたいなものを目の前に作ったら、市民から苦情の山がやってきそう、恐ろしいことになりそうだと思うから市民がいっぱい集まってくるような場はつくりたがりません。ですが、市役所ができることがあります。市役所が苦手なことがあって、苦手な市民との接点のところに豊かな人間性を持った表土（市民活動センター）が上にのっているからこの上の部分を全て受け入れることができる。ところが、これがないと岩盤がむき出しになってしまう。

でも一方で、指定管理者というのは、単なる民間ですから行政がちゃんと契約してくれて、お金を出してくれないとこれが成り立ちません。人間的に豊かかもしれないけれど、いつもお金がないという状態になる。だから、それをしっかり後ろからスポンサーとしてバックアップする行政と民間との関係が官民連携という形であるとここの大地が豊かになる。これは農業と一緒です。地域の人が幸せになるために、まず土づくりをやり直そうということです。

今日も前段で色々な方とお話をしました。長い間、企業戦士だったのです。私も２１年間民間企業でスウェーデンの会社の日本の現地法人に勤め、日夜いっぱい働きました。会社のお金で世界３５カ国ぐらい廻りました。だから、いい思いもいっぱいしていますが、無茶苦茶働きました。突き抜けちゃったら「仕事ばっかりやっていても？」となったわけです。確かにお金にはなりますが、ある日突然家に戻ってくると、地域に何の人間関係もないことに気がつきます。

司会の水野さんもそれに気が付いて、リタイアされた後にいきなり市民活動センターに飛び込み、働くことができて、幸せな方です。が、そういう人は稀であり、ましてなかなか企業戦士だった方が地域に帰ってくると、「地域デビューの仕方が分からない」「地域への帰り方がわからない」という形になってしまう。でもここには市民活動センターがあって、そういう時には「こういう風にされたらどうですか」「どのようなことが好きですか」と聞いてくれるわけです。子育てが好きなのか、介護が好きなのか、里山の環境活動みたいなことが好きなのか、あるいは「こういう活動団体がありますが行って見られますか」と、相談にのってくれる。

突然組織人から地域に戻ってきたお父さん、地域に人間関係がなくなったお母さん達にしてみても、相談の場所があることはありがたいことです。

小学校、中学校、幼稚園、保育園に行きます。保育園は少し違いますが、幼稚園と小学

校、中学校は文部科学省管轄で固いです。なかなか大変で、例えば「私たちが子供用のイベントを用意します」「人員は用意しますから長池公園に来てイベントをやりませんか」と言っても絶対に出来ません。「自分たちのカリキュラムがあります」「年間スケジュール表があります」「この日だったらそういう活動日だから行ってあげてもいい」という感じの見方です。それはある種のワガママですが、そのワガママを受け止めると皆来てくれるようになります。

私は営業マンだから、マーケティング的発想で商品開発をするようなアプローチをします。そして、商品が売れるというのは相手が喜んでその商品を買ってくれて、お金を払ってくれるということです。

今日、これだけ沢山の方がおいでいただけたということは春日部市市民活動センターの人たちが皆さんの悩み事をよく理解して、私を呼んでくれて、いい話ができたら皆さんはこの企画に対して満足度が上がる。お金が入ってくるわけではありませんが、いっぱい人が来てくれるようになります。それは選ばれた、すなわち喜ばれたということです。ビジネスであればいっぱい売れていっぱいお金が儲かるということと同じと思ってください。

例えば、このお茶ですが、「私たちの企画と商品力はこんなにすごいのだから買いなさい。」と、いくら言っても誰も買いません。日本人はお茶が好きなのだから、そのお茶をペットボトルに詰めて売ったら喜んでくれるのではないかというように、買う側を主役にして、その想いとワガママを受け止めることに成功したら売れるようになる。

市民活動、ＮＰＯの好きな人はすごくいい事をやっておられる方々なのでどこか自信がある。だから今日はこんないい企画を作ったのだから絶対に喜んでもらえるはずだという思い込みに陥りがちになるのですが、そうするとなかなかこれが売れない。それが微妙に外れると誰も来てくれない。だから、小学校、中学校、幼稚園、保育園の人たちのペースに合わせることにしました。

８月夏休みの終わりにお祭りをやっています。多摩ニュータウン・長池地域では、いきなり３万人位の街を一気につくりあげてしまったわけですね。私が今住んでいるところも、新住民ばかりです。私が新住民のマンション管理組合の理事長をやっていた時に旧地主の方で構成されている町会に行き、「自治会に入れてください」と言ったら、「新住民は死んでも入れてやらない」と言われました。そのぐらい排他的な所へ越していったのです。

「自治会や町会に入って下さい」と絶対喜んで迎えてもらえると思っていったら「あんたらは絶対に入れてやらん」と言われました。なかなか大変なところです。

仕方なく自分達は自分達で、新住民は新住民でやろうじゃないかと思って、お祭りを始めました。最初は１００人位から始めて、一晩で５，０００人が集まる位までになりました。

やり方としては出店したい人がいると、テントのお膳立てなどシンドイ所は全部事務局側

が準備しておいてあげる。テントの中でビールを売るのか、フランクフルトソーセージを売るのかは、全部出店する人が勝手に決める。自己責任でやってくださいと。カップ一杯のビールを２００円で売っているところ、３００円のところ。結果は明快ですね。あっという間に安い値段に下がります。　２００円の方が売れるので、２００円の方が先に売り切れる。隣で見ていて、喜んでもらえればいいかという感じで、３００円を諦めて２００円にします。だいたい安い方に揃ってその日のうちに全部売れる。ただ、それは事務局が「あなたのところはやりたいかやりたくないかは別にしてビールを売ってください。フランクフルトを売ってください。こういう企画ですがこういう風に要領よくやってください。」と言うと、子供達の為になるからやりましょうとなるだけですが、自分たちが決めてやりたい中身でやって、「自主的にやってもいいですよ」と言うと、たいそう盛り上がります。

今日の話題の一番のメインは長池里山クラブになります。設立後、２０年位経ちますが、どこにでもあるように高齢化してきています。代表が辞めないですね。６０才過ぎから始めて２０年やっていますから最近は杖つきながら来るんですが、本当によく頑張っておられます。

長池里山クラブは花があって田んぼがあって野菜作りもやっている長池公園にとっても親和性が高い活動もやってくれているので、「継続して欲しい」と本人たちと話をしました。「もっと若い人がいないとだめだよね。だから若い人の人材育成をするようなプログラム開発を手伝いますから、一緒にやりましょう。」と言うと、クラブの代表も「そうだな。僕もそう思います」と言う。その後、クラブに戻ってボランティアスタッフと相談はしてくれるのですが、何回やってもリアクションがありません。

２０年も一緒にやっていると、その呼吸合わせがすごいですよ。その間真面目にやってくれているおじいちゃん達、おばあちゃん達 10 人ぐらいのスタッフがいるのですが、ほとんど挨拶しないです。朝来ますと、あの人は田んぼが好き、あの人は炭焼きが好き、あの人は畑が好きって全部わかっているんです。夕方帰る時もみんな勝手に消えますね。それをみんな分かっているんですよ。全部自動的に決まっています、ほとんど言葉はいらない。

市民センターに集まる人は人間関係づくり大好きだから、こういうところに来られるんですけど、里山活動が好きな人は必ずしも人間好きとは限らないのです。田んぼを相手にするのが好きだからやっているんです。農家の三男坊で、田んぼは兄が。自分は東京でサラリーマンになって、リタイアしてやることなくなったと思ったら歩いて行ける距離にでかい公園ができて、田んぼがある。昔懐かしい田んぼ作りをもう一回やって、子供達を喜ばせようかとも思ったが、“面倒くさい”と言い出したりします。結局どうなるかというと、長池里山クラブはジリ貧です。

そこで継続するために考えたアイデアがあります。桜の木のソメイヨシノって５０年ぐら

いしかもたないんですよね。それが京都あたりに行って、何百年も歴史のあるお寺の中で常に桜が見事に咲いているじゃないですか。不思議に思ったんですよ。それは庭師の腕でね、ある程度親木が育ってくるのを見ながら挿し木すると芽が出てきてちゃんと繋がるそうですね。だから親木がダメになる前に１０年２０年経って立派な枝ぶりになったところで、枝の一番元気そうな、枝ぶりの良いのをちょっと切ってみて、後ろに植えておくそうです。それで、観光客がいなくなった冬場に親木の方を切って、立派に成長した子供の木と入れ替えます。観光客は時々しか来ないから、ずっと同じように桜が育っているというふうに思うだけだそうです。

だから、誰か若い人でキーマンを置いておくのが良いと思って、５０才前位の若いお母さんに期待しています。Ｔさんという彼女には、NPO 法人とクラブとのつなぎ役と事業承継をお願いしています。彼女はおじいちゃんおばあちゃんもまだ現役で健在です。早く結婚されて 21、２才で女の子を一人もうけられ、その子供も成長し面倒見ることも終わっちゃった。「お母さんは若い時に結婚して、私のために自由がきかなかったでしょ。大学まで行かせてもらったのだからここから先は自由にしていいよ」と娘さんに言ってもらったと。そして、ここに来て「何かできることありませんか？」と言われましたのでお願いしてあります。彼女は昔ファッションモデルだった位なので美しい、そういう人がいるとじいちゃん達絶対文句言いません。

ボランティアで一番素晴らしいのは、やりたい時にやりたい活動を自分が喜べる範囲まで

やって辞めたくなったら辞めるということなんですよ。年齢的にも病気しちゃったりして辛い思いをしているところで、皆が頑張っているから、皆から期待されているからやっているのなんて姿は見せない方がいいです。でないと、次世代の若い人にとって、一度ボランティアに首を突っ込んだら蟻地獄になって、もう抜けられなくなるみたいな印象になりますからね。だから、やりたい時に始めて、負担にならないようやり続けて、辞めたくなったらすっきりと辞めるのがボランティアです。お金にしているわけじゃないからそれがいい。

それでＴさんには「じいちゃん達が年取って出来なくなったら、あなたがキーパーソンなんですよ」とお願いしてあります。彼女がいるから若い子、子育て世代が来るんですね。

ある時に小学校から小さな田んぼ４枚の内のＩ枚を任せてくれませんかという相談がきました。それが里山クラブにいきなり入ってしまった。その時、あるじいちゃんが「面倒くさいから嫌だ」ってお断りしちゃったんですね。八王子市の公共財産の上で活動をしていて、八王子市立の小学校から申し入れがあった案件を個人が面倒くさいからって言って断っちゃった。僕は慌てましたね。これが八王子市に伝わったら絶対怒られるだろう。それでＴさんと話をしたところ、「私子供大好きですから、子育てをこの間まで一生懸命やっていたので」と言ってくれました。学校と日程調整をしてくれた結果、小学生が学年をあげて来てくれるようになりました。でも年に数回しか来ないんですね。数回来た後の田んぼの仕事は、結局はじいちゃん達がやるんですね。文句言いながら。

田植えを子供たちがやると、浅く植えてみたり、深く植えてみたり、倒してみたりバラバラですから、「あいつらが来ると俺たちの田んぼのクオリティが下がる」って言います。男同士でなだめても余り効果は有りません。でもＴさんが「ごめんね」って言うと何となく収まるんですね。これが男と女、この世の面白いところだと思いました。これが若木を後ろに植えておく作戦のＩつです。

ところが、これもうまくいかないかもしれないです。Ｔさんの家庭の事情等で、どこかの時点で「ここで働けません」となれば、個人を束縛するわけにいきません。後ろに植えておこうと思っていたのがいなくなったら、親木が枯れておしまいですね。

その時の対応をまた考えました。「造園の世界ではそういう時はどうするの」って庭師さんに聞くと、「そのために圃場（ほじょう）があるんですよ」との回答。苗木を育てておく特別な畑を植木家の人たちが持っていて、適当に育った桜の木と枯れた木を、冬の間に閉めた時に植え替えるんです。

内野さんっていう里山の活動のプロ中のプロの園長が居ます。長池公園の２０ヘクタールもある全部のエリアで里山クラブが活動しているわけではありません。だから、彼らの活動とバッティングしないエリアで圃場をつくっておく必要があります。内野園長直営のボランティアグループが活動していて、今の里山クラブの中心メンバーが「もうできません」と言

って撤退したら内野園長のチームをドーンと植え替えるという構想です。

ここで表土であるＮＰＯフュージョン長池が指定管理者としてやっている仕事だからこそのポイントがあるんです。里山クラブの人達は今が大事で、今やりたい仕事をやっていることに意義があります。それが出来なくなったら、よそで育っている苗木を持ってきてここでポンと植え替えても良いと思います。市民活動センターが指定管理者をやっていて、各活動団体があって、その活動団体がやっていることをメンバーチェンジしてでも継承するのかしないのかを決めることが重要です。継承しないからと言ってまずいということはないと僕は思っています。

里山クラブの人達を見ていると２０年間一生懸命活動してくれて子供たちが育ったんですね。「私はたった１年だけだったけれども、里山活動やらせてもらったんです」「私はここで楽しくお米作りやって嬉しかった」って言ってくれた女の子がちょうど２０年近く経って、今では大学院生になって、環境教育を学んでいるんです。「昔、私は里山クラブの会員だったんです」って言って来るのです。「今度は私が学生ボランティアとしてその次の世代を育成するような課題があったらお手伝いさせてください」「その代わり修士・博士論文にそれを書かせてもらってもいいですか」って。「個人を特定できるようなこと、顔写真を写したりしなければいいんじゃないの」って言って一緒に論文を作り上げるのを協力してあげました。そうしたら大学院生が喜んでくれるんですね。一生懸命活動してくれて。彼女がいると大学生のお仲間たちがやって来るのです。

おじいちゃん、おばあちゃんが一生懸命頑張っているところに、２０代は来られないですよ。会話が成立しないから。やっぱり多くの多世代を集めるには、ボランティア事務局の側にも多世代を揃える努力をしない限りはそういう人たちが集まってきません。２０年間のボランティア活動でそういう人材を育てているわけです。だから、今のメンバーが突然「もう活動できません」って言っても、それはゼロになるなんてことはなくて、豊かな人間教育をやっていっているという事ですね。自分たちが気付かないうちに。

だから表土にそういう市民活動の人達の豊かなお花畑を作ろうと言ってきました。そうすると外から「モノ」や「お金」を持ってきてくれる慈雨のような人が集まってくる。風のような人が来ていろんな新しい情報なんかが入ってくるようになる。そして盛り上がってくるとエリアを特定した新聞の地方版に、マスコミの人たちが特集をしてくれます。そうすると、みんな褒められた気分になって大変喜んでくれます。ですから、これ全体（岩盤・表土・お花畑）が生態系です。

草花にも一年草があって、一年間だけ、ある一世代だけで終わるのもあってもいいし、それから多世代に回っていくものもあってもいい。そこのところをちゃんと皆で相談しながらやってくださいねっていうのが今日一番お話をしたかったことです。

ほったらかして、市民活動センターがあるのに支援する相手がいなくなったと言ったら、これは滑稽な話になります。自分たちも結局成り立ちません。何か求められた時も、自分たちの思いを伝えようという意識が強くなりすぎると強制です。豊かさは育ちません。だけど、お米用と言われればお米用の、麦だと言われれば麦が喜ぶような地べたを、ヒマワリだと言われればヒマワリが喜ぶ地べたを用意する。そのお花畑を窒素・リン酸・カリの代わりに、経営の４資源である「人」と「モノ」と「お金」そして「情報」を提供する。お金が動かなかったとしても、地域経営する設定をちゃんと明確にしていくと上手くいくのではないかと思います。

私の方からの最後の話としては、これが法人経営ということになったら、例えば老人介護のためのＮＰＯ法人創業し、介護の老人が目の前にいるのに、介護システムにも入っちゃったのに突然辞めますというわけにはいかない。これは経営者として、ちゃんとお金も用意して次世代を雇用し続けていかなければならない。人間を入れ替えていくということをやらなきゃいけませんね。だから、ボランティア活動を多世代で行くのか、一世代で終わるのかを自分たちで相談しながら。しかし、そのことを相談する時に自分達だけでやっていると、どうしても続けたいけど続けられないという混沌としたところへ入り込んでいくだけです。事情が分かってくれて冷静に聞いてくれる市民活動センターのようなところに相談をすれば、ちゃんと客観的にアドバイスがもらえるという環境を支援センターに作っていただくと、その生態系が成立すると思いますのでやっていただければと思います。私の方からは以上でございます。ありがとうございました。

参加者からの相談、事例紹介、質疑

【講演の感想①　】

こういう話をちゃんと聞けるのは久しぶりです。富永さんをお招きした人にも感謝したいです。私も定年後の１０年間、春日部市のワークショップとかいろいろなものにたくさん出てきましたが、いい思いはあまりないです。自分の思いだけが全部吸い取られて、ブラックホールの中に入っていくような感じです。今日は久々に来て良かったなーということと、このフェスの締めくくりに一番ふさわしいお話が聴けて本当に嬉しかったです。

【質問者①　】

長池公園指定管理事業を引き受けた時に、市としての大きな課題があったのではないかと思います。市の方から提示された課題はどういう課題だったのでしょうか。

【富永さん】

私も今のところに引っ越してきた時に、阪神淡路大震災がありました。その時に「人間関係がまるでない」と思いました。私が今住んでいる多摩ニュータウンで震災があった時、皆どうやって助け合っていくのだろうと思いました。そこで、何とかして仲良くしようと思い、お祭りをしたり、色々な事をしましたが、なかかなか事業の継続性を考えると、厳しいと思いました。

その中で、市長が市民と語る会があり、その話をしたところ、当時の市長がハッキリ言っていました。「市は一度始めると、５０年、１００年でも継続しないといけないのに、ボランティア団体だとなかなか続かないから困る。法人格でしっかりやってくれなければ困る」と。その話を聞いていて私は腹が立ちました。でも、その後、市役所の立場からすればそう思っても仕方がないと思いました。市民活動のクオリティが上がって、力を持てば持つほど、ある日突然辞められたら困るだろうなと。だから、ＮＰＯフュージョン長池をつくりました。

そういった中で、公園の指定管理者募集という流れも出てきました。所管課は公園行政のことしか考えていませんから、「公園が人にあまり使ってもらえなくて、緑は雑然と荒れてきている。看板もうまく作れない。いつもあれダメこれダメしかできない。困っているから後はよろしく」と言ってきたわけです。

今でもそうですが、行政の募集要綱には「市民が公園で行儀よくするように管理監督すること」と書いてあります。お客様に対して、そんなこと言えませんよね。行政の課題意識というのは自分たちの立場から見た課題であって、市民がどう思っているかではなかったわけです。そこで思ったのが“市役所はやはり岩盤である”と。自分たちが作っている法律を維持して、サービスのクオリティを一定化して提供する。つまり、１人１人に聞いてそれに合わせて商品開発をするように、その人の自己実現したい思いに寄り添っていくことは、行政にはできないのだと諦めました。だから、ＮＰＯフュージョン長池が行政のパートナーとして、行政の代理人として、理解されてもされなくても、淡々とやろうと決めました。

行政がどうであろうと、みんなで幸せになりたいと私は思いました。幸せになるということは関係づくりです。「物」「金」以上に「人間関係」を作り上げるということが豊かさだと思います。例えば、私が風邪を引いた時に、近所のおばちゃんと関係性があると、「早く言ってくれたらおかゆを作って持って行ってあげたのに」と言ってくれて、私は助かるわけです。「買い物をかわりに行ってきてあげるから」「お掃除をやっておいてあげるから」といったちょっとしたこと、昔はそういう関係性があったわけです。その時には、こういう課題は出てこなかった。その関係性が失われたが故に、そういう関係性を求めるようになったのだから、その関係性をまた未来に向けて再構築するしかない。

自分たちが欲するサービスは、行政にはお金出してもらって、公園を任せてもらって、スポンサーになってもらって、自分たちが行政の代理人として、民間人として、そこに住まう人間として、同じその地域に住む人間にサービスを提供する方が、なんぼか心の奥底に当たる活動ができるはずだと信じてやってきました。だから、とにかく話を聞いて、その人の求めに寄り添うようにやってきたわけです。

私は全国に行くと、ＮＰＯを代表するような顔をしてものを言っていますが、わが町ではＮＰＯだということを語ったことがありません。ＮＰＯのセミナーも、ワークショップも、シンポジウムもしたことはないです。とにかく、その人が求めることに対して、その人が幸せだと感じることを提供しようとしてきました。これは行政には出来ません。人事異動もしょっちゅうなので。出来ないものを出来るようにしなさいというのは、イジメでしかないです。だから、「私達を岩盤として守ってください。契約もチャンとあるのだから守ってください。守ってもらったら、私達が代わりに豊かな表土を作って、住民が喜んでくれるようにします」と、市にはこう言っています。

【質問者①　】

課題に関しては、自分たちで課題を見つけて解決したということですね。

【質問者②　】

行政側が考えている市民参加のあり方、協働の意識が、市民である私たちがやろうと思っている、感じている市民参加、協働と全然違うという印象が私にはあります。

私たちも一緒に何かをしたい、一緒に何かを作っていきたいと思うことも勿論あり、そのように動こうと思いますが、どうしてもその溝が埋められないので、自分たちが望むような団体活動ができにくいというのが私が抱える課題です。行政となんとか向き合い、折り合いをつけようと思った時にどう市民側がアプローチをしたら良いのか悩んでいます。

【富永さん】

市の私達の窓口である所管課の人達も市民協働と言います。それは、あくまでも行政が求めるイメージの市民活動だと考えています。だから私は諦めたと言いながら、いいように言語変換しています。私達がやっている市民活動を「あなたたちが要求していることに、ちゃんと則している」とレポートしています。

つまり、私は営業マンですから、お客様の言うことをよく聞いているということです。市民で遊びに来る人たちの求めることと、行政が求めることの真ん中にいるわけです。つまり中間支援をやっているわけです。中間支援としては、お客様の言うことを聞いて、行政の言うことも聞いて、行政が喜ぶようにレポートを書いて出しています。これは諦めた訳ではないです。これを諦めたら岩盤と表土が地滑りを起こしてしまいます。「あなたたちはいらない」と言われてブルドーザーで表土を除去されて、新しい表土、つまり自分たちの言う事を

聞いてくれる下請けを連れてくるほうがいいという話になってしまいます。

市は究極的にはいっぱい人が来てくれたら、喜んでくれます。長池公園の収容人数は駐車場の限界でＩ２、　Ｉ３万人が上限になります。公園の方では「バスで来られます、公共交通を使って楽に来られます」と広報しています。矢印看板を設置して、「歩いても来られます。バスに乗ってきても道を間違えないで来られます」と宣伝をして、来場者数は 20 万人を超えました。

行政も安心すると、だんだん文句を言わなくなります。さらに分かり易く、行政の方には行政用の言語で物事を言うのが重要になります。だから、私は行政には行政用の言語で「法律の第〇条にこう書いてあります。ですから言われたことはしっかりやっています。契約書に書いてあることはやっています」とお答えします。

一方、市民には「やりたいようにやろう」と言います。いっぱい行事をしていますが、私達はほとんど何もしていないのです。習字教室の講師をやりたい女性が、ボランティアで講師をしてくれる。市民が市民に市民サービスを提供しています。その習字教室に集まって教えてもらった人が感謝して、また別の事業を立ち上げるケースがあります。そうすると、今度は習字教室で講師をしていた人がお弟子さんになるわけです。そういうふうに、市民と市民とで、市民サービスを交換する形の、市民同士の市民協働になります。市民協働という言葉の定義は、元々は市民と行政とが一緒に働きましょうということだったのですが、行政と市民とではなかなかうまく協働できないので、私達が間に入って、市民と市民でサービスを交換するというところをしています。そうすると、いっぱいやりたいと集まってくれるので、私達はボランティアの方々の出来ないところのお世話係だけをしています。

そして、年間Ｉ００も、２００も出来るようなり、お金も労力もかからなくて済みます。市民に向かっては、そういう言語を使います。行政には市民がこう言っているのだから、行政も変わらないといけないとは言いません。行政の人たちが議会に向かって物を言いやすいように、行政の人の思いに寄り添っていくのです。目の前にいる全ての人に、「あなたこそがお客様ですね」という物の言い方をしていくということです。中間支援をするということは、言語変換装置ができるかどうかということです。

【質問者②　】

中間支援とは“人と人とをつなぐ”とか“マッチング”などの言葉はよく使いますが、実際には“翻訳機”であり、“営業”だということがわかりました。

【富永さん】

市民のＡさんに「何がやりたいのですか」と聞くと、「地域でやりたいことはよくわからな

い」と答えます。「好きなことはなんですか」と聞くと、そこそこ出てきますが、１番出てくるのは絶対にやりたくないことなんです。ですから、やりたくないことは全てやらせないことにして、受け入れてくれそうなグループに案内します。私の方でボランティア団体をしている代表の人に事前に根回しをしておいて、その人が来たときに大歓迎をしてあげて下さいと伝えておきます。

一方、行政は頑張って、成果があっても給料が増えないわけです。しかし、出世したいと思っている人はいます。仕事ができる人はやはり出世したいと思っていますから。私はよく「私達と仲良くして出世したい人」とカウンターに行っていきなり声をかけるんです。そうすると、みんな笑ってくれます。「よろこびのシャワー大作戦」と自分で勝手にそう呼んでいます。だから、長池に良くしてくれて、付き合ってくれると、「あなたの欲しい成果を全部てんこ盛りにしてあげます」と言っています。その上で、上司とか副市長に市役所のホールなどで会うと、個人名を出して、その人のおかげでとても助かっていると言います。必ず個人名を出して褒めておきます。そうすると、自分にとってありがたい人が出世します。ありがたくない人のことはコメントしません。ケチはつけないけれど。褒めておくと得をすると思う人は褒めてまわります。色々なセクションに行って、好ましい人を見つけたら、褒めてまわります。そういう人は 10 年、20 年の間にどんどん出世します。私がサラリーマンの時にも同じことをしました。

私が３０才の時にこれからの１０年以内に、１０人でいいから取締役を出してやろうと思ってメンバーの中から５０人ほど選びました。それでお客さまのところの人材育成をやりました。そうしたら、やはり５人位出世しまして、役員になりました。自分の好ましい、味方だと思う行政の人は出世してもらう。それを陰でコソコソすると、フィクサーみたいになるので、あっけらかんと所管課のカウンターに行って、「私と仲良くして出世したい人」と大きな声でする。このようにセールス活動をやってきたわけです。

行政の人と理屈で戦っちゃだめです。行政マンは学力の高い人たちがなっているので、反論をこさえるのも上手です。反論を作らせないようにするためには、好きか嫌いかなんです。富永が寄ってくると嬉しい気分にさせるかどうかということなんです。そうすると、自分の思いと外れていることがあっても、良質なキャパシティが広がります。１０年を超えると、人事異動があって初期メンバーはいなくなります。成果てんこ盛りのところに後から来るので、「フュージョン長池の皆さんはよくやってくれている。私たちは後から来て分からないのでお任せします」と言うようになりました。

そこで事件、事故は絶対出さないことも重要になります。行政マンが嫌がるようなことは絶対起こさないようにやってきました。もう１つは、市は市民からの公園に対するクレームが出ることが大の苦手です。直接所管課にクレームの電話がかかってきても、様子が分かっ

ていないから答えようがないわけです。市民の方々には「何か意見がある時には、全部現場の事務所に直接問い合わせてください。市役所に言わないようにしてください。」と言っています。そうすると、皆幸せ、行政も幸せ、地域で生きる人たちも幸せ、我々指定管理者も幸せになります。皆がハッピーになれるように振る舞うことができるようになります。

時間軸においても同じです。おじいちゃんの幸せと息子、娘世代の幸せと孫世代の幸せは違うのです。いろいろな環境があるから、一律的にはいかないのです。自分の周りにいる同世代の人たちの幸せと、時間軸を飛び越えて三世代の繋がりの幸せということも考えると、これが未来に繋がります。

Ａという団体がなくなったとしても、Ｂという団体が出てきたり 、Ｃという団体が新たに出てきたり。「ここに住んでいることで、皆で幸せになれたね」と思えるようなＩ００年計画を立てるんだと思ってやってきました。

昔、里山には孫子のために幸せを作り上げるという思いでやってきた人たちがいました。今だけ、ここだけ自分の思いが通ればいいと思うと、お年寄りがそばに保育園ができることを嫌うみたいなことが起こるんです。自分の世代の幸せだけを考え、未来を生きる子供たちの幸せを考えてくれない。だから、「この瞬間のあなたも大事なんだけれど、Ｉ００年後どうするかということをイメージしながらその人と話をしてください。」と言っています。そうすると、お年寄りだったとしても、「そうですね。孫子のために少し我慢したり、遠慮したり、いろいろなことをしたり、ここで里山活動なんかもやっとくほうがいいですね。」というような思いになってくださる。それを少しずつ、うるさくならない程度にお話をしていきます。

地域の中ではＮＰＯをＩ００％語らないで、ＮＰＯが目指すものを地域にいる人に合わせて、言語変換してＮＰＯとしての思いを遂げようとしてきました。

【質問者③　】

障害のある方をシニアだけではなく若い世代もスタッフに交えて活動していますが、ヒントになることがあれば教えてください。

【富永さん】

私達が管理運営をさせてもらっている公園緑地は、長池公園がＩ番大きいんですけれど、小さいものも入れると全部で８Ｉあるんです。合計面積は、７７ヘクタールになります。公園の清掃、トイレ清掃などがありますので、知的障害、精神障害の団体にお仕事としてやってもらっています。私は福祉の人達を、０円でボランティアみたいな形でマンパワーとして期待をするものではないと思っています。「ちゃんとお金を稼いで、障害を持たれている方にお給料を出せる団体になってください」と言っています。ボランティアとして期待してい

るのではなく、働いていただいています。ですから、自然館という立派な建物や公園清掃、そして公園のトイレ清掃をピカピカに綺麗にしてもらっています。それに対してお手当も全部払っています。

民間企業と契約したら、契約の中で１時間清掃するといったらそれしかやってくれませんが、福祉団体の人たちは優しいですね。雪が降った翌日には「こういう時には助け合い精神が必要です」と言って、契約している人数よりもたくさん出てきて、雪かきを一緒懸命やってくれます。それも普段４、５人しか出てこないところに、１０人ぐらいが雪かきを手伝ってくれます。

この時期は、遊歩道に落ち葉が溜まって雨でも降ると足が滑って危ないという話をしておくと、落ち葉を掻き分けて端に寄せるだけなんですけれども、そういう簡単なことを一生懸命になって、人数を大量に出してやってくれます。

台風が来た後は枝が折れて道端に落ちていたりすると、歩きづらくなって困るわけです。私達スタッフも人数が限られていますので、なかなか一気に人海戦術というわけにいかない。そのような時には、福祉の人たちが「働かせてもらって、お金を頂いているんですから。こういう時には人助けですから」と言って、ご近所付き合い感覚で出てきて助けてくれます。今は全部で８１の公園緑地を３つの福祉団体と契約をして、お仕事をしてもらっています。

それから、民生委員をやられているということですから、この話もご興味があるかと思います。中学生の時に不登校になって、高校に行っていなかったお兄ちゃんがいました。母子家庭で、お母さんから「息子が不登校になっちゃった。今１６才になっています」という話を聞いた時に、息子を長池公園に連れてくるように言ったわけです。午前中だけでもいいから、ボランティアするように言って、夜は普通に寝るような習慣になおさせました。どうして不登校になったのかを聞いたら、人間は別に悪くないし、いじめられたわけでもないんです。とにかく勉強が苦手なんです。「教科書を持っておいで」と言ったら１週間くらい来なくなりました。教科書を開こうとすると、手が震えるんです。とにかく勉強が駄目だというわけです。そこで、教科書はしまってもらいました。すると公園の仕事を一生懸命頑張ってしてくれるようになったので、ちゃんとお給料を出すようにしました。彼には午前中だけ働いてもらいました。夜起きて、昼間はゴロゴロ寝ていたので、１日働ける体力はないわけです。半日働いてもらって、アルバイト代としてちゃんとお金を払っていました。

ところが、彼はお金をすぐに使ってしまうので、預金をさせてその預金通帳とハンコは私が預かっていました。一切お金を使わせないで、お金を貯めさせました。「お金を貯めて何をしたいか」と聞くと、本人は「車に乗りたい」と言います。「１８才になったら、とにかく普通免許を取りたい」と。「それなら、学科試験を受けなければいけない」と言って、学

科試験を受けるための勉強をしました。しかし、４回も５回も試験に落ちているわけです。でも、受かった時には、まだＩ０代ですからお酒を飲ませるわけにもいかないので、ケーキを買ってあげて、大げさなぐらい皆で褒め、喜んであげました。

それにはまた目論見があって、私は彼を高校までは行かせようと思っていました。お母さんが美容師だったので、彼も手先が器用でした。やはりＤＮＡですよね。彼は機械いじりが大好きで、車を触りたいというので、工業高校に行きました。私は高校を一緒に選んであげて、本人も受験勉強をする覚悟ができました。普通車の学科試験も突破したので、本人も勉強することに自信がついたんですね。自信がついたところで、ちょっとだけ勉強して合格して、夜間高校に行きました。

今度はあまりややこしい勉強をしないで、自分の好きな機械工学みたいなことだけを勉強をするので、喜んで勉強していました。４年間、皆勤賞で一生懸命やって、その高校を出る時に、彼はちょうど２２才でした。私は最初に、「２２才でお友達の多くが大学を卒業する時に、長池公園を卒業しようね」と彼と約束をしました。２２才になる年に見事に高校も卒業して、自動車関連の会社に行って、社長さんに気に入られて就職も果たしたんです。

さきほどの福祉の人たちも、軽い障害の人たちじゃないと出て来られないわけです。軽い精神障害ぐらいの人であれば、天気のいい日に外で作業をするのは気分がいいんですね。そうすると、精神的に良くなって健常者に戻っちゃう。普通のハウスクリーニングの会社で一般就労になっている人が、毎年３人も４人も出てくるようになりました。私は、彼らにＮＰＯ活動や市民活動なんて何も言っていません。とにかく「ここで元気いっぱい、仕事をしよう」と言っています。先述の彼にはとにかく高校を卒業して、Ｉ番好きな仕事をやろうと言っただけです。我が町の不登校を、Ｉ人だけですけれど、社会復帰させました。その社長から、面接の時に「不登校だったにも関わらず、よくここまで頑張って普通に就職活動もできるようになったね」と言ってもらったと帰ってきたので、これで「合格した」と思って、その時は涙が出るほど嬉しかった。人の心を持った市民活動、指定管理者でありたいですね。

若者で、ビジネスの世界に行って、打ちひしがれた方がバードウォッチャーになったりするんですね。鳥の声だけはよく分かるんだけど、会社に行ったらアウトと言われて。だから、ビジネス社会からあぶれちゃったような若者を引き受けて、今、私の後継者になってもらっています。

じいちゃん達も、会社を卒業して生きがい就労で来てくださって、嬉しい嬉しいと言ってくださる。そこに、若い孫みたいな２０代のうちのスタッフがくっついていくんですね。そうすると、「じいちゃんの土木工事の技術の継承が、一緒に作業する中でできる」というふうに作り上げてきました。地域の人間関係の豊かさというものを取り戻すようになりましたので、見学に来て頂くと、質問者③の方にも喜んでいただけるのではないかと思います。お

待ちしております。

面白い継承システムの事例の紹介

【春日部点字サークル】

春日部点字サークルは、昭和５９年に発足して、３７年間続いています。市の点字講習会で講習を受けて修了した者が春日部点字サークルに入会するという条件があります。３７年間で延べ会員数は３０６名になっています。現在は、３２名の構成で、サークルとして活動しています。世代交代なんですけれど、発足した当時は、しばらく発起人が続けていました。ある時に代表になる方がいないということになり、規約で「役員は２年間とし、再任は妨げないが、２期までとする」という会則が出来ました。その時に立候補者がいれば、その方がやってくださるのですが、いなければ入会順という形で、現在に至っています。今のところは入会順で「しょうがない。やってもいいか」という感じでやっている状態です。今、会員は８４才位の方から、若い方で１９才までいます。

【富永さん】

役員は２年、再任が２年で最大４年やるわけじゃないですか。役員を辞めた後に、活動を辞める必要はないですよね。ポイントはそこなんですよ。ビジネスマンをやってきた人にありがちなんですが、会の代表を退くと、その会からいなくならなきゃいけないんだと自動的

に理解するんですね。会社から追い出されていくものですから。私はボランティア団体にもちゃんと役員定年制を引てくれと言うんです。６０才からの生きがい的なボランティア団体であれば、６５才から７０才位までの体が動くであろう人に「役員をやってください。そして役員を辞めた後も活動は体が続く限りやってください」と言っています。「役員には定年制あり。活動には定年制なし」というふうに言っているんです。役員をやった人がいっぱい周りにいると、少々できが悪い役員がいても、「守ってあげればいいじゃないの」そう言っています。初めて、このモデル事例に出会いました。全国歩いているけどなかなかそういうふうにできないですよ。

【春日部点字サークル】
技能的なものがありますので、大先輩方が本当に良くしてくださって、若い者にいろいろなことを教えてくださって本当にいいと思います。

【富永さん】
７０、８０才になると６０才が若手になるんですよね。ＮＰＯ法人なんかでも、６０才以上の人が生きがいで頑張れるＮＰＯを作るっていうのもいいと思うんですよね。シニアの生きがいづくりのためのＮＰＯ法人があってもいいじゃないですか。何も２０代、３０代が来てくれなければ、事業承継が出来ないわけではないんですよ。だから、シニアといわれる６０才以上の人だけでまわしているボランティア団体があっていいと思います。だけど、その時に役員定年は必要なんです。私も地元では人間関係が濃すぎてなかなか「あんた辞めろ」とは言えないです。頑張って何期もやって、役員定年制を作るのを忘れたような人たちがいると、「君はずっとやっているんだ。もう、人間も団体もピンピンコロリもいいよ」と言ってあげているんです。役員定年制をひいて、役員を辞める。でも会の中で活動することは継続する。そういうふうにできると幸せなんですよ。

【質問者④　】
大学生です。僕は地元でＩＩ年、小学校５年生の時から環境保全の活動をさせて頂いています。僕が環境保全を始めた理由は、簡単にいうと、小学校からあぶれたんです。小学校５年生の時に、ちょっといじめられて、不登校にはならなかったんですけど。友達ができなかったので、誰かと関わりたいなぁと思って、川に行ったら、おじいちゃん、おばあちゃんがゴミを拾っていたんです。一緒にゴミ拾いをして、それがＩＩ年続いちゃいました。最近、そのおじいちゃん、おばあちゃんが死んでいなくなっちゃって、すごい寂しいなぁと思っています。おじいちゃん、おばあちゃんの今までやってきたことを、せめて僕Ｉ人でもいいか

ら、後１０年間やりたいなと思って今活動させて頂いています。

【富永さん】

すごいね。なかなかそうはならないんですよ。事情が許さないよね。今の大学は出席をきっちり取られるんですよ。就職活動で抜ける時には、欠席届を出して承認をもらっておかないと、単位がもらえなくなる位厳しいんですよ。だから、立派に単位を取ること、アルバイトをすること、とにかく就職すること。この３つ以外にほぼ余裕がないんです。

就職したらその会社の人事異動で北海道転勤とか言われるので、なかなか地元に残って活動を継続するというのが、今の時代の若い人たち、大学生たちに望めないんですよね。だから、私は一瞬の思い出のためにも、学生時代の思い出のためだけでもいいから、手伝ってくれるように言っています。

学生さんが一生懸命真面目に手伝ってくれますと、皆と相談してアルバイトとしてお給料を払ってあげています。他のアルバイトを止めてでも、ここでアルバイトが継続できるように、一生懸命配慮をしてあげるんです。そうすれば、「お金にもなるし、自分の好きなことをやれる」と言って、学生さんはとっても喜んでくれます。

卒論を作ると言えば、卒論を書くのを手伝ってあげたりしています。「自分のおじいちゃん、おばあちゃんに感謝しているから」と言ってくれるのは、そうありたい、そういうのを目指したいと思っている私の見果てぬ夢の一つですね。

先人のやりたいことを、次に継承するというのは、よほどその思いを共有化できるということと、次の世代が先代の人達に大感謝という思いがないと難しいんですよ。だから私の見果てぬ夢を、あなたがやってくれそうなのでとっても嬉しいね。人間として感謝しますよ。

【質問者⑤　】

僕も市民活動をしています。僕の場合は母の手伝いが最初で、小学校の時からしています。僕もいじめがあったりして、学校に居場所がなかったから、こっちにちょっと居場所を見つけられたのがきっかけだと思っています。大学生まで続けて、ＩＴと市民活動を繋げられればいいかなという思いでやっているんですけれども、高校生とか大学生の世代が、少しでも市民活動などで地域に関わらないと持続可能的な社会は難しいと思っています。学生の時だけでも地域と関わっていたというのが、他の所に行った後でも、役に立つと思います。けれど、なかなか来てくれません。“スタッフに若い世代を”というのがあったんですけれど、団体の運営スタッフを入れる以前にそもそも来てくれないという問題があると思います。午前中も、「１人１人声をかけると、なかなか来づらいから、皆で誘った方がいいんじ

ゃないか」みたいな意見が出ました。そういうのってどうやったらいいのか。何かヒントみたいなものがあったら、お聞きしたいなと思っています。自分でも、同じ世代の人がやっぱりいたほうがいいと思っています。いた方がやりやすいし、自分達の価値観で物事を進めることができるので、よりスムーズになるのかなと思います。どうしたら若者が地域に目を向けてくれるのか。例えば、長池公園だったら、目で見ても分かるし、感じられるからやり易いけれど、市民活動団体というもう少し絞った焦点で見ると、なかなか難しいと思っています。だから、どういうきっかけで若い世代に参加してもらうのか、何が重要なのかを聞きたいです。

【富永さん】

すごくいい質問だと思います。私達が学生さんと話している時に、市民活動センターだから、市民活動に興味を持って出てきませんかというふうに声をかけるのが普通だと思うんです。だけど、聞いている方からすると、市民活動という言葉自体を本人が使ったこともなければ、日常的に聞いたこともない。よくわからないなぁと思うと、もう出てこられないですね。

講演のビデオの中の女の子は「次に何をしたらいいかが分からないから、ワクワクドキドキして楽しかった」と言っていましたが、そう言えるのはあの世代までです。あれより成長すると、知恵がどんどん回り始めるので、先読みして理解できないことに関しては嫌なことになります。

“市民活動”というワンワードでくくろうとするのではなくて、相手が例えばネットワークに関することが好きだとすると、「ネットワークでテレビ会議的なことをするのだけれど、人手が足りないから助けてくれない」「ビデオカメラを置いて、Zoom をやってネット環境を作って、リアルとズームの二刀流でハイブリッドの体制で話し合いをするんだって。それに合わせて、私が持っている技術を提供するから、一緒にあなたが持ってる技術も提供してくれないか。」というように言ったら、好きだと思う人間が出てくるのではないでしょうか。

【質問者⑤　】

こういうところに出てきてくれないということが１番の悩みで、一本釣りみたいなことがなかなか難しい状況だと思うんです。置き網を置いて、かかってくれるのを待ってみたいなのが現状なので。若者の多くが「お前らうるせえよ」と睨むよう状態なんだと思います。何が得意かというのも分かりづらい状態なんです。

【富永さん】

私はＩ０年間位、中央大学の法学部で非常勤講師をやっていたんです。Ｉ０年間に、ＮＰＯや市民活動から距離を置きたいという若者たちがどんどん増えてしまったんです。どうしてかというと、「あそこに行くと恐ろしいです。蟻地獄みたいな気がするんです。関わっちゃいけない。楽しいと思って行ったら、若いのは働けと言われてしまう。お金も貰えない。自分の生活が出来なくなって就職活動にまで災いが来そうで恐ろしい。ＮＰＯ法人なんてまっぴら御免」と彼らはいうわけです。

親父たちはいいですよ。右肩上がりの時代に、どんどん給料をくれた時代に働いて、シングルインカムで女房、子供全部が暮らせた時代でしたから。今は共稼ぎをしても、給料も上がらないような時代なので、少しでも給料を多く出してくれる企業に就職できるかどうかの方が大事で 、ＮＰＯ活動やボランティア活動に首を突っ込むような余裕がないわけです。

一方、団体の方はというと、いかにして若者を取り込むか、巻き込むか、と待っているわけです。その思いには、全く邪念がない。その言葉を使っている人も、美しい思いなんだけれど。「巻き込むとか取り込むという自分のほうの困りごとを何とかするために、若者を呼び込もうとするような物の言い方、考え方はしちゃいけない。」と私は団体に言っています。

あるＩ人の大学生が来ました。一生懸命手伝ってくれたので、最初はボランティアだった

けれど、「真面目によく働くから、アルバイト賃を払おう」と皆が言ったので、私は払ってあげました。ビオトープ（野生動植物の安定した生息地）の資格試験もとらせてあげました。「そういうのが大好きで、小さい時から小笠原のような所に行って、就職するのが夢なんです」と言うので、１０枚ほど理事長印を押して推薦状を作ってあげました。「資格試験を取ってこんな風に頑張りました」と書いて、就職の面接時にこれを渡しておくように言ったんです。就職活動に役に立つようにとエビデンスを用意してあげて、彼は見事小笠原に就職しました。

就職が目的だったら、市民活動センターという体で、こんなに頑張ったというエビデンスを作って、民間の理事長名で判子を押して、本人の就職担当者宛に渡してもいいじゃないですか。そういうふうにすると、みんな喜んで来て、働いてくれるようになると私は思うんです。

環境系の勉強をする人間は、長池公園に行くと卒論の面倒を見てくれる、修士論文の面倒を見てくれる、就職しようとすると理事長印を押して推薦状まで用意してくれる。そうすると、一生懸命働いてくれますよ、喜んで。でも 2、3 年でいなくなります。「世界中どこへでも行ってください。学生時代を過ごしたここは故郷みたいなもんだ。世の中に疲れたら戻っておいで。いつでも私達が待っているよ」と私は彼らを送り出すんです。彼らにお願いして、卒論のコピーと修士論文のコピーを私達の財産として置いてもらって、並べていくのを楽しみにしているんです。そんなのはまったく市役所は評価してくれません。そんな仕様書なんて出ていないから。

“若者たちを何人送り出した”かが僕らのプライド。そのぐらいの思いで待っています。その人を主役にしようと、その人を幸せにしようとしているわけです。人生長く生きてきたから、知恵が出るんだから、経験知で貢献してあげます。それを“未来ある若者に経験知で投資をする”と言っています。「あなたが年を取った時に、私がやったように若い２０代、３０代の人にまた貢献してあげて」と私は言うんです。里山で生きた我々は、じいちゃん、ばあちゃんになったら孫子のために貢献するという想いで生きてきました。

【質問者⑤　】

自分が参加してる「市民として政治を考える」みたいな団体も、若者からじゃなくて、大人の世代からも同じように毛嫌いされているところがあるので、参考になるお話だった。

【富永さん】

じいちゃんだろうがばあちゃんだろうが、父ちゃん、母ちゃん、孫たちであろうが、若いかどうかは関係なく、今、目の前にいる人を最大限リスペクトするように、自分がどこまで対応できるかに自分の成長をかけるんです。

自分に対応力がなかったために、あの時にちゃんとアドバイスできなかったという悔しい思いを、何回も繰り返したこともあるんです。その時に一生懸命考えて、自分の持ちネタの中で、この１人のおじいちゃんに、この１人のお母さんに、この１人の大学生に、何をしてあげたら相手が喜んでくれて、幸せになるかということの集合体が市民活動だと思います。

市民活動という言葉の定義なんかから入っては駄目です。「人が、皆で地域で生きるということ、幸せになるためにやること、それがおおよそ市民活動ではないか」というぐらいの思いがあっていいのではないでしょうか。

おわりに

水野

富永さん、本日はありがとうございました。皆さんいかがだったでしょうか。私も事前に富永さんとお話をさせて頂いて、非常に引き込まれました。今日２回目のお話を聞きましてさらに魅力を感じました。まだご意見ご質問があろうかと思いますが、このあと富永さんもご参加いただいて交流会を設けておりますので是非ご参加ください。富永さんの集大成ともいえる著書「人間里山主義」の販売もいたします。オンラインでご参加の皆さまもありがとうございました。これにてトークセッション３を終了とさせていただきます。

団体交流会

12/5（日）16:00～17:00

吉田理子（フェスティバル実行委員長）
（トークセッション３を終えて）このままこちらの会場で団体交流会を開催したいと思います。昨日、今日と（シンポジウム、トークセッションを）開催しましたけど、まわりの人たちと少しお話をしていただければと思います。お一人ずつＡ３の紙がありますので、５年後 10 年後になっていたい団体の姿を書いて、いまのトークセッション３の話も踏まえて考えていただけたらと思います。

富永一夫さん（トークセッション３講師）
何か質問とか感想とかがあればどうぞ。人数も少なくなったのでざっくばらんに。

参加者１
本当に久々にいい話を聞いたと思っています。自分がやっているからではなくて、自分の目標というものをちゃんと整理してくれて、みんな並べてくれたという感じがします。だから今日は最後のプレゼンとして良い締めだったというのが正直な印象です。

参加者２

今日はありがとうございました。世代交代のお話ということで、うちも周りの団体から見ればまだ若いんですけれども、僕もそろそろ 50 になるので、次の世代を作っておかないといけないと思っています。それこそ苗木状態で渡してもしょうがないので、しっかりと受けられるような人材になってもらってから引き渡すのが大切だと感じています。60 ぐらいを目処に次の世代に移したいと思っています。今、うちの娘を大学の地域コミュニティ科みたいなところに入れるように、なるべく洗脳しています。僕の子供の世代をうまく扱って、継いでもらおうと思っています。

僕らの市民活動というのは手探りなことが結構多いと思うんですよね。なにか決まっていて目標があって、それに向かって道ができているのではなくて、いろいろなことを手探りでやってきた結果こうなったみたいなことも結構あったりします。そうすると、僕が考えているビジョンだけでずっとまっすぐ行けるわけではなくて、いろいろな人の意見とか考え方というのがあっての道筋で、「こういうふうになったんだね。」というのがいいと思うんです。なかなか自分の頭で考えられる人が少ないという気がします。自分の頭で考えられるような人をどのように育てていくのか、どのように伝えていったら自主自立でやっていくという気持ちになるのか、その辺があれば知りたいと思っています。

富永さん

色々なやり方があっていいと思います。私の経験談を話しますと、先ほど映像で紹介があった自然館という建物がありますが、そこの事務所のカウンターに市民の方が来所し対応し始めると、うちのスタッフが全員逃げてしまうという状態から始まりました。会話についてこられない為、傍で聞いていてくれればいいのにパソコンに向かい始めちゃうんです。「富永さんに任せました。」という感じで。そこで僕がいなくなったらどうしようもないなと思いました。だから公園に来てくださる一般市民の方々の前に、働いているスタッフの人たちの満足度を上げなければいけないと思いました。スタッフの人達のやりたいことを一緒に考えるというところから伴走支援をしたわけです。そうすると、スタッフがあれやりたい、これやりたいと思い始めたので、一緒に相談して何が得意かをスタッフに聞きました。銀行で経理の経験がある方には経理をやってもらいましたし、美大出身の方にはポスターを作ってもらいました。公園でポスターを掲示する際には、ユニバーサルデザインという誰でも見られるようなデザインにしなければいけません。そうすると、色使いが問題になります。黄色と赤系がくっついていると、その違いが分からない色弱の方が日本には結構いるんです。見た目では分かりませんから色弱だということに僕らが気が付かないだけなんです。そこで、スタッフがそういうことを学ぶ講習会に行きたくても、限られた予算の中ですから遠慮をしてしまうんです。そういう時にはルールを決めています。誰かが勉強をしに行きたいとなれば、みんなで別の予算を少し削って受講料を出せるようにしています。まず、働いている人の満足度が上がるように、その人たちの「やりたい」がやれるようにします。一方で、やりたくないことも言っていいということにしました。その結果、僕が言っても言うことを聞かなくなってしまってやりたくないと言うんです。やりたくないと言われると僕も腹が立つので、何か別のやりたいことを１個余分にやるように言っています。それを辛抱強くやっていくうちに、スタッフも徐々に自信がついてくるわけです。来園者がヨガがやりたい、お習字の教室をやりたいと言うと、僕がやったように対応ができるようになりました。明治時代に「やってみせ、言って聞かせてやらせてみて、褒めてやらねば人は動かず。」という名言が残っていますが、僕はこの通りにやってみました。褒める時には盛大に褒めるという事を恥ずかしげなく褒めることをやりました。そうするとやってくれるようになるんです。その次に大変だったのが世代交代をさせることでした。僕が 65 になって、年金がもらえる頃をけじめにしようと思って、それまでに後継者探しをやりました。ここでみなさんも問題になると思いますが、今の理事長は今いるメンバーの中で一番後から来た人だったんです。後から来ても単なる役割分担で、１番リーダーに向いている人にリーダーをやってもらわなかったら困るという考え方で、「年功序列的に先輩なんだから、私がやるべき。後から来た人かど

うして？」みたいな気持ちを出させないようにするということもやってきました。みんなで自分のやりたいこと、できることのパッチワークをしてみんなで嬉しそうにやっていると、来園する人が変わります。「ここはいつもみなさん楽しそうですね。」と言ってくれるようになります。それで「私もここの仲間に入れて。」みたいな感じになります。「なにをやりたいですか？」、と聞いてあげるというのがみんなでできるようになりました。そのためには、約 10 年かかりました。それと、僕は目標を決めていました。「65 歳になったら自分が立場を降りること。」「お給料を若い人に全部振り分けるから、1 度正職員になった僕と同じように僕と同世代で頑張ってくれた人達にもう 1 回パートになってもらうこと。」「若い人を正規職員として、世の中の平均給与ぐらいは払えるようにするということ」を目指しました。それをゆっくり 10 年ぐらいかけて、みんなで何度も話をしました。

参加者 1

何がすごいかというと、私はあまり人をけなしたくないからあれなんだけど、県の人と仕事していたら、春日部市は江戸時代だからね、とよく言われるんです。私もこういう江戸時代の姿をたくさん見るんです。どういうことかというと、偉い人が最後までしがみついて、要するに自己完結性ですね。次の若い人が出てこないといけない、そういう状態を私はたくさん見てきています。しがみついている自己完結性というものを。そうじゃないと思うんです。今日の話、潔さということは、春日部市にとっては急所を突く話だったと思います。それと、専門用語を使わないことも非常に良かったと思います。

参加者 3

今日はありがとうございました。ホタルを飼育しております。ホタル鑑賞会とホタルの自生地の復活を目指してやっています。一応ホタルを飼いたい、一緒にやりたいという方がいて、ホタルの飼育方法を教えるんですけれども、だいたい 3 年ぐらいで上手くいかないから辞めるという形で飼育もやめるし、会も辞めていってしまいます。なかなか会員が増えないということで、その点がちょっと問題だなというふうに思っていたのですが、今日のお話を聞いて全部それは自分たちが満足して、自分たちの組織さえ大きくなればいいという相手の立場を考えないやり方を自分自身が直さなければいけないという反省をしたところです。ただやはりこのままいくと、ずっと年寄りが登っていっていずれ消滅しちゃうと寂しいので、なんとか会員を若くても 40 代以降になりますがそういう人達を誘って、そして、今度はあなたの楽しいようなやり方でやりましょうよというようなやり方で、会を運営していこうかなと感じたところです。

参加者４

私の団体は春日部市にあるのではなくて、全県組織の中でぽぽらの施設を利用しているので、私もよくイベントには参加させていただいています。今日は先生のいろいろな話を聞いて、一番大事なのが話をよく知り合うことだと思いました。メンバーの相互理解をするためには、やっぱり話をしなきゃいけないということと、このコロナ禍の中で、会合は７回開けてないんですよね。そうすると、最近は平均年齢も 60 代だったのがだんだんもう 70 に近くなってきている団体ですと、会員も辞めるという人が多くなる。その中でどう世代交代をしていくかというのが非常に問題になっているんですけれども、会の代表をどうするか、全然意思疎通、話し合いができていない状態なので、非常にメンバー全員が問題だと思っているんですよ。やはり、話し合うというのが一番必要なんだなということが、今日勉強をさせていただいた一つのお土産として持って帰ってメンバー内で話し合いをしたいなと思いました。どうもありがとうございます。

富永さん

私もこれだけよく喋る人で、多いときにはコロナ前は年間 100 回ぐらい講演会で全国を走り回るような生活をしていました。今それがほぼ全滅している状態です。だから寂しい気分になってくるので、何を最近やっているかというと、ZOOM で話をしようよと言ったり、ZOOM ができなくても Facebook メッセンジャーという装置にはビデオチャットをするボタンがありますので、チャットをしようと言っています。日本人って真面目でね、特にこの世界の市民活動でお金にもならないことを一生懸命やる人ってみんな真面目なので、ZOOM で会議をやろうと言ったらできないんですよ。開けないんです、まずテーマが決められない。議事次第が決められないみたいな感じになります。次第もなしでなんでやるのみたいなことになるので、みんなで雑談しようと私は言っています。そうすると、今度は雑談して意味があるのかと言われるので、「価値のある雑談会」をしようと言っています。ごまかしみたいなんですけれど、とにかくおしゃべりをしてあげないといけない。個人で一対一から始めて、せいぜい５人以内ぐらいまでですね。そのぐらいで雑談的なおしゃべりをやるのが、とても重要なんだということが分かってきました。だから、身構えて会議をするシステムが、テレビ会議システムではなくて、あれは単なるおしゃべりの道具だというくらいで、気楽に何か電話をかけられる代わりに顔を見ながら喋るものだと考えると、気楽に会話ができるようになると思います。その中で代表をどうするかということも話し合っていければ、面倒くさい根回しの必要がなくなってなんとかなるんじゃないかと思います。それから、蛍の飼育を１年やっただけで飽きちゃっていなくなるという話ですけれど、蛍の餌が何かという

のを知らない人は世の中に多いですよ。カワニナという貝を水槽の中で蛍と同居させるとホタルの幼虫からカワニナが逃げていくでしょ、ガラスのところを登ってね、食べられちゃうので。そういうのを僕も飼育するのを見て知っているんですけれども、そういうことを１年だけでもやってくれた人が出たということを誇ったらいいんじゃないですかね。０というのは数字的には意味がない、実態がないので、これは本当の意味では数学的には間違っているんですけれど、１回目、０で割ったら無限大というふうに言って、激励してきました。０と１では全く違うんだと。そしてもう一つキーワードにしてきたことは、今この瞬間にわが町で１つのイベントが出来たということは、小さな歴史が動いたと言って褒めてきました。だから、100 点満点取れなくても、１点取ってくれた人に本当に最敬礼するような思いで、褒め称えるためのキーワードというのを一生懸命考えて用意してきたんですよ。だからみんなで褒め称え合いながら、みんなで幸せになったらそれでいいんじゃないですかね。市民活動ということの意味合いをずーっと緩めて、ほっこりできるような世界を見るとしたら、市役所の人も企業の人もこういう所に集まってくる人がお日様の下でぽかぽか日向ぼっこをしているような気分になって、みんなあそこに行くと幸せな気分になれるから行ってみようかというふうに、ちょっと世の中に疲れちゃったから僕らいってみようかというふうになるような空間作りがあると、人が集まってくるんじゃないですか。そのいっぱい人が集まってくる中から、ぽぽらの後継者みたいな人も出てくるんじゃないですかね。僕のところに、里山のプロがいるんですけれど、彼が 専門教育を若い人にやろうとするんです。僕は彼にずっと言ってきました。「山は逆立ちしない。」と。「１人の人間に期待をかけたり、３人の人間に期待をかけてそこが立派に育ったら、世の中にいっぱい里山を守ってくれるような人たちが増えるんだという考え方はできないと思う。」と。「ちょっとだけ、里山に年に１回でも２回でも来て関わってくれる人がいっぱい増えると、その中にあなたの後継者になるオタクが出てくる。プロで通用するだけのオタク組が出てくる。」と。だから、まず里山大好き、ぽぽら大好き、ホタル大好きという人口をたくさん、なんとなく増やせばいいんじゃないかと言って、よく議論をしました。それでだいたい私が勝ちますね。いっぱい人が来るようになった中から、先生と言ってくれる 20 代、30 代が今出てきていますから。だから、やっぱり多くの人に希望を持ってもらうということはそうしたことじゃないかな。ハードルが低くていいんじゃないですかね。すぐに自分と同じようにやれる人を望みたくなるんだけれど、堪えてもっと柔らかくおおらかに行けばいいんじゃないですか。そう思いますよ。

参加者５

富永さんの言われたことにすごく感動というか、共感をおぼえます。最初に講演を聞いていて富永さんの立ち位置がよく見えなくて、わが町八王子ふるさと、そういう活動がメイン

だったのかなと思いつつだんだん話を聞くと、たくさん悔しい思いというか残念な思い、メッセージが届かなかったとかそういう話を聞いて、先ほどもぽぽらで皆さん市民活動をされていますが、ぽぽら大好きという人間が１人でも経験されればそれでよし、と結構ドライに割り切っておられるので、さすがビジネスマンの経験が生きているなと思います。私自身は安定所で、だいたい２万人近くと毎日雑談ばかりしてきて、その中で就職にあたってのノウハウとかを話してきました。というのは、私は企業で人事をしていたのでたくさんドライなリストラをやってきましたし、逆に、最後は自分もリストラで安定所に就職したんですけれど、今は市民後見人もやっていて、シルバー人材センターでもそこで働いているのではなくて、そこの職域開拓するため事業者をまわったりしています。私自身は人生 100 歳まで活動する、活躍するそういう時代だと思っています。私の尊敬する方で内橋克人さんという方がいて、富永さんと同じように阪神淡路大震災の時に時代が大きく変わったと言った経済評論家で、もう亡くなりましたけれど、命がまず大事、そしてエネルギーと自然環境、これをどう回すかということを言われています。富永さんの今回の話をそれに当てはめると、命というのはまさに我々人間です。エネルギーというのは市民活動の志だと思います。そして自然環境というのはいろいろな行政を含めた用意された人間の知恵。この３つを上手に生かして、100 歳までピンピンコロリはなかなか難しいですけれど、その前に認知症になる可能性が高いので、私自身は被後見人の方が亡くなるまで、骨を拾って埋骨するまでやるつもりで、仕事をやっています。今、私自身はある市民団体の理事会長をやっています。その方も同じような平均年齢 70 代なので、それでも老々介護もやむなしと。当然、後継者の問題もあるんですけれど、それは形をこうやって見せてぽぽら大好きというか、それでここには色々な活動をされている方がいるので、少しでも関心があればそちらの方と連携して、そうした中で後継者になる人が出てくるのかなと思っています。

参加者６

先生の話はよく分かったのですが、市民活動というのはやりたい人がやりたいことをやればいいんだというのが原則ということで、僕もそれは全くその通りだと思うんです。ところが、現実は組織を動かさなければいけないわけですよ。組織を動かしている人というのは、やはり想い、構想があるわけですよね。そういう想いと自分のやりたいとことがある人がたくさんいると思うんだけれども、ぶつかることがあると思うんですよね。食い違う所が。食い違ったときに、どういうふうに対応すればいいのか。その辺をお聞きしたいと思います。

富永さん

そういう時は私が大体遠慮をしてきました。意見というのは意見と意見の目線を揃えるか

ら衝突するんですよね。同じ次元で言うから。ここで僕が理事長であったとしても、あなたのやりたいようにやってもいい、あなたが上というふうに言うと、僕は下に潜っていることになる。その途端にもう喧嘩にならないですよね。それと、僕はもっと大きな志を持っているんだからというふうに、上に上がった気持ちになると、これもやりすごせるんですよね。だから次元を揃えるからぶつかるんですよ。次元を横に変えるか、向こうに変えるか、上に変えるか、下に変えるか。ぶつからない作業を私がやるんです。なぜぶつかっているのかを解決すればいいんですよ。そういうふうに訓練をしてきたんです。これはね営業でしょ。お客さんに勝ってはいけないんです。議論して勝ったらいけないんです。そこで極力値切られないようにして、相手がすごいと思うようにして、尚且つしょうがない、じゃあお前にも儲けさせてやろうかとお手盛りがくるように仕掛けなきゃいけない。お客さまが一番と言いながらちゃんと下で手を出すというのが営業なんでね、お金をもらえるように。それを無理やり取ると、向こうは腹が立つじゃないですか。だからそうじゃなくて、お前も会社に帰ったら組織があって、立場があるんだから、富永にもちゃんと利益を出させてやらないとかわいそうだから、というような気持ちにどうやったらお客さんになってもらうかということですよね。だからそればかりやっていたの、20 年間も。営業人生からすれば、地域においても営業をやってきたわけですよね。お金にはならないけれど、相手がいい気持ちになって人がいっぱい来てくれて、みんな嬉しそうな顔になることがなんか儲かった気分になるわけですよ。それの一番真ん中にいるスタッフの人たちと揉め事を起こさないことですよね。スタッフの人がどうやったら喜んでくれるか、僕が避けるんです。ぶつかって僕が勝ったら相手はペシャンコでしょ。相手に勝たれると私が腹立つでしょ。だからぶつからないように、ぶつかりそうだと思った時に、どこかに逃げるんです。自分の気持ちを納得させるという事をやるという技を身につけました。我慢はしません。ストレスになるだけだから。本当に腹が立ったということはありましたよ。政治で圧力をかけられて、黒を白みたいに言わされちゃった時なんていうのはもう腹が立ってね。三日三晩とにかく寝られないような思いをしたこともあります。だけど、その時にはその人の顔を見ないように、顔を見たら何か言いたくなって喧嘩したくなるから、その人と出会わないところに行くように逃げて歩きました。逃げるということで自分の気持ちを抑えました。人間は忘れる動物なのでいいんですよ。だんだん記憶は忘却の彼方ですから。年を取ってくるとだんだん忘れるのも早くなるしね。だから忘れるって幸せなんです。そのうちに腹が立っていることもまぁしょうがないかとなって、いい加減なものですよ。だから、とにかくストレスを溜め込まないようにしてきました。それと、街の中でフュージョン長池が世に出て行く時に、地域で嫉妬されるんですよ。マスコミが勝手に来て取材して勝手に書くんだから、僕のせいじゃないと思うんだけれど。お前は黒子だとか言っているのに、目立っていると言って怒られてね。次に議員にでもなりたいんだ

ろうから、今のうちに市議会議員の芽は潰しておかなきゃいけないという感じで、叩かれたり、色々な目にあいましたしよ。こいつらと一緒にやっていてもしょうがないと思って、そういう時に考えたのが僕は自分の事を平成の脱藩浪人と言っていました。藩というのは江戸時代の組織に見えたということですよね。今の時代、企業にいるということがある面、禄になるということです。飯にありつけるということです。だけど、それを放り出すと食べて行かれなくなるから、みんなそこにしがみつくんですよね。そういう人がほとんどですから、それが悪いわけじゃない。そこで一生懸命成果を上げてちゃんと貢献しているんだから。いいんですけれども、窮屈だなと思っています。僕が憧れた歴史上の人物が坂本龍馬だったんです。だから、平成の脱藩浪人と自分のことを言っていました。フュージョン長池は海援隊と言っていました。最後に、龍馬は海援隊そっちのけで、薩長連合に働きに出て、勝手に若い連中に任せて、京都に行って戻らなくなっちゃったりするんですけれど。海援隊という明治時代の株式会社を作っておいて、それをほったらかしにして歴史の転換をやるんですけれども。結局僕はフュージョン長池にも飽きちゃって、２代目の理事長がそのことをよく分かっていまして、「富永さん、綺麗事を言っているけれど、飽きたんでしょう。」と言うから、そうだと言っていました。創業者に向いている人間ってそういうのがあるんですよ。一つ仕上げていったら退屈し始めるんだよね。革命的に出来ているから。だから、２代目は僕とは全く違う穏やかな人物を選びました。僕は自分の事を表現する時に、エンジンむき出しの自動車とも言っていました。馬力があってバンバン走ることが得意なあまり周りをケアしていない、自分の思いを達成したいということです。自分の思いを組織の中で、何で縛られなきゃいけないんだ、もっとみんなのやりたいを爆発させてほしいのに、日本人ってもっともっと能力がいっぱい出るのにというのが悔しかった。だから、腹が立たないんですよ。みんながあれやりたい、これやりたいと言ってくると嬉しかった。価値観がちょっと違ったというのがありますね。それで、ある程度行けるようになったら、さっさと渡してね、今日もそうですけど、最後はこうやって語りながら、花咲か爺をやって死のうというのが私の人生の目標だったので、ほぼ人生の目標の通りに生きてきているので、僕は自分のことをものすごく幸せな人間だと思っています。これを究極の自己満足型と言っているんです。自分なりの精神ケアの力というのが、譲って負けではなくて、もっと大きい夢が自分の想いとしてあるんだからということを価値観として持つと、一点で衝突するということにならなくなる。「あー馬鹿馬鹿しい。」という気分になる。積極的に聞いてあげたり、ずらしてあげたりすることが、より大きな自分の幸せでもあるということです。一生懸命、そういうふうに物事の考え方を組み立てていけばいい。

生越（ぽぽら春日部アドバイザー）

打合せでいろいろお話しさせて頂いた時に、市民活動センターの役割というか、今後のことでお話しをされた時にヘルプデスクみたいなものを、例えばちゃんとした事業継承とボランタリーの団体向けにというお話しがあったので、それを是非紹介して頂きたいと思います。

富永さん

冒頭でお話ししたように、これからの支援センター、中間支援をするところに求められるのはやはり会員の団体の方々が一番困っていることを解決できるかどうかですよね。僕がNPO を始めた時代というのは 20 年以上前ですから、NPO 法ができて 1 年で作ったものですから NPO って何ですか、という話から始まった。それで色々段階があったわけです。NPO の設立の仕方を教えてください、事例を教えてください、どうしたらこうなるんですかなどいろいろありました。今はもう 20 年経ったので、やっぱり世代が変わろうとしているんですね。その世代の変わり方というのが、今一番支援センターに求められていると思うんです。だから「ぽぽらに二つのヘルプデスクがあったらいいですね。」と事前の打ち合わせの時に話をさせてもらいました。ボランティア団体がこのままいてすっきりと終わりにしたほうがいいのか、ピンピンコロリが最高なのか、それとも次世代の人に繋ぐのがいいのか、こっちの人からこうやって持ってきて植え替え方式でもいいのか、そのようなことをアドバイスするスペシャリスト。それから、こっちで経営コンサルタントのように相談を受ける。中小企業でも事業継承ができないところを、銀行なんかがコンサルタントを育成していますよね、事業の継承者がいない人は、ここに来て相談してくださいというふうに。そうでないと銀行も生きていけなくなりますよね、地域金融は生きて行かれなくなる。それと同じように、支援センターに支援する相手がみんないなくなったら、あんたらいらないと言われるだけですよね。だから、会員団体の人たちの NPO 法人が生きていけるように、2 代目、3 代目と回るように、ヘルプデスクが育成しなきゃいけない。それをボランティア用のヘルプデスクと、NPO 法人用のヘルプデスクと 2 つ作ったらどうですかという話をしました。それを作るんだったら、僕も余分なことを提案しているわけだから自宅から Zoom だとか、Teams だとかできるようになったので、悩んじゃって分からなくなったら、自宅からだったらお金にならなくてもいいからヘルプデスクのヘルプデスクをやってあげます。やはり、死ぬまでに何かを意地を張って世の中が良くなることに貢献しぬいて、せめて死ぬ時にちょっとは俺もやったと思って死ぬ間際の究極の自己満足をやりたいというふうに思っているんですけれどね。気持ち悪がられるけれど、にたーっと笑って、バイバイと言って死にたいと、そういうイメージをこさえているんです。

生越（ぽぽら春日部アドバイザー）
埼玉で団体の継承とか団体の終活とか、こういうことに真面目に向き合っている中間支援とか市民活動センターってないので、是非それを皆さんと一緒に相談にいきたいと思います。

富永さん
これを提案したのは初めてなんです。NPO とか市民活動団体の事業継承を皆大真面目に考えているんだけれど、どっちのアドバイスをしているか分からなくなるんですよ。ボランティア団体にもっとお金を稼ぎなさいとか言い始めちゃうんだよね。そうするとボランティア団体じゃなくなっちゃうじゃないですか。だからおかしいなと思ったんです。この話が来た頃にちょうど自分の気持ちも吹っ切れたんです。ボランティアはボランティアだから美しいんです。法人経営は法人経営をやり抜くことが重要なんです。だから法人経営なら法人として次世代に送れるように経営していくことが大事です。A と B を完全に分ける事だというふうに思ったところですっきりした。これをきちっと言い切ったというのは、僕も初めてだし、おそらく僕が知っている限り他でここまで言い切っている人はいないと思うんですよ。

参加者７（オンライン）
最近、いつの間にかマンションとか地域の自治会でも、誰かが亡くなった時に回覧板も回ってきていないし、そういう提灯も出ていないし、三軒隣でも誰が亡くなったか分からないんです。私だけの経験ではなく、他からもそういう声を聞いているんですよね。ですから、お聞きしたいのはそういうふうな時代の流れになってきているのは何とかならないのか。個人情報とかそういうものが一人歩きしすぎて、市役所やぽぽらにも色々お世話になっているけれど、そういうことを色々聞くとそれは個人情報だから云々と言われてしまう。私はそこら辺にマイナスがあると思うけれど、先生の所見を伺いたい。

富永さん
私がやってきたことを明確に二つ言います。一つは巨大なお祭りを仕上げて、夏祭りをやってきました。これは僕の原点が阪神淡路大震災ですから、いざ大きな震災が自分の町で起きた時に個人情報が保護されているので誰も知らないし助けてあげることもできない、助けてもらうこともできないという環境を打破したかった。そこでイメージして頂きたいのは、焼きそばを作っている人が包丁を使ってキャベツを切っていると、その人の氏素性が全くわからない状態で包丁を使っているなんて恐ろしいことはないんですよ。それをお祭りをやる

ことで、昨日まで同じ団地に住んでいても口もきかなかった連中がですね、何号棟の何号室に住んでいる誰々といいますというふうに言って仲良くなると、勝手に電話番号なんかを個人的に交換するんですよ。これは個人と個人のことですから別に大丈夫ですよね。それを20年を超えてやってきた。そうするとかなりお知り合いができてですね、一緒にゴルフに行くおやじがいたり、駅前の居酒屋に一緒に酒を飲みに行ったり、いろいろなことをしてくれるようになりました。それともう一つは、私は110世帯の分譲マンションに住んでいるんですけれども、その中で私が初期の理事をやって一番最初に打ち出したのがご近所懇親会というおやじの会を作って、みんなで持ち寄りでお金は払わない代わりに飲みたいものと食いたいものを全部持ち寄って、3ヶ月に1回ぐらいの程度でゆったりと雑談をして飲み会をやるというのを団地の集会所でやるようにしました。このことによって、大規模修繕なんかをやる時にほぼ揉め事がないんですよね。意見を言う人はいても、穏やかにお互いにみんなで意見交換ができるようになりました。だから、民間は行政のように名簿が作れるわけではありませんから、とにかく仲良くなっていただけるような関係の場をいっぱい用意するということが重要なんだと思って、二つやってきました。特に団地内で揉め事がなくなったという事が一つと、もう一つは大きなお祭りをやることで、そこで知り合った人たちが気の合う仲間たちで、勝手にいろいろな小さなグループを作って仲良くできるようにしました。お祭りという巨大なマザーツリーのもとに、子供のような会がいっぱい多様に育ったというふうに表現をしております。ただそういうところを地道に続けるしかないと僕は思っているんですけれどね。それも20年を超えると成果が見えてきます。

ぽぽらフェスティバル2021　活動の実演

12月4日（土）12:00～14:00

春日部市文化連合会　@共同事務室　会議室５

春日部マジッククラブ　@会議室3

アートチャイルドケア春日部子育て支援センターたんぽぽルーム　@会議室6

ぽぽらフェスティバル2021　活動の実演

12月4日（土）16:00～18:00

ハンドセラピー・彩　@共同事務室

御風印會　@会議室5

日時		会場	実施団体	実施内容
12/4	12:00～14:00	会議室3	春日部マジッククラブ	マジック実演
		共同事務室	春日部市文化連合会	舞踊、民謡、バレエ、琴
		会議室5		押し花、水引工芸、華道
		会議室6	たんぽぽルーム	クリスマスリースづくり
	16:00～18:00	共同事務室	ハンドセラピー・彩	ハンドセラピーの説明とケアの実技
		会議室5	御風印會	印鑑制作の説明　消しゴム印の体験教室
12/5	12:00～14:00	会議室3	自彊術普及会	活動紹介、体験教室
		※受付前	Kas-Biz&JAGDA	動画プレゼン、活動実績、企画アイデアプレゼン
		会議室5+6	S-netサポーターズ	家族みんなで大型カルタ大会
		共同事務室	庄和マジッククラブ	マジック実演

ぽぽらフェスティバル2021　活動の実演

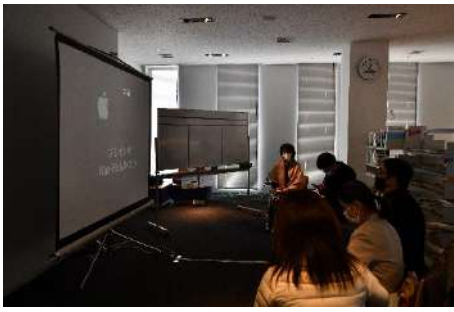
12月5日（日）12:00～14:00

庄和マジッククラブ　@共同事務室

S-netサポーターズ　@会議室5+6

自彊術普及会　@会議室3

春日部コミュニティビジネス倶楽部Kas Biz
日本グラフィックデザイン協会（JAGDA）埼玉地区　@４F受付前



ぽぽらフェスティバル2021　動画見本市

ぽぽらフェスティバル2021
チャンネル登録者数 136人

チャンネルをカスタマイズ　動画を管理

ホーム　動画　再生リスト　チャンネル　概要

アップロード済み　並べ替え

ぽぽらフェスティバル2021　動画見本市

◆参加団体（提出順）

春日部こどもライブフェスタ実行委員会	春日部C工房
日本グラフィックデザイン協会 埼玉地区	Calm Earth
かすかべ案内人の会	彩の国環境大学修了生の会
春日部市コミュニティ推進協議会	KUBIREサークル春日部
春日部コミュニティビジネス倶楽部 Kas Biz	健康クラブ
不登校を考える親の会・かすかべ	しっぽとかぞく
日本セラピューティック・ケア協会	埼玉県社会保険労務士会 春日部支部
ハンドセラピー・彩	スパングリッシュクラブ春日部
春日部シニアふれあいPCサークル	ハンドセラピー輪
草加友の会春日部支部	緑の地球クラブ
春の子会	春日部おもちゃの図書館うさぎとかめ
ふれあい大学寺子屋パソコンクラブ	埼玉政経セミナー
昔の子ども遊びいちごの会	S-netサポーターズ
春日部観光ボランティアの会	春日部市文化連合会
春日部まちづくり応援団	春日部おもちゃの病院
新日本婦人の会春日部支部	春日部市ボランティア活動推進連絡会
二桜会	彩の国いきがい大学春日部学園24期校友会
国連NGO WFWP埼玉第5連合会	ボーイスカウト春日部7団
ヒッポファミリークラブ春日部	すくっとKASUKABE
相続対策を考える会 春日部	春日部マジッククラブ
春日部地区稲門会	紫藤太鼓
グローバルファミリー	

ぽぽらフェスティバル2021　活動の展示

12月4日～16日

かすかべ案内人の会

ちりめんクラブ

御風印會

ハンドセラピー・彩

健康クラブ

春日部市文化連合会

しっぽとかぞく

ぽぽらフェスティバル2021　活動の展示

12月18日～1月8日（12/29～1/3休館）

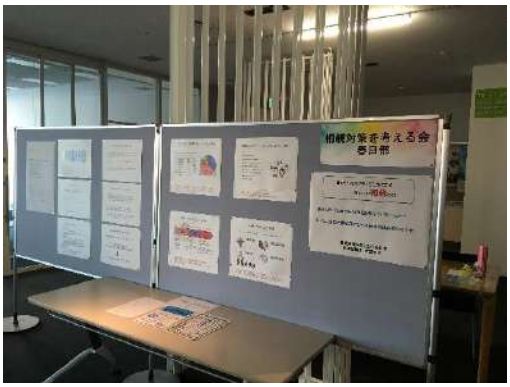
彩の国いきがい大学
春日部学園24期校友会

ハートウェア倶楽部

春日部まちづくり応援団

春の子会

春日部五行歌クラブ



相続税対策を考える会春日部

認知症の人と家族の会「春日部の集い」

ぽぽらフェスティバル2021　活動の展示

1月10日～22日

春日部市ふれあい大学校友会
旅行クラブ

ボーイスカウト春日部9団

ハンドセラピー輪

学校図書館を考える会春日部

彩の国環境大学修了生の会

春日部おもちゃの図書館
「うさぎとかめ」

不登校を考える親の会・かすかべ

ぽぽらフェスティバル2021　活動の展示

1月24日～2月5日

春日部市ふれあい大学校友会
ウォーキングクラブ

国連ＮＧＯ ＷＦＷＰ埼玉第５連合会

春日部工芸協会

春日部点字サークル

草加友の会　春日部支部

ぽぽらフェスティバル2021　活動の展示

２月７日～19日

ガールスカウト埼玉県第26団

ボーイスカウト春日部7団

春日部九条の会

NPO法人まちづくり協議会・元気塾

公益社団法人自彊術普及会
春日部支部

春日部観光ボランティアの会

ＮＰＯ法人日本フラワーデザイン推進協会

ぽぽらフェスティバル2021　活動の展示

２月20日～3月6日

平和・民主・革新の日本をめざす
春日部の会

春日部C工房

春日部おやこ劇場

春日部こどもライブフェスタ実行委員会

春日部シニアふれあいPCサークル

ふれあい大学寺子屋パソコンクラブ

キルトラボ　ハンプティダンプティ

ぽぽらフェスティバル2021
実行委員会

委員長
吉田　理子（一般社団法人S-netサポーターズ）

副委員長
水野　順一（健康クラブ）
山口　英治（健康クラブ）
吉田　徳志（春日部まちづくり応援団）

委員
新井　恵美（春日部おやこ劇場）
金成　悦子（学校図書館を考える会・春日部）
戸枝　弘朗（SA春日部グループ）
中川　俊廣（いきがい大学春日部学園第23期校友会）